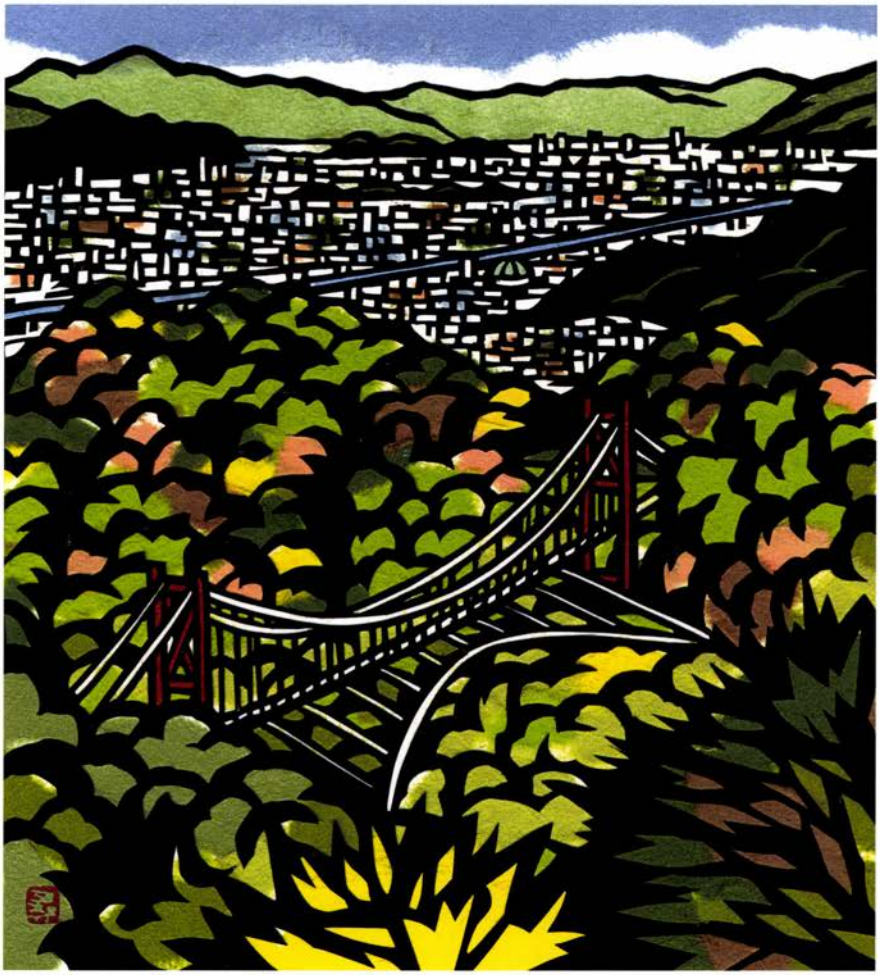
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十六年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇五一号



日川協加盟

No.1051

十二月号

第三回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第三回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題二句　共選）

課題吟
「来　る」　津田　暹（川柳研究社）
新家完司（川柳塔社）

「ポーズ」　木本朱夏（川柳塔社）
川上大輪（川柳塔社）

雑　詠
大西泰世（樹々の会）
小島蘭幸（川柳塔社）

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料　一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切　**平成二十七年二月二十日（金）消印有効**

送付先　〒543－0052
大阪市天王寺区大道一－一四－一七－二〇一
川柳塔社　誌上大会係　宛
TEL／FAX（〇六）六七七九－三四九〇

賞及び発表　各題秀句に賞呈　発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

平成27年　本社句会　開催日程表

会場：ホテルアウィーナ大阪

開催日	時間	会場
1月7日(水)	13:00～17:00	葛城の間(全)　3F
2月5日(木)	13:00～17:00	葛城の間(全)　3F
3月5日(木)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
4月7日(火)	13:00～17:00	高津ガーデン
5月7日(木)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
6月5日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
7月7日(火)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
8月7日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
9月7日(月)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
10月3日(土)	同人総会 10:00～11:00	生駒　3F
第21回 川柳塔まつり	句　会 11:00～17:00	金剛(中西)　4F
	懇親宴 17:00～20:00	葛城(全)　3F
11月6日(金)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F
12月7日(月)	13:00～17:00	金剛の間(東)　4F

寒中見舞募集

○本誌　平成27年2月号掲載
○締切　12月20日

川柳塔社事務所　宛

無名の酒徒

小島蘭幸

安芸の小京都たけはらの秋の夜の祭り、「情景の路」が10月25日～26日に開催されました。江戸時代の繁栄を今に伝える古い町並みを、竹筒からあふれる蝋燭の灯りで幻想的にライトアップするのです。江戸期の町並みと竹灯りは本当に美しいです。

この祭りの二日間、イベントの一つとして町並みの一角に短冊を飾ることが出来るのです。今年も竹鶴酒造の玄関の横の格子に飾らせて頂きました。飾ってる間、ほんの数分だったと思います。竹鶴酒造に次々と観光客がグループで訪れるではありませんか。そしてその中の一人が必ず聞かれるのです、「ここはマッサンの生家ですか」と…。

現在放映中のＮＨＫ連続テレビ小説「マッサン」は、ニッカウイスキー創業者・竹鶴政孝とリタ夫人が、人生を本物のウイスキーづくりに捧げた情熱と信念の軌跡なのです。短冊を飾った後、私は鳥取県川柳大会の開催される米子市へ車で出発しましたので、幻想的な祭りを見ることは出来ませんでしたが、マッサン効果で今までで一番の人出だったそうです。マッサンの生家、竹鶴酒造に飾らせて頂いた川柳も多くの人が鑑賞されて、写真に撮る人もおられたという事です。

我が墓碑に無名の酒徒と刻むべし　伯峯

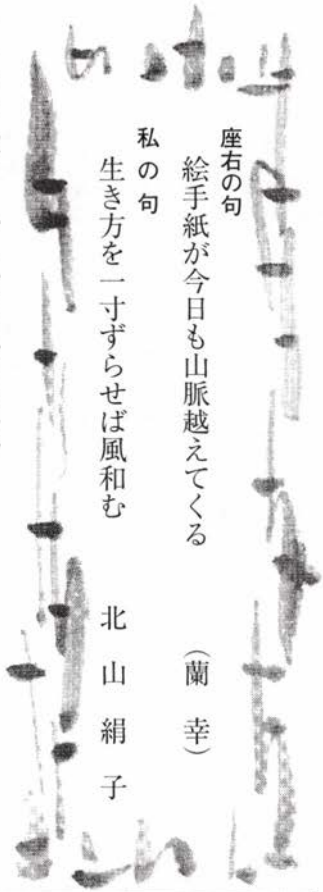
8枚の短冊の中の1句です。酒造場に飾らせて頂くのだからと、ふさわしい作品を昨年から飾ることにしたのです。石原伯峯先生は職場の上司だった川柳塔の先達、浜田久米雄と一緒に行った広島の小料理屋で麻生路郎師の

さけとろりとろり大空のこころかも　路郎

短冊を見て川柳が好きになったとよく話されていました。酒と川柳をこよなく愛された伯峯先生の無名の酒徒は多くの人に感動を与えたと信じています。ちなみに昨年は新家完司氏の1句を飾らせて頂きました。

酒という字が夕暮れにぽっと点く　完司

11月8日の高野山の川柳塔碑合祀祭から帰ると、東広島市西品寺の伯峯先生の句碑にお酒を供えたいと思います。



座右の句

絵手紙が今日も山脈越えてくる　（蘭　幸）

私の句

生き方を一寸ずらせば風和む　北山絹子

川柳塔　十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「星のブランコ・交野市」

■巻頭言　無名の酒徒……小島蘭幸…（1）
漢字と遊ぶ……竹治ちかし…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（4）
川柳塔の川柳讃歌 ⑳……木津川　計…（43）
自選集……（44）
温故知新……西出楓楽選…（48）
水煙抄……麻生路郎…（69）
新川柳鑑賞 ㉞……（70）
西尾　栞句抄……吉村侑久代…（71）
英語 de Senryu ㊱……（72）
誹風柳多留一二篇研究 18……新家完司…（74）
■句集紹介　「再会Ⅱ」小島蘭幸 著……弘津秋の子…（76）
「再会Ⅱ」を読む……小栗清吾…（78）
江戸を楽しむ ㉔……

漢字と遊ぶ

竹治　ちかし

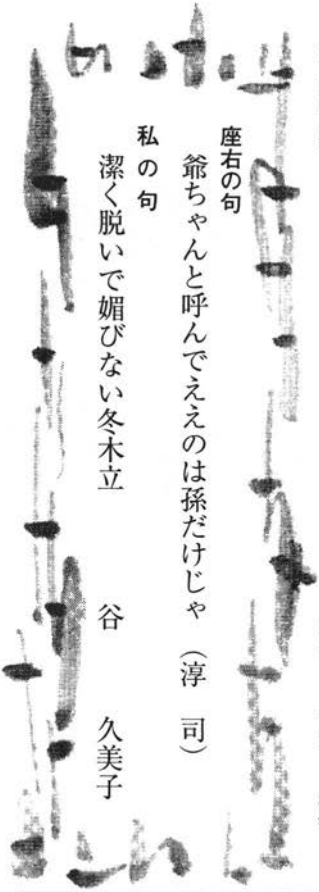
以前、読書感想文の全国入選に、「広辞苑を読んで」というのがあり不思議に思っていたのですが、川柳に関わっているとよく辞書を引くことがあり、何かその心が解ったような気がしました。

ある言葉を調べていると、ある言葉がヒントになって又ある言葉へと次から次へと興味が湧き、好奇心が広がっていきます。

そして今まで正しいと思って使っていた漢字が間違っていたことにも気づいたりします。たとえば、食中りを食当りとか、頂戴を頂載、完璧を完壁、玉の輿を玉の興と間違えて覚えていたことも。

また面白いことでは昔、中国から漢字が伝わって来たときに、誤って漢字と読みが入れ替わって伝わったものがあるようです。一つは豆腐と納豆、これはこれで正しいと言う説もありますが、何故か私はとうふは納豆、なっとうは豆腐の漢

民族の詩歌(30)……三好専平…(79)
愛染帖……新家完司選…(80)
檸檬抄「年忘れ」……牧野芳光・古久保和子共選…(84)
一路集（「狙う」……吉岡修選…(87)
「コーナー」……山岡冨美子選…(88)
「枝」……小沢淳選…(89)
初歩教室「土壇場」……山口光久…(90)
川柳塔鑑賞……水野黒兎…(92)
水煙抄鑑賞……福西茶子…(94)
せんりゅう飛行船(48)……新家完司…(95)
『麻生路郎読本』余滴(24)……桒原道夫…(96)
十一月本社句会……(100)
高野山川柳塔碑合祀報告……(104)
各地柳壇（佳句地十選／太田昭・古今堂蕉子）……(105)
十二月各地句会案内……(118)
柳界展望……(120)
第29回 国民文化祭・あきた2014 入選作品……(122)
■編集後記……朱夏・まつお…(124)



座右の句

爺ちゃんと呼んでええのは孫だけじゃ　（淳　司）

私の句

潔く脱いで媚びない冬木立　谷　久美子

字を当てる方が正しいような気がします。

そしてもう一つ、泊まると晒すです。日が西になると泊まることになりますし、水（さんずい）につけて白くすることは晒すことですので、宿泊のとまるは晒、水でさらすのは泊の漢字を当てるのが正しいのでしょう。

以前、「海海海海海」と書いて「あいうえお」と読めること（海女のア・海豚のイ・海胆のウ・海老のエ・海髪海苔のオ）を知り驚きましたが、それよりも凄い文字があることを知りました。

それは「生」という文字で日本の漢字の中では一番読み方が多いそうです。一音の読みでは、生きる、生む、生い立ち、生糸、早生、晩生、鈴生り、生え抜き、芝生、草生す、芽生えの十一通り、そしてそれ以外では、生憎、生埋め、生贄、生れ付き、生粋、生徒、平生、一生、往生、生業、生意気、埴生、弥生そして寄生木と。ですから「生生生生生、生生生生生」と書いて「遺跡踏む、はてな追う」とでも読めますから楽しくなってきます。

川柳塔

小島蘭幸選

同窓会女子会になる日が近い
応援は二の次ビール飲みまくる
仰向けば口開き俯けばよだれ
平成の子に戦争は他人事
丸腰と粋がるスマホ使えぬ士
親しき友病床にあり黄泉にあり

堺市　村上玄也

線香を立てるまいにち親不孝
自画像に皺を百本描き入れる
銀行に来るはせいぜい小金持ち
めでたいと言っておくしかない長寿
友だちの病気肴に飲んでいる
湯豆腐は看護婦さんのような顔

弘前市　高瀬霜石

各停で行くと日本が広くなる
退院の軽さで急ぐパスポート
峠越えひらりと肩に秋が降る

枚方市　伊達郁夫

涙こそ女の武器と娘に教え
新聞の裏を見破る鼻めがね
花束を挑戦状として贈る

鳥取市　夏目一粋

年ごとに勝てる相手が減ってゆく
どう知恵を出しても貯金できぬ老い
辛いのは母の嗚咽のほかにない
開けている心のとびら閉められる
心中をポロポロこぼす人の良さ
現実にもどれば笑いなど消える

横浜市　菊地政勝

獺祭の果てに一句も浮かばない
言い勝ってすっきりしないひとつ屋根
そのうちに月の持ち主あらわれる
傷のある人の話が奥深い
隣国は避けて総理の旅行好き
ここにきて生命線が伸びてきた

和歌山市　木本朱夏

乗り換えの駅しみじみと虫の声
みちのくのりんごの匂うとき ひとり
ゆっくりと噛んでゆっくり老いてゆく
中腰でひょろひょろひょろと世を渡る
違和感がない老人の群れに居て
曲がり角猫がゆっくりふり向いた

大阪市　谷口義

母さんの一の子分は姉だった
繰り上り長女になった姉である
四十年動いたことのない碁盤
ちょっと横向いている間に十二月
水分を抜くとプライドだけ残る
おばあさんも長くやっていると厭きる

藤井寺市　太田扶美代

蕎麦枕あした着て行く服のこと
預かっていたのは傷ついたハート
遠過ぎぬよう近すぎぬよう投げる毬
思い出をファイルするのはいつも秋
のど飴で治ったみたい偏頭痛
笑い袋なのに涙が混じってた

橿原市　居谷真理子

遠き雷逢いたい人に逢いに行く
忘れたらいいよと引き潮が言った
泣きました蒲の穂綿にくるまれて
座らせて下さいあなたの縁側に
好きやからあんたのアホが移ってん
神さんも時々オツなことをする

河内長野市　山岡冨美子

人間という字を戦争が壊す
欄外で右往左往をする影絵
鏡から若さの不在証明書
ピロリ除菌すこし毒気も抜けてきた
象の鼻キリンの首が探す明日
十七歳地球を救うかも知れぬ

出雲市　多久和敬子

若いネと褒めて百歳輝かす
団体の中で小さくなって居る
ありがとう悲しみ流す雨が降る
野菜高歪な茄子が喜ばれ
ゆっくりと私の花を咲かせよう
ふる里はソフトな風が吹いている

米子市　吉田陽子

戦後史を歩み続ける古稀の秋
プロローグでした階段転げた日
群れないでいる靡かないようにする
ギーコギコ今のわたしのリズムです
ぶらりと行かず呼ばれた時に行く実家
親子とはいつも違った景色見る

ひとりきりで月をみること増えました
どうにもできぬ後悔なんてしないこと
仏壇を閉めて身内の内緒ごと
重くなる話へお茶を替えに立つ
線香を足して結論まだ出さぬ
ペアのふとん移せば別居した気分

橿原市　安土理恵

こぼれ萩生めよ増やせは知らぬこと
ねぎ坊主君たちスマホ依存症
まっ白のブラウス情緒不安定
おおむね赤い薬瓶の蓋
銀メダルまだ成長の余地がある
洗濯板でごしごしと流す鬱

京都市　高島啓子

背中押す風からもらうバトンパス
ドキドキを鳴らして君に逢いに行く
四ッ葉にもおまじないにも裏切られ
ため息はひとつでお砂糖はふたつ
羊水の中で泳いで一人っ子
世界中敵に回して赤い薔薇

大阪市　栃尾奏子

手を少し貸して優しい人になる
未練などないよと見栄で肩を張る
まだ過去を引き摺るクセが直せない
強面の人に優しくして貰う
習ったことはないが上手に物忘れ
的を射た指摘を外野から貰う

高槻市　片山かずお

刺青のように張り付く美しい夜景
あぶらぎった会話にレモンひとしずく
甘言が通り苦言は通じない
見えぬ糸無数に絡みあう縁
痛風が襲うほとぼり冷めたころ
時を待つマグマが地下で渦を巻く

枚方市　藤村亜成

板さんは錆びたジョークに逆らわぬ
あと引かぬ別れ上手でまだ独り
ひと坪の庭広くする石ひとつ
醒めた目で醗酵中の反抗期
お茶受けに古漬けが合う被災の地
信仰の山に灰が積る無念

堺市　柿花和夫

未だ生きる新語辞典を買ってくる
半熟の中途半端が僕に合う
郷愁を誘う理科室の骸骨
うっちゃりの快感悪い癖になる
愛読書無いが本棚埋めてある
視線が集まり失言だと気付く

鳥取市　森山盛桜

大層なことは言わない解説者
仕事しています机に俯せて
商売に向いてはいない家系です
台風も僕のツムジも左巻き
健康でなければ過疎に住まれない
恋もした子供もできたそれでいい

倉吉市　牧野芳光

チョコパフェはべっとり河内音頭味
企みが読まれて舌先が赤い
可能性秘めてマーブルチョコだった
アラビアンナイトに浮かぶ赤い月
ころがりは止まらず雨天決行す
感動が欲しい近ごろ泣いてない

松江市　石橋芳山

仕事だと思えば家事も苦にならぬ
にんげんも偏西風も蛇行する
ゆっくりでいいよと上手く急かされる
栗だけは中国産も食べている
発電に生かせばすごい那智の滝
つじつまを無理に合わせてから歪む

鳥取市　岸本宏章

秋の蝶ひらり恋のその後は知らぬまま
耕せば秋の実りが降ってくる
電池切れそうがむしゃらに来た命

吹田市　山本希久子

わたしと私たたかっている怠け癖
詩を読む詩を書く心乾かぬよう
平和な絵女に涙あとがない

香芝市　大内朝子

燃えて散るいろは紅葉もわたくしも
皺くちゃの顔がいとしく好きになる
神さまの試練またかと受け止める
想像の翼で飛んでゆく宇宙
打ち解ける心笑顔になって咲く
心まだこどものままで亡母を恋う

鳥取市　福西茶子

絶食か走るか目標は五キロ
孫乗せる馬だ腕立て伏せ励む
杖になるだけの背丈が無い妻で
負けん気は死ぬまできっと捨てられぬ
頬杖を突いてぼんやり聞くニュース
我慢ガマンとさっき心に決めたのに

八尾市　髙杉千歩

ウィンドウ背なの丸さに目を逸らす
ルビなしで読めない名前親のエゴ
さて何処にエンディングノートの置き場
戦火潜ったおかげ肝は坐ってる
要介護3で米寿の恙なし
なるようになるさデイサービス送迎

明日のため研いでいました糸切り歯
情報の海へ釣り糸垂れておく
行司の軍配を否定するビデオ
スコールを被るか弱い糸蜻蛉
エアー少し抜いてあなたと一緒する
ロボットに脈をとられて逝く後期

青森県　松山芳生

珍客へ模様替えしてウェルカム
手厳しいひと言意欲満ちてくる
発想を変えたら翔べるかも知れず
愛いっぱい詰めた封書が舞い降りる
開発はやめてと樹々の声がする
迷う心を癒してくれる駅がある

和歌山市　松原寿子

自然がおこるにもちゃんと理由がある
十月号のバラは満開塔まつり
ウェディングブーケ父や母ですかすみ草
呆け防止父は金魚を二匹飼う
今更と思いながらも習字塾
ゴミ出しは僕の仕事とほぼ決まり

西宮市　緒方美津子

蝸牛誘ってバスに乗り遅れ
宇宙からこの頃母のテレパシー
逞しく曾孫の足が秋空(てん)を蹴る

出雲市　伊藤玲子

バッサリとキャベツ腹臓など無いわ
ほどほどを忘れ大きな傷を負う
塔の祭り今年も逢えたねと笑顔

寝屋川市　籠島恵子

考えてはいけない時もある浮世
切り上げる言葉が少しうまくなる
顔はもう三四の次になってきた
石なんて無かったけれど躓いた
忘れたふりしたからうまくいっている
台風の中を出てゆくとはなんぞ

羽曳野市　宇都宮ちづる

台風一過竿の雫にホッとする
締切りがあるからリズム良く生きる
一粒も残さず食べる里の米
十月に買うと割引あるおせち
一年の褒美に第九の切符買う
お誘いが重なる秋のカレンダー

鳥取県　細田裕花

窓開けてキンモクセイの風招く
夕焼けが癒やしてくれる良き疲れ
爪先の競争心がちびている
ホイホイと子どもへ送る米その他
泡立ち草頑張り過ぎて嫌われる
友情が満ちて女子会おひらきに

出る杭は打たれ世間に認められ
僕の城万年床に古雑誌
年金も大中小の暮らし向き
人生の裏を知ってる古時計
星条旗に巻かれた梅のおむすびか

札幌市　小沢　淳

披講する前に喉アメなめておく
断捨離の候補優勝楯カップ
ゆるキャラは町の財政語らない
モナリザの怒った顔も見てみたい
甘党のくせにお酒の句が上手い

札幌市　三浦強一

好きですと低く囁く片想い
中国語しゃべるウナギを売る老舗
あの事は心の襞に秘めておく
お開きの前に逃げ出す只の酒
ロボットに美女が触れるとショートする

黒石市　相馬一花

山の神動かずに居る神無月
災害のこんなにいたんだ専門家
虹の色八色に見えて恋癒える
土曜日に二円切手がもどかしい
還暦を過ぎて新米同窓会

弘前市　浅田隆樹

お岩木を背に高らかにりんご節
指定席とってあるのに急かされる
観光地図B級グルメ花盛り
美人ほど薄い化粧をするらしい
曲がり角みんな涙の跡がある

弘前市　稲見則彦

筋力をつけて百歳夢の橋
迷い捨て覚悟の努力杖と生き
新サンマ福福焼かれ夕餉膳
便利菜を植えてこころの旬野菜
人生の終活の声どっこいしょ

弘前市　岡本花匠

十六夜のなんと清らか神無月
出雲では神々集め御祝儀が
地球儀のうらでは神の名で戦
九条がノーベル賞となった夢
軒うらに空き家を残しツバメ去ぬ

弘前市　今　愁女

クラス会サプリメントで競い合い
酒が出ていよいよ知恵が湧いてくる
太陽光金をかけても未来見え
ドナーカード夫婦でサインうまい酒
意志弱い人がいるからタバコ税

弘前市　須郷井蛙

弘前市　高橋洋子

羽振り良い話の中に見る根性
待って待ってチャンス逃がした蝉の羽化
献立のヒントを貰うレジの列
アナログの話で弾む老人会
不発弾未だ戦禍が眠る町

弘前市　福士慕情

新聞に腹を立ててる虫眼鏡
妻の目を盗んで少々塩を足す
裏のある人には見えぬ楽天家
泥人形人の涙で崩れだす
友の影馴染みの店に置いてある

さいたま市　星野育子

着飾ったが言葉は普段着のまま
三択が苦手でジャンケンも弱い
頭はこう使えとスキマビジネス
イヤなものはイヤダメはダメ教わる
公園の鳩にもいるらしいタカ派

東京都　岸野あやめ

親と子の描く未来の絵は違う
午前二時手相つくづく見る不眠
情熱の紅葉も老いて散りゆくか
内視鏡検査で増えた物忘れ
締切りが近くて風邪を忘れてた

東京都　伊勢田毅

火山灰浴びておんおん神社泣く
喧嘩ルール覚えうずうずひとりっ子
増税へ総理思案の日が迫る
諸行無常生簀の鯛が舟盛に
富士噴火じわり身近になってくる

横浜市　小野句多留

半日をああだこうだと句にならず
祝宴のひとこと余分が多過ぎる
生傷が絶えぬ力士の格闘技
散策に添乗員をナビにする（桧原湖）
スマホ持つ自分に役立つことがない

富山市　島ひかる

火の国に安心出来る山は無い
岩手山裏も表も見て下山
亡き人の面影偲ぶ恐山
左派と右派ともだちに持つヤジロベー
五〇〇〇句の中にあなたの名を見付け

可児市　板山まみ子

難儀でも美味い食事を作る幸
怒ってる御嶽富士も何時の日か
怖いもの火山も入れるよう願い
飲み会にやりくりつけてまた出掛け
分業がうまく行かない家事雑事

犬山市　金子　美千代

よく動き食べた笑った二重丸
夜降って朝止む雨がありがたい
オブラートに包んで苦言申し上げ
疲れたらゴロゴロすると決めた貨車
お世話になるばかり感謝の塔まつり

犬山市　関本　かつ子

今年だけ書こう返事のない賀状
恩人の電話に倍のオクターブ
幸せはきっと今だろすぐ眠れ
茶碗蒸し付いて落ち着く寿司ランチ
物忘れおでこ擦ると思い出す

京都市　清水　英旺

黄昏の身の程を知るきのうきょう
チラシ配りもらってあげる人助け
さぞキレイだろマスクの女歯医者さん
何となく丸めこまれてる気分
駄目なものは駄目一本軸を貫いて

京都市　西村　益子

にこにこと元気な人に輪が出来る
物じゃなく心大事に生きて行く
松茸ごはん味わってますしみじみと
ミンチ料理のレシピ娘から届く
仏壇にリンゴを三つ亡父の顔

京都市　藤井　文代

反対の頬を出すほど気力ない
法の隙ゆく食品は自己管理
お互い様見過ごす気持やっとなる
赤信号自分に戻るチャンスかも
楽しいと言えば願いが叶いそう

京都市　桝本　宏子

うどん好きとパスタ好みに温度差が
神仏何はともあれ母の朝
長々と自慢話は犬のこと
夫逝く乗り越えたのにペットロス
ボランティアに励む息子の涼しい目

長岡京市　山田　葉子

健診かも坂道のある墓参り
日記にはちょっぴり見栄を張っている
暑い寒いたんびバランス崩してる
幸せのかたちいろいろあるんだね
ささくれをやさしく撫でる金木犀

八幡市　今井　万紗子

桐の花母には似合う紋所
合掌のかたちで眠る母の背な
わが家紋威嚇するには軽すぎる
今以て見切り発車で風邪をひく
追伸にうまい話は書いてない

大阪府　桑田ゆきの

鳳仙花ぽんと弾けて恋心
策略を巡らせ過ぎて蚊帳の外
ゆっくりと話して認知をほぐれさす
ノーベル賞世界に誇る大拍手
更けて鳴く虫に哀愁募らせる

大阪府　籾山隆盛

朝刊が折り目正しく配られる
花は咲くフクシマ咲かすいいソング
軒下にホームステイの渡り鳥
ワンパターンこのままつづけ生きてゆく
スケジュールまだまだこなす死ねまへん

大阪府　米澤俶子

お月さま虫の音小さ過ぎますね
元気ですと言えた昔をなつかしむ
ひらがなで喋り周りを丸くする
エンディングノート買ったままで白紙
御嶽の救助に祈る明日は晴れ

大阪市　池上清治

水墨画筆先こもる息づかい
御嶽山歌っておれぬ暴れよう
休む前つい老妻と握手する
新大阪の別れねぎ焼きコップ酒
老いてなお白熱球にしがみつき

大阪市　井丸昌紀

つらい時亡母はにっこり笑ってた
西の窓かざしたグラス語り出す
線香の煙の先にいる仏
台風が来る前空は化粧する
祖父も父もやがては僕も癌で死ぬ

大阪市　江島谷勝弘

五十年ぶり金毘羅さんで汗をかく
官房長いつもおとぼけ上手です
なんでやろう家がいいのに旅に出る
久しぶり鰻重たべてリッチです
うらやましいユニクロカラー似合う友

大阪市　榎本日の出

松茸と栗ごはんなら続いても
年寄りのポックリ死なら歓迎よ
ゆっくりが今の私にぴったりだ
今だから言える静かに家族葬
冥土へのみやげ代りに句を作る

大阪市　榎本舞夢

塔まつり済んで気持を立て直し
運動会敬老席が賑やかに
皆既月食鮮やかにまた美しく
爽やかに秋風うけて美術館
満天を仰ぎ明日の策を練る

大阪市　大川桃花

女装するとなぜか小指立てたがる
吊橋に行く行かないでもめる旅
六帖ひと間独りにちょうど良い広さ
幸せになれそうな駅降りてみる
ミステリアスな宇宙のドラマ赤い月

大阪市　奥村五月

黙りが核より強い妻の武器
ゴシップの種を蒔いたら花が咲く
嫌な蚊に負けず草取り墓まいり
妻に嘘大事な友をまた使う
すぐ泣ける議員転職芸人に

大阪市　笠嶋惠美

健診では不安の数値出てこない
「まあいいか」好きな言葉になるユカイ
知新館国宝ずらりお出迎え
孫ひとり敬老の日の使者可愛い
学年会皆老い肩の力抜け

大阪市　川端一歩

じっくりと聞く役ならばできそうだ
お月さんに言いたいことが一つある
安部さんとマララさんとは比べない
神様が絡むいくさは根が深い
どちら先ボケるかジャンケンで決める

大阪市　熊代菜月

雲ふんで歩く遍路の杖の音
相槌を打っても話終らない
生きていて良かった朝の大欠伸
旅に行く薬袋を懐に
リストラの名簿の中にある派閥

大阪市　古今堂蕉子

税サ込みですよねと更に念押す
また転ぶ形状記憶はずさねば
削られたそこが言いたかったとこ
体重ははかりが記憶しています
瀕死の花我家のホース届かない（公園の花）

大阪市　近藤正

どう操作しても十％無理でしょう
再稼動急いて責任取れますか
金婚の旅は和倉と決めている
日本の明日は沖縄からの風
オスプレイ御嶽山は避けて飛ぶ

大阪市　坂裕之

本当はそうだったのか枠の外
決まったら後はいい風吹くの待つ
最後には一人で決める右左
ライバルが平気な顔で勝ち譲る
それぞれに道は違うが同期生

大阪市　佐藤忠昭

月毎に打率が下がる年なのか
多作多捨日師匠のお言葉だ
読み込み句作りませんと負け惜しみ
全没も落第ないと大らかに
そうだ懇親会で憂さばらし

大阪市　田浦實

先ずは仁義向う三軒両隣
お節介に何度助けてもらったか
鎮守の杜巡る街ぶら見直した
うっかりしてテレビと喋るときがある
十七回忌兄弟揃う有り難さ

大阪市　津村志華子

のんびりと暮らせばよいと晝の月
プライドがあるからみんな生きている
湯豆腐が浮いて沈んで宇宙かな
侘しさを癒やすポインセチアの赤
山彦もわたしも同じ河内弁

大阪市　津守なぎさ

我ながら口だけ達者マイペース
体型が気になりだしたマルチーズ
目標がある闘病のエトセトラ
輝いた想出薄い昭和っ子
運不運火山列島ど真ん中

大阪市　寺井弘子

川の字を蹴散らす朝の夏ぶとん
自画自讃プライド高い鼻つまみ
仏だんの鉦を鳴らして留守たのむ
デュエットの巧い男の若作り
また見たい東京五輪生きる欲

大阪市　原田すみ子

着る物を選ばぬ目力が見える
追いつめて追いつめられるのは自分
おでん種個性豊かにひとつ鍋
金木犀あの日の恋がぶり返す
守るものいくつか持って生きる糧

大阪市　板東倫子

台風が去ればデング蚊噛みに来る
無茶苦茶に生きて来たなと老い笑う
嫁と姑の心通じた露天風呂
日々事件お化け屋敷もこわくない
断捨離が過ぎてわが家が透き通り

大阪市　平嶋美智子

たまり場が出来て楽しみ増えました
小銭だけで賑らむ財布握りしめ
安いので曲ったキュウリ買いました
自家製野菜勝手気ままな形して
友傘寿百までやると米作り

大阪市　伏見雅明

美人だとすぐに納得してしまう
窓閉めてしあわせ内に閉じ込める
仏壇のお供えものに旬をみる
干支訊かれサバ読んだ歳すぐばれる
逆境でなおユーモアを忘れない

大阪市　松尾柳右子

仕舞い風呂入念にする掃除
ハンカチをたたんで今日の終章に
楽しい夢見てたが起こされる
秋深し心地良い道歩いてる
健康だ友と語らう笑顔満ち

大阪市　升成好

一日を使い切れない老い一人
核心を突いたか返事間を置かれ
てきぱきと僕のものなら捨てる妻
焼酎としばしこの世を離脱する
天国へ一駅だけの距離になり

大阪市　山﨑君子

朝のベランダトンボ飛んでる空青く
エンゼルアイスピンク美し可愛い花
空晴れて今日はお月見おだんごを
夜の空月美しくベランダで
今日も泣く周りの人の親切に

大阪市　吉内タカ子

今日もまた若い声とで声比べ
お互いに愚痴を零せる嫁姑
節度ある老いで居たいと脳トレや
休刊日遠い散歩で立ち話
大阪のゆらゆら余生怖くなる

堺市　奥時雄

名簿から後輩消えてゆく怖さ
故郷に先生誰もいなくなり
老妻にもうユーモアは通じない
笑えない芸があざとくなるばかり
カメラにはがっちり握手して見せる

堺市　加島由一

あわてない待てばサンマも安くなる
生きのびて居心地のいい群の中
またひとり降る虫の音と飲んでいる
骨抜きにされ乳母車押している
お茶にしよう激しいだけが恋じゃない

堺市　桒原道夫

猫の目は火のさみしさを知っている
泳ぎ疲れて海の匂いのする枕
エスカレーターの途中で恋に似た心地
学校の坂に卵を立ててやる
いつ来ても古書店の猫眠ってる

大切な人を捲き込む大噴火
生きてる内に大災害は来んといて
弦月に虫の奏でる音冴える
ローソクが七本喜寿の誕生日
台風にだんじり祭り早仕舞

堺市　源田八千代

朝ドラに合わせて家事をしています
皆既月食五年寿命が延びたよう
諦めぬ信念習いたくもあり
孫元気それだけ聞いて電話切る
紅葉狩り約束だけはしたものの

堺市　齋藤さくら

腹八分四回食べるダイエット
爽やかな贅沢はこぶ里の風
借り物の命忘れて年忘れ
箸紙を書いて家長の事納め
忘却力ついてこの世が面白い

堺市　澤井敏治

人間の尊厳に生きがいがある
この胸にまだ父がいてつらすぎる
自分にはケチだが孫に甘くなる
終章の余白に未練ある血の気
老いかなしいのちの不安つきまとう

堺市　遠山唯教

痛い程わかるわかると丸め込む
お互いに脳活になるクラス会
社を離れいつも日曜いつも晴れ
土砂降りは地球の涙かもしれぬ
だんじりがふるさとの血を騒がせる

堺市　内藤憲彦

地球儀も宇宙も泣いてる御嶽山
子に残す言葉につまり辞書を抱き
下り坂険しい風にすくわれる
長い道脱皮も出来ずちぢこまる
ほどほどが下手で深みにどんと落ち

堺市　西村りつえ

水茄子の糠づけ身贔屓で食べる
涙出る昭和の頃のヒット曲
ダイレクトメール亡夫の名で今も
S席で君とキラキラする時間
気を許し過ぎた甘えた躓ずいた

堺市　矢倉五月

ゆりかごは母の両手の中だろう
もくせいの香りは消えた虫の音も
血圧を下げると聞けば今日も蕎麦
しっかりしよう無下に躓いてはおれぬ
秋はバーゲン何はさておき行ってみる

池田市　栗田久子

和泉市　横山捷也

金婚式メッキが少しはげたけど
追伸に少し優しい嘘を書く
病み上り一日千歩の志
無精ヒゲ俺は幸せかもしれぬ
座布団がへこんだままの亡母の席

茨木市　島田誠一

古時計ゆっくり刻む秘湯の灯
生涯学習テストが無くて長続き
同窓会焼け棒杭も燻らず
敬老日代理ばかりの祝辞聞く
買った値はまだ覚えてる不用品

茨木市　藤井正雄

負けは負け悟り開いてからの酒
耳元にくるこっそりに金がいる
喧嘩せぬ約束で来る孫二人
クラクション軽く鳴らしてさようなら
マイペース切札持っているゆとり

大阪狭山市　矢野梓

会席膳友と会話に合うテンポ
忘れたい事忘れない脳の意地
八十路入り負の予備軍を持って生き
一斉に壊れるレンジ洗濯機
忘年会話題は何時か医者薬

河内長野市　植村喜代

右の耳いつも何か喋ってる
災難つづきの日本神様はどこに
予告もなく災難が降って来る
苦を捨てる壺は未だに見付からず
昨日のことけろっとした顔で電話来る

河内長野市　梶原弘光

戦力外通告受けてから真価
パン買って帰りワイフの機嫌取る
70はまだまだ小僧自己暗示
運動会目印象のアップリケ
さわやかな号泣見れるプロ野球（オリックス）

河内長野市　木見谷孝代

もくもくと土と遊んで満たされる
残り福婚期遅れて君に会う
もうそろそろ自分で責任持てと顔
好きだった母の着物を縫い直す
縫うケガの絶えぬ息子はラガーマン

河内長野市　黒岩靖博

人生の節目で倒れ茨道
我が人生写楽でよいと志
世の中を浮きつ沈みつ歩く日々
親しさが増えて敷居もとれて友
きみまろの軽いジョークで泣き笑い

河内長野市　坂上淳司

ゆるキャラの衣装の中はサウナ風呂
老いふたりお匙で食べてます熟柿
小刻みに四国遍路を踏破する
メイドインジャパンどっさり買うツァー
列島の屋根を劈くゲリラ雨

河内長野市　谷久美子

噛み合わぬ入歯で呆けと間違われ
クラス会化粧衣裳で出遅れる
幼児に難し過ぎる負けて勝て
プライドが汗といっしょに流れ落ち
食べ放題欲もいっしょに天こ盛り

河内長野市　辻村ヒロ

血糖値歩け歩けの切符つき
喜びを五臓六腑におすそ分け
定年後縛るものなく無精髭
背伸びしてきりきり舞で過ごす日日
桐タンス嫁いで座り主になる

河内長野市　松岡篤

病院の帰りデートの老夫婦
制服の息子きっちり親離れ
身に余る祝辞きっちり真に受けて
ママゴトのコックが今の主人です
終電車お馴染みさんが二三人

河内長野市　村上直樹

軽々とボトルが空いた若かった
お若いというジョークにも棘がある
スマホなんかゆめゆめ持つなアホになる
縫い代を広げふたりの楽隠居
爽やかに晴れて金婚　菊薫る

河内長野市　山室光弘

無口でもしわの深さが語る過去
懐メロは嫌な想い出つれて来ぬ
感性とヒラメキ遅くなるばかり
消え方が早い記憶と諭吉さん
人肌の酒を含んで秋を喰う

岸和田市　岩佐ダン吉

揺れるたびやはり私が試される
見ていろといつもひとりで言うている
半分は善人ですと言うている
手ぐすねを引いて十八歳を待つ
燃えるものまだありでかいペンを抱く

岸和田市　雪本珠子

気抜けした心に風が入り込む
初恋を引き摺ったまま黄昏れる
お互いに別れの言葉探してる
岐路に立ち心の帯をぎゅっと締め
小春空眺めて猫と日向ぼこ

四條畷市　吉岡　修

流行は追うまい穴のズボンなど
ひとつまみかあるい嘘をまぜておく
わらべ唄母は少女に戻ってる
ほんとのとこサプリメントは語らない
ビール組ジュース組とに座をつめる

吹田市　太田　昭

手のひらに幸と不幸が入り交じる
上限のない幸せを追い掛ける
父の背に喜怒哀楽を語らせる
朝昼を抜いて挑んだ試食会
亡母からのメッセージかも曼珠沙華

吹田市　大谷　篤子

高血圧頭痛私の泣きどころ
零れ種咲いて私に光さす
悲喜劇に悶えた頃が嘘のよう
心折れ今は我慢の時という
穏やかにソフトに話す姉が好き

吹田市　木下　敏子

好奇心まだ弾ませる赤い靴
向き変えて明るい花の色になり
絵手紙の花に優しく癒される
雑草のままで八十路を踏みしめる
趣味一ついい人生の道しるべ

吹田市　須磨　活恵

嘘言えず本当も言えず喉仏
まだ燃える女心と好奇心
いわし雲永久の眠りについた夫
秋の陽に包まれ夫の棺出る
悲しみを癒してくれるのは時間

吹田市　野下　之男

あの人の蘇州夜曲を忘れない
犬だって意地があるんだ盲導犬
おとなしいあの川のまた凄い顔
もう一度産めよ増やせよ皆の衆
懐かしく聞こえる言葉デング熱

高石市　浅野　房子

塔まつり杖つく身には無理でした
秋の章うかうかするとすぐに冬
枯野行くひとりぼっちは辛すぎる
何もかも一人で決めて実行す
御嶽山なめたらあかん怖い山

高槻市　井上　照子

備えても自然の威力容赦ない
杖ついた老いた足では追いこされ
魚の骨こわくてくぎ煮我慢の子
診察を待つ血圧が高くなる
自分史をつくづく読んだ月の夜

窓際の少女に遠い日を重ね
自画像にさらばさらばの筆洗う
ピンチには神さまに手を合わせます
そこまでと断捨離をする線を引く
輝いて残りの日々を楽しまん

高槻市　指宿千枝子

甘えきる事ができない苦労性
凜とした朝の空気に身が締まる
陽だまりに尖った心置いてくる
温度差があると気付いてから無口
法律が邪魔をしてくる遺言書

高槻市　島田千鶴子

欲言えばあと一押しが足りません
お遍路の意地でなんとか歩き抜く
ハンカチに悲喜の素顔を見せてある
これぐらいと跨ぎ損ねた水溜り
さりげなくしかと見ている周りの目

高槻市　初代正彦

座の中に母がニヤニヤ平和なり
不器用な夫婦で渡る橋の揺れ
ざわざわと噂の種が発芽する
苦労した人だ言葉にある厚み
財布持つ妻がバランスとっている

高槻市　杉本義昭

やわらかい心で支え合う暮らし
決めかねて言葉にごしている弱気
一仕事すませたあとの大あくび
拾われた石が知ってる手の温み
真っすぐの心にゃ何の影もない

高槻市　左右田泰雄

末っ娘も嫁ぎ会話が日々に痩せ
断捨離を果たし身軽に西の旅
ビーフから笹身へ歳が舌を変え
嫉妬心だけは痩せない我がワイフ
台風は嫌い我が家の骨密度

高槻市　富田美義

乾杯のジョッキの周り笑顔咲く
病院に来てない人が気にかかる
晩年の暦ゆっくりめくってる
冬来ると身の節節が元気出す
今降りた汽車に手を振る一人旅

高槻市　富田保子

お茶お花稽古のあとは生ビール
触れ合いの絆をくれた通り雨
敗者復活取れたボタンをつけ替える
最初はグーその後もグーで押し通す
甚兵衛を着てどちらにも味方せず

高槻市　原洋志

高槻市　安田忠子

塔まつり笑顔の花が咲きみだれ
宇宙ショー人の営み小さく見え
国の行方変えてしまうか安倍総理
性格の似た友病までも似る
点滴を続けて五年まだ続く

豊中市　池田純子

孫と猫折り合いつけた二メートル
潔く呼ばれましょうぞばあちゃんと
嵐過ぎ大安祝う秋が来る
歓声を受けて満月かくれんぼ
今やっと消化している父母の愛

豊中市　江見見清

ヤジロベエ止まると信じ揺れている
そつのないお方の見栄を見てしまう
もの忘れ多くてもめ事も減った
咲きすぎた花には触れないでおこう
なあなあで済ます傷持つ者どうし

豊中市　藤井則彦

スマホの窓見るよりまずは広い空
変わらないねと言われて独りほくそ笑む
ワイシャツの貸し借りもする爾汝の仲
テレビ故障途端に妻は口籠もる
刃物より尖って怖い嫉妬心

豊中市　松尾美智代

なつかしい友に会えたよ塔まつり
釣瓶落しもう温い灯が恋しなる
恥かいて笑われながら育ってる
はっきりと私を見せて苛められ
洗いすぎて私の個性褪せてくる

豊中市　松村里江

アクションは鈍いが喋り負けてない
ひたすらに歩き息抜く桃源郷
様子見にひと先ず折れて出て鎮め
電池入れ替え私ウツより抜けました
肉筆のデッサン私若いまま

豊中市　水野黒兎

彼岸花アイスカフェーは今日限り
雑踏の中の一人である孤独
弱点をさらした時に生き返る
終点へまだ岐れ道多い旅
伸びる子の心養うほめことば

富田林市　片岡智恵子

誘われて行く食べ放題の喜劇
聞き上手知らぬまに皆吐かされる
それ以上言わないで反省してるから
叱られに入る扉の重いこと
仲良しに出合うて明日が光り出す

富田林市　関　よしみ

いじらしく十指を合わす無限大
煽られて死角に入る私流
遠い日のポッペン聞こえ這い上がる
母の帯端端までにしつけ針
敵を抜き去るステップの技生きる

富田林市　中井アキ

振り向けば砂の月日を踏んだ跡
年齢という強い味方がいてくれる
やる気出すまでは口など挟まない
充電のパーツは不揃いのまんま
湯豆腐がゆらり慰めくれている

富田林市　中村　惠

好奇心全開きっかけは些細
擽りで笑いの種が目を覚ます
代わる代わる勧め上手がへばり付く
丁寧が過ぎて面倒だと思う
ひらがなとひらがな遊ぶ雲の上

富田林市　肥山一文

アナログで充分ですと脳が言う
友と会うどんな話か楽しみに
一日は仏壇で読むお経から
二重丸ついた手帳を二冊もつ
人生の秋を迎えて酒二合

富田林市　山野寿之

山ガール山がピンクに若返る
山小屋で天体ショウを見る至福
山小屋の人間混ざり合う匂い
自転車に乗せた夕陽が後を押す
口割った柘榴の本音火の匂い

寝屋川市　冨山ルイ子

句集頂く一気呵成に読み終える
机上に置きまたゆっくりと読んでいる
大会で待って待ってた親友に逢う
織姫と彦星のよう年一度
選者室今年も係ありがとう

寝屋川市　平松かすみ

灰の降る街を心配して祈り
どの部屋も時計狂っていて平和
エキストラなった服です放されず
ふるさとの棚田で揚げた奴凧
人生の節目に替えた二度の職（娘・夫）

寝屋川市　森　茜

山好きの原点ぼくのジャングルジム
花びらをこぼさぬように萩のみち
父ゆずりの頑固が板につきそうで
秋風にざわめく夾竹桃の嘆き
幻の魚と出会った道の駅

頬を染め一日終る酔芙蓉
無学と言う母が唱える長い経
女偏スローで溶けてゆくマグマ
宇宙から一粒の種降る命
初帰省嫁に準備の羽根布団

寝屋川市　森田　麗

リハビリの身にも勤労感謝の日
思いがけぬ人に出会った夢の中
カラットで女が計る愛の価値
根回しの酒と知らない酔い心地
我ままに生きて孤独が深くなる

羽曳野市　安芸田　泰子

庭に出てオクラ一本朝の贅
居眠ってわたし充電しています
身の内の鬼がいうこと聞きません
和食屋のバイト内気な孫娘
ひとりがいい寂しくないとちょっと見栄

羽曳野市　徳山　みつこ

秘密法墨塗る手間を省かせる
隠しても尻尾出してる下手な嘘
ユーモアが険悪な場を和ませる
アベノミクス内部留保を厚くする
交友録今年も朱線ご冥福

羽曳野市　永田　章司

内税の店がじゃかすか売れている
神の御名唱えて人を殺す人
分かってる毛生えぐすりはもう効かぬ
レシピにもアレルギーにも縁がない
ツンドクが好きで昼寝に事欠かず

羽曳野市　三好　専平

視野広げるとちっぽけな僕が見え
終活が生きる力をくれる冬
僕だって甘く切ない過去を持つ
バラバラの家族が揃う回る寿司
合格ラインぎりぎり超えて運がつく

羽曳野市　吉村　久仁雄

脇役が居てこそセンターが光る
マンネリの暮らしの中にあった幸
ひたひたと恐怖が列島を襲う
刻刻とドラマ紡いできた振子
泣く笑う生きているから輝ける

東大阪市　北村　賢子

五十から五人となったクラス会
肝っ玉据わった母は屈しない
仏壇の奥からエールくれる母
豚マンのにおい充電する車内
もう一歩踏み込む勇気出ぬ齢

東大阪市　佐々木　満作

枚方市　海老池　洋

秋の月心の棘を抜いてくれ
夕焼けへ祈る姿の木守柿
先ず健康ゼロ発泡酒を選ぶ僕
栗ごはん亡母の話したくなる
そうは言うても隣の花は赤く見え

枚方市　小林わこ

ザリガニの飼ってびっくり子沢山
飼育係人気のあったウサギ番
倹約の虫一匹ぐらいでは足りぬ
胸の奥いつのまにやら鬼が棲む
三日なら留守を預るウチの猫

枚方市　丹後屋　肇

閻魔帳過去の罪状草書体
命日の妻に供える一筆箋
言論の隙間に冷気降りてくる
貴婦人と逢う約束のティタイム
冬支度押し入れでんぐり返りする

枚方市　寺川弘一

孫からの手紙にルビがふってある
アドリブで言ってならないプロポーズ
作業服脱ぐと家族の顔になる
表彰状の裏には何も書いてない
倖せはとても掴みにくいかたち

枚方市　二宮山久

また一つ趣味を増やしてボケ知らず
毎朝の体操はげむ空の青
介護士の手の温もりに癒される
妻の愚痴聞いて冷酒もう一杯
ちっぽけな庭だがオレの夢の園

枚方市　二宮紫鳳

絵手紙に母への思いはじけそう
プライドを捨てて人生友多し
趣味一つ減らし心に余裕でき
笑点で心晴らして夕仕度
共通の趣味で絆を確かめる

藤井寺市　伊藤アヤ子

食欲の秋梨も里から届く頃
だんじりを引く子供等の秋まつり
一つだった病気あとから後からね
さわやかな秋風にふと淋しさが
水たまり小さくなってあすが見え

藤井寺市　鴨谷瑠美子

人前のつくり笑いがまだ出来ぬ
花柄のコーヒーカップ似合う朝
温もりをふわっともらうひらがなで
背筋のばそう今年の秋は駆け足だ
道問えば柊の白ほろほろ

藤井寺市　鈴木いさお

さわやかな汗爽やかな頬伝う
遠いとおい記憶の中の肩ぐるま
年金に縋り覚束なく生きる
手塚治虫の世界に酔った少年期
秋夜長ヴェルレーヌの詩中也の詩

藤井寺市　髙田美代子

八パーセントのお蔭で小銭溜り出す
よく食べてよく寝てブラジャーがきつい
銀杏を拾った御堂筋に冬
その先を語らぬ人に飲ます酒
雨しとど想う人には思われず

藤井寺市　津田シルク

日の本の神様集いご婚礼
台風に右折禁止の標立てる
眸とじれば鎮守の森のドンヒャララ
九十は半端百歳まで頑張る
机の下で猫が聞き耳たてている

藤井寺市　俣野登志子

躓いて辺り気にする一張羅
猫逝って壁の爪痕いとおしい
何をしに行くのか階段の途中
しみじみと鏡が零す老けたねえ
亡母の味と比べてみたい稲荷ずし

藤井寺市　吉田喜代子

夏去ってシュレッダーさえ急がしい
引き抜こか少し待とうか出来るかも
割引券またいらぬ物買いました
怖いなあ老人破産聞くニュース
長寿国我も百歳超えるかも

藤井寺市　若松雅枝

年経ても心に刻む師の教え
高齢者鳩と遊んでひもすがら
病院の朝食パンは味気ない
境内の銀杏拾うボランティア
ロボットが来たら私は不用品

松原市　森松まつお

A型の妻が煙たいことも言う
全没で帰ると妻に叱られる
付き添いの服に前日から悩む
いきなりの指名ウトウトしてたのに
抜け穴は二つ飲み屋と公園に

箕面市　酒井紀華

砂時計わたしの命刻んでる
ひと握りのきれいな砂が過去をよぶ
赤い砂燃えた一日恋おわる
女ひとり波紋のなかで泳いでる
人間力いのちの軸をふとくする

守口市　井上桂作

中秋の名月今年たっぷりと
稲作が心配になるこの秋は
ｉＰＳ細胞入れかえ画期的
予告なし御嶽さんは怖い山
がんばって女性大臣実力は

八尾市　内海幸生

木洩れ陽の下にひとりでいる安堵
何をしていたのか落ちる陽に聞かれ
パソコンの頑固をほぐす孫の指
辞世の句できぬから未だ生きている
仏像の瞳に自惚を諭される

八尾市　寺川はじむ

情報の世界を一人占めするスマホ
買い直し出来ない命日日磨く
茹だる夏耐えて歓喜の穂が実る
さりげないユーモアこれも処世術
こっそりとがっちり貯めている無口

八尾市　宮﨑シマ子

歌唄えたから当分大丈夫
ノーと言えば全てがゼロになる絆
いい嫁でトイレにいつも花がある
人並に三十六度の熱はある
二重の虹に出合う幸に出合う

八尾市　村上ミツ子

おそろしい噴石無差別攻撃
断定をされて反発したくなる
指かばう投手拳でハイタッチ
飛び込んでしまえばあとはどうにでも
山の吊り橋好きなお方と渡りたい

八尾市　山根妙子

風に乗り運動会のマーチ聞く
月光に縁先の灯をそっと消す
団体に紛れて寺社のガイド聞く
磨ぎながらゆっくり登る八十の坂
深夜便ソフトな語り夢誘う

神戸市　井上じろう

もしもから花が咲いたり萎んだり
無事祈る昨日につづき今日もまた
母想うまぼろしいつも背中だけ
植木や草手入れ諦めマンションへ
好き勝手一人浮いてるのも知らず

神戸市　白川淑子

彼岸花女で在りし日の焔
今はもう居ない右側風抜ける
悲しいから笑う人間だものみな
ゆっくりとゲームが出来る婆ちゃん家
福耳の友のうしろに付いていく

東京駅大事に残す赤レンガ
建て替えて想い出消えた里の駅
落ち込むとコショーの効いた塩ラーメン
嫌なこと耳に蓋してケーキ焼く
夫が逝き増えた息子の里帰り

神戸市　能勢利子

頂点を見上げ歩くと疲れない
道草を食う丸刈りの孫が居る
祖父の軸根性少し残してる
雨にも背かず花が咲いている
平和へと一途に願う戦中派

神戸市　福原悦子

永遠に輝きたくて磨く今
人と人思い遣りから湧く和音
木洩れ日の優しさ悩み聞いてくれ
値打倍昇るハルカス秋日和
家計簿は付けた人間脱いで寝る

神戸市　松井文香

ひまわりも秋には悲しい顔をする
若者の言葉を辞書に見出せぬ
他人が見ればゴミなんだけど捨てられぬ
夢醒めて右脚やはり動かない
お見舞へ小さな回復見てもらう

神戸市　山口美穂

同年が逝くとずっしり背が重い
腹立ちが治まらぬから飛び回る
人間って気まま猫も気ままな顔を見せ
活火山静かな妻の低姿勢
聞き分けの出来ぬ耳だって二つある

神戸市　山田婦美子

どなたにもいい旅願う発車ベル
大人達の気まま戦争ばかりする
パズルする老母は燃え尽きそうに解く
天敵は心の奥に住むわたし
いい年であったと晦日そば啜る

明石市　糀谷和郎

家族が笑うただそれだけでいい平和
古時計元気に父の音刻む
後のことまかせる人が見つからぬ
お互いさま私のミスを軽くする
偶数が丁度いいので誘われる

芦屋市　黒田能子

出雲路は神の囁く気配する
恋の気配漂ったまま冬となる
薬師堂如来と語る萩の路
絵手紙にキノコ一本秋届く
生命線信じ傘寿のローン組む

芦屋市　竹山千賀子

尼崎市　市坪武臣

手のひらで泳がす妻の隠し芸
写メールに大仏殿を閉じ込める
ベテランが身を退くことの潔さ
月面の一歩はかぐや姫だった
銀座の姫を偲び昭和はたそがれる

尼崎市　長浜美籠

人並に生きて嬉しい誕生日
修道院に泊まり小鳥に起こされる
生きてこの縁を思うミサの鐘
長崎に来て二十四時間クリスチャン
久し振りとご無沙汰うめるハイタッチ

尼崎市　春城年代

神さまのお目こぼしかな老いたのし
いつからか口紅うすくなるきざし
黄菊白菊へこ帯の頃のこと
非常袋はチョコレートだけ入れ替えて
またたく銀河を背負って帰る宴のあと

尼崎市　藤井宏造

よく光る方がたいがい紛い物
たまに出す妻の裏技冴え渡る
好きだよと言える気がする星月夜
納豆の食べ方それぞれの流儀
世の中は泣いて笑ってああしんど

尼崎市　山田耕治

神様が野球をくれた背番号
再会の杯ウーロン茶を注がす
聞き上手やがて怒りが溶けていく
精一杯やってA型なお悔やむ
おいくつと聞きたそうなる目で見つめ

加西市　金川宣子

ゆっくりと五感楽しむ旬の味
お疲れと地下足袋洗う祭り後
秋冷に足の裏にも日向ぼこ
タイミング計ったような曼珠沙華
バラの花妻に感謝の五十本

川西市　西内朋月

脳みそを空っぽにして飲んでいる
年寄りが井戸端会議する医院
人間の値打も分かる吟醸酒
良い朝だふっくら出来たオムライス
寝たきりにならないためのお賽銭

川西市　山口不動

計報来る金木犀の香る朝
運動会人気はババのお弁当
お下がりのランドセル抱くいじらしさ
原稿の妻の検閲通らない
いつからか家族写真を飾ってる

川西市　米原雪子

ふと気付く後の方で呼ぶ声に
熱入りテレビの前で怒鳴ってる
バス停を一つ歩いて足試す
ポストまで楽しみ込めてぽんと入れ
しつけ糸したまま眠る絽の喪服

篠山市　北澤稠民

気持ちだけ詩人にさせる秋の色
外交は役者が上の外国勢
鏡だけ素顔の私を知っている
太陽に日焼けの顔が愚痴こぼす
こつこつと節目を越えた太い指

篠山市　酒井健二

ベテランが一滴垂らす隠し味
手術の日周りはみんな普段の日
にごり目のにごり五分で消す手術
あっさりとパソコンデータ消え失せる
人類の飢えの歴史のバイキング

篠山市　酒井真由

わびしさよ漬物石に負けている
君の出す答えをじっと待っている
月下の街 荒野をひとりゆくごとし
生きている今もあなたにまもられて
川柳を愛す川柳塔愛す

三田市　北野哲男

好々爺下弦の月の下り眉
婦人会青年団も喜寿傘寿
愛想よく褒めて聞いとく孫自慢
ライバルと当り障りのない火花
腹蔵のないロボットが羨まし

三田市　尾崎一子

ふる里の庭のちろろと五七五
満月をいただくこころ美しい
二度とない今日と言う日のよい想い
朝ごはん二人作って一人居る
海と空ゆるり眺めて老いの坂

三田市　堀正和

初サンマ見て献立が狂い出す
松茸はムリだがまずは栗ごはん
紅葉の時期に合わせて墓参り
二十年妻とは散歩していない
コーヒーはブラックちょっと若返る

三田市　久保田千代

身の程は頭に入れて二日酔
それぞれにもくろみのある栗のいが
心にも封印をする固結び
金魚にも泳ぎ上手も下手もいる
弱点を生かせばそれは個性なり

三田市　福田好文

電子辞書筆順知らず書く漢字
犬の名をバーディーと呼ぶゴルフ狂
骨董品値札見てから知る値打ち
長生きが勝ちと思わぬ紙おむつ
レシートは足が付くから受け取らぬ

三田市　上垣キヨミ

孫の記事仏さんにも見てもらう
出費には耳を貸さないお金持ち
民の汗集めてニセの活動費
月明かり心の闇に灯をともす
反抗期母はソフトな瞳で護る

三田市　石原歳子

待つ人の居ない家路をただ急ぐ
枯れ草の中で揺れてる萩の花
忙しいわたくしだから風任せ
独り者自由満喫しています
天体ショー楽しむ子らのいい笑顔

宝塚市　田中章子

化粧品捨てて素顔で生きてみる
素のままの君がいいよと夫の言う
そういえば夫は味方だったのだ
紅だけはさせてくださいおんなです
心まで素顔美人になりたいな

西宮市　秋元てる

爪切りが自分で出来た日の弾み
治療費や元を取るまで生きてやる
紅筆よ九十五歳も未だ女
説教婆絶滅危惧種かも知れぬ
お気軽に孫とのズレを楽しまん

西宮市　足立茂

体重計の針が命のチャンピオン
夕焼けをバックに雁の幾何模様
飲み口にだまされ限度超す冷酒
女子会の隣の席でひとり酒
天気予報が当てにならなくなる地球

西宮市　梅澤盛夫

少子高齢もろいかたちのピラミッド
ほっとする土の匂いのする男
愚を守りまだ人生は降りれない
友が逝く絆がひとつまた消える
困ったら帰って来いと案山子立つ

西宮市　片山忠

敗北感だけを残したアドバイス
漫画でも読めば性格変わるのに
優しさを金で買ってはいけません
老いらくの恋は薄汚くないか
ありがとう上手に言えるようになる

西宮市　亀岡哲子

川柳塔はあの辺りかとハルカスで
何遍も読んで切り抜く記事がある
断捨離へ南無阿弥陀仏収集車
身と心やさしさごっこしています
ひょっこりと逝ってあの世を驚かす

西宮市　西口いわゑ

扉の向う何があろうと三猿で
彼岸花一丸となりもの申す
いにしえの姫にも似たり萩ききょう
七色がまだ胸に棲むほっとする
ウィンドーの赤いヒールと跳んでいる

西宮市　福島弘子

騒がしいが他人の子だよまぁいいか
非常識は言わせておけと年の功
ボランティア湧き出す井戸へ大歓声
サンドイッチ耳は切らない自分流
頂いた師の本所どころ赤線

西宮市　牧渕富喜子

台風の夜をこおろぎいっぴき鳴いている
母さんの夢を笑顔で聞いている
シンプルに生きたし牛蒡そいでいる
評論家生きる希望をなくさせる
こんな日にぴったりだった岸洋子

西宮市　山本義子

お付合いも長うなったね太い指
スイッチオンひとつ狂うともて余す
句会に出る 白髪を染めて行くのです
出番ですよ 白髪かくしの毛糸帽
都合よくシナリオ変えて老い あはは

西脇市　七反田順子

子育てのギャップ感じて口とざす
置き忘れ変なとこから諭吉さん
滝壺はオゾンたっぷり深呼吸
食欲があれば人生ながらえる
生きている猫の鼾で起こされる

姫路市　古川奮水

鬱抱いて夕暮れに泣く秋の虫
言い過ぎた言葉淋しい風に化け
近隣の絆明るい食事会
放映の玉ねぎ効果興味観る
赤い羽根胸に今年も神無月

奈良県　渡辺富子

鎮魂へ御嶽山の月も欠け
次の月蝕見る約束を妻とする
むらさきのソフトタッチに暮れる古都
その先の想い熱くする手紙
さらさらと残る時間がこぼれ出す

奈良市　阿部紀子

天変地異不吉な予感胸騒ぎ
ゴッホの耳生体移植のレプリカ
ベルギーでマダムと呼ばれ買い過ぎて
最後かも知れない友と語る秋
ＬＥＤ見馴れた町が燦燦と

奈良市　岩本浩二

掃除ロボ仔猫の守りもしてくれる
傘寿過ぎ未だ煩悩冷めやらず
ノロケじゃないが伴侶選びは二重丸
孫がチン鳴らし位牌も嬉しそう
日本列島どこか遠くへ移りたい

奈良市　大久保眞澄

旨い話は人にするなと電話切る
家事も器量も十人並でよしとする
チャラチャラと音がしそうな若いモン
チャペルの挙式誰も讃美歌歌えない
束になって金木犀に迫られる

奈良市　加門萌子

頭ではわかって居ても負の遺産
つらい思いで年越す人を忘れまい
マスコミの力強烈知の支配
盲導犬を動物虐待なんてねえ
病んでみて夫の他に頼り無し

奈良市　辻内げんえい

子の手前筋書き通り生きている
時代かな嫁が来るから掃除する
「旨かった」の一言言えず喧嘩する
プライドを捨てて肩こりすぐに消え
コンビニがなく郵便局のある故郷

奈良市　天正千梢

柿を食い食い川柳考える
神様の着物の柄まで覚えてる
とり様で一生長い様な短い様な
空元気振り回した頃は若かった
足跡を子供が踏むとは限らない

奈良市　米田恭昌

古里は私にとって羽根布団
孫からの仮名の葉書の応援歌
ビクターの犬が見ていたピカソ展
私にもプライドあるとまだ独り
輪廻かや枯れ葉はらはら地に還る

生駒市　飛永ふりこ

ざっくりと君の性根を引っこ抜く
つるりっと納豆とろろ素直です
ねちねちと引き摺るなんて野暮なこと
真夜中にピンクの牙を研いでます
しっくりと味も見栄えも秋の贅

大和郡山市　坊農柳弘

晩酌は欠かさぬ傘寿の生き字引き
泣きごとも愚痴も削ってダイエット
空白のページが続く秋夜長
刈り残す情けに揺れるススキの穂
曼珠沙華今度いつ来るいつ会える

和歌山市　岩本美智子

世界中青く輝けノーベル賞
ベランダへテキならずとも初秋刀魚
疲れつかれた缶詰となる脳こころ
はなす友亡くしたデイへ重い足
台風の朝夕にくる子の電話

和歌山市　上田紀子

その先を知ってどうなる花の首
溌剌の老後を誘うスニーカー
散る花の真の痛み思いやる
無位無冠心の奥に咲く野菊
目分量の匙加減持つ手際よさ

和歌山市　柏原夕胡

愛は変わらない円くても四角でも
沈黙を通しあなたを守り抜く
この橋を渡る後悔せぬように
空っぽの箱が心の底にある
風見鶏わたしのほうに向いている

和歌山市　喜田准一

多士済々ここ一番で腰を引く
ひと声で右向け右をする怖さ
改革を唱え変わりのない政治
向い合う夫婦もマグマ溜めている
旨かった終電遅れた頃の酒

和歌山市　楠見章子

山盛りの野菜サラダはママのかお
髪飾りの様に落ち葉が降ってくる
床の間の花瓶に野菊生けておく
スローライフ　テレビは見ないことにして
パステル画少女の肌がやわらかい

和歌山市　坂部紀久子

美しく居たい八十路の生野菜
諦めは早い百まで女です
家族みな良い関係で一人住む
ほっこりと我が家の味になるカボチャ
猫よりも上手に捌る鯛のアラ

和歌山市　武本碧

アウトドア派で青空と肩を組む
幸不幸半分こする鍋と蓋
怪しいが好きな人なら目をつぶる
フルムーンこれから先はおまけです
エンディングノートは愛で飾りたい

和歌山市　玉置当代

同行二人癒やしてくれる彼岸花
お接待一期一会の遍路道
鳩尾のあたりの嘘が消化せず
おせっかいすぎてけむたくなってくる
それからを子供に任せ旅に出る

和歌山市　土屋起世子

身に付いたケチで年金カバーする
平凡なわたしを飾る笑い皺
ごはんです一時休戦しませんか
たっぷりの野菜スープで棘溶かす
テーブルが広すぎますねカップ麺

和歌山市　福井菜摘

鉛筆を削り海馬をノックする
周波数嫁に合わせて恙ない
半歩づつ譲り我が家の灯が丸い
残照へ我慢の石も丸くなり
許されて許して絆太くする

和歌山市　福本英子

昔むかし夫と渡ったかづら橋
面白い空気残して子らは去ぬ
独り居は惚けてられない米を研ぐ
喝采を歌い私も若返る
介護師の優しい人を見付けとく

和歌山市　古久保和子

新月は金木犀に包まれる
丹田のあたりで荷崩れの気配
手触りの良さで油断をさせておく
泣くまいぞ川面に小石すべらせて
風化した地蔵の笑みが柔らかい

和歌山市　堀冨美子

秋風にも一度チャレンジしてみたい
何時の日もサポートされている感謝
寄り道の分だけ知恵を光らせる
価値観のギャップに迷う子の世代
今の絵で私の幕をおろしたい

和歌山市　松尾和香

敬老にわたし喜ぶ曾孫来る
個々光る比べることもないわたし
不揃いのかたち豊かな味を出す
晩学の小道試練の七合目
床の間に飾るきれいな嘘だった

岩出市　藤原ほのか

ごった煮の中で旨み発揮する
七色の野菜を食べて生き延びる
一輪を飾り想いを深くする
寄せ植えでキラリと個性光らせる
ドラマなら演じてみたい役がある

海南市　小谷小雪

青虫の食べた山椒に芽が戻る
拭ったらぬぐえる程の汚れです
言い訳はしないキュウリの腰曲がる
足裏へハンドクリームおすそわけ
神様もご機嫌の良い神無月

海南市　堂上泰女

ウロコ雲ひとつ呑み込む深呼吸
哀しみを希望に変えた夕茜
馬鹿の壁読み人間の深さ知る
ユトリロの絵のレプリカが誘うパリ
モノクロの世界へ向う白い秋

紀の川市　宇野幹子

地を這って雑草のごと強くなる
八起目のダルマに目玉書いてやる
金婚譜やっと一ツの縄となる
目の前に紀州富士あり背を正す
饒舌な口へ閂つけておく

紀の川市　北山絹子

身の丈に合った暮らしで生きている
活躍が一際光るボランティア
デパ地下に洒落た野菜が顔を出す
地の果てまでも貴方について行く覚悟
指先のお洒落もしたくなる季節

紀の川市　辻内次根

コスモスにピント合わすと風が来る
許せないひとはひとりもいなくなる
4Bで楷書のような佇まい
逃げ腰の影をむんずと捕まえる
片減りの靴性格もそのままに

田辺市　岡本昇

トンネルを抜かれてお山風邪をひく
朝露のスパイス付けてもぐ胡瓜
母卒寿まだ下さない縄のれん
どん底で肩を貸し合ういいコンビ
父の日はふんぞり返り満ち足りる

橋本市　石田隆彦

被災地の不安重ねている豪雨
恋心失くした途端老けてくる
酒呑むとけんか始める無二の友
少年の目に焼きつけるプロの技
定年後くねくね曲がる道が好き

鳥取県　石谷美恵子

輪に染まり柳友に恵まれいい余生
マドンナも齢には勝てず老い給う
何着ても変わり映えせぬのが悩み
開かずの間心の奥にひとつある
御利益をいただく坂だ頑張ろう

鳥取県　斉尾くにこ

過去よりも未来の話しませんか
声だしてときに木と木もこすれあう
遠くある寡黙な背に惹かれてく
枯れそうなとき点滴となる涙
日暮れどきわたしへ書いたラブレター

鳥取県　竹信照彦

彼岸花散って涼しさ倍になる
大切な人を亡くして忌だとは
忌み嫌わないぞお骨になった兄
香港の学生昭和の日本だ
今は過ぎし昭和の吾に乾杯す

鳥取県　西谷悦子

稲を刈るこの豊かさよこの景色
さまざまの人脈の中磨かれる
晩学の汗残照などではない
妥協にも魂までは揺れません
適当と真摯世渡り使い分け

鳥取県　松川行男

深い訳聞いて欲しいが逃げられる
お悔みを友に知らせて指を折る
来年の運勢競う十二月
兼業も農機具展示歩を弛め
惚け封じ知らず知らずに投句する

鳥取県　山下節子

同窓会みんな変わった古稀むかえ
人形に話しかけます独居です
キッチンの椅子ぽっかりと子が巣立つ
貸し借りをはっきりさせて仲が良い
銭勘定の暗算だけは負けはせん

鳥取県　山本正光

噴火する山は横穴掘るべきだ
酷使した手足最近横を向く
人様と輪をつなぐため温める手
ヘルパーと思えぬ恩を貰う老い
ヘルパーの優しさきしみだす背骨

鳥取市　池澤大鯰

連休は必ず留守という一家
連休で暇ができたが金がない
子も孫も旅行といえば妻同乗
済んじゃえばあっと言う間だ取り直す
連休は家族の予定満タンに

鳥取市　加藤茶人

冗談がセクハラになる分岐点
電話口愛想笑いの長話
ひょっとして男未練の糸たぐる
ジジババを上手く使えよ核家族
口答え済んだら黙る反抗期

鳥取市　岸本孝子

怖いほど姿かたちが亡母に似て
ゆっくりの漫才ならば笑えます
就活の孫の輝きまぶしすぎ
早寝早起き老いた体にいい薬
星が降り人情厚い過疎に住む

鳥取市　倉益一瑤

末席で斜に構える癖がつき
良妻賢母　女忘れていませんか
八人目の敵は妻だとご存知か
わたくしの昔話は真っ赤っか
集中豪雨日本そんなに汚れたか

鳥取市　鈴木一弘

枯れ尾花老老たがい杖となり
隣組笑顔笑顔でどぶ掃除
満月とゆったりつかる露天風呂
再会で火種温度が高くなり
実戦の役にたたないプラモデル

鳥取市　永原昌鼓

泥沼で愛を育むムツゴロウ
腰痛をくれた亡夫に愚痴言えず
プライドがあるから列は乱せない
ありのまま生きて賞罰ない履歴
久し振り会った友から名を問われ

鳥取市　中村金祥

相槌を打ち合い手話の場が和む
さよならを言わないままに夏が去り
何事も元に戻れば気持いい
エボラだかデング熱だか負けはせぬ
百点をもらい笑顔も満点だ

鳥取市　西川和子

立って待つ開いてはくれぬ手動ドア
商いのおまけ一個に客が寄る
お見舞に解っているか目が笑う
声かけて育てやさしい花になる
喜寿傘寿日に日に脳が干涸びる

鳥取市　春木圭一郎

悩んでもいつも前向き生き生きと
傷ついた心癒やしに森へ行く
何たって余裕あるから落ち込める
欲張らず身の丈に合う役をする
生きる知恵般若心経からもらう

鳥取市　平尾菜美

くやしさのかたち涙をバネにする
付加のつく宝ゆっくり寝させてる
趣味仲間芯から垣根とり払い
団体のおまつり塔が光りだす
方程式解く生き様がむずかしい

鳥取市　前田楓花

本心を言ってもいいか影に聞く
ゆかしさが無いので苦労しています
還暦の恋は静かに燃えている
ひたすらに自分見つめる無の境地
夜な夜なの本音を聞いている枕

鳥取市　横田春名

五月晴れ夫の退院介護決め
無花果を掌に晩学を悔いている
銀杏散る亡き友ふっと湧いて消え
エステ中能面ずらり横たわる
赤とんぼ亡姑の命日連れてくる

鳥取市　吉田孔美子

夕立が夏の宝物を救う
さりげなく救ってくれた聞き上手
救うには家二つ建つ金が要る
どっちも一杯ひっかけて来て居る
衝突はしない時間をかけている

鳥取市　吉田弘子

秋夜長もう寝なさいと虫の声
挑戦へ弾みをつけるドッコイショ
柿が赤くなっても医者と縁切れぬ
幼子の競り合う顔は本物だ
量より質メニューたっぷりおしながき

倉吉市　猪川由紀子

レントゲン胸のドキドキ撮られそう
一強自民野党よもっと強くなれ
命の電池替えが無いので倹約だ
アンチエイジング恋するハート持ち続け
癌療法放置と手術迷います

倉吉市　山中康子

限界を知っているから横になる
帳尻が合った数字にうそはない
外孫が大きく見えた社会人
不機嫌をそばの柳誌に丸められ
八十年歴史くまなく語りたい

米子市　後藤宏之

軍資金趣味の多さに根を上げる
これ見えぬあれが見えぬと忙しい
このたびは影武者Aを派遣する
複雑な絡みがあってこその策
資金繰りすこしゆっくり回り出す

米子市　後藤美恵子

長寿国担ぐ子どもの肩痩せる
介護ロボ買える資金を貯える
ご無沙汰で里の敷居に蹴躓く
座布団を美脚の敵と子は仕舞う
毒きのこ媚売るごとく紅を差す

点滴の叱咤激励身に沁みる
病人に我儘な日と素直な日
患者から解放されて飯を炊く
合掌で無沙汰を詫びる曼珠沙華
もったいを付けて漢方効いてくる

米子市　竹村紀の治

思いやる気持ちはいつも持ち続け
終の日を思い煩うことしない
前向きにやりたいことが転げ込む
富弘の詩画に触れて温かい
町で見ぬとんぼ山里飛んでいる

米子市　中原章子

仕送りはむかし子がしたものだった
父の骨箱に納めてやや愉快
整理とは一つ抹消することだ
札束が降りそうもない青い空
形から入る男で長化粧

米子市　成田雨奇

神苑は晴れて皇女のお輿入れ
秋深し人情噺などいかが
平均寿命まで三年の赤い月
二度わらし哀しい鈴をつけられる
目を凝らす香月泰男の絵の闇を

島根県　伊藤寿美

仏壇に心安らぐ藤袴
淡々と現代っ子のインタビュー
若者に高齢マーク煙たそう
盲導犬張りつめた空気にさせる
久々の盛装小さなステージ

松江市　錦織禮子

トンビになって通天閣を巡る旅
100色で足りぬ心のシルエット
ダイヤモンドは無いが笑顔足す
境界線父のかたちに楔打つ
お嫁さんにゆっくり食べて叱られる

松江市　藤井寿代

秋明菊咲いて新米旨い頃
ゲリラ雨心の準備しなければ
かぐや姫の使いが来そう月冴えて
鈴つけた男が暮色の駅を出る
あわてんぼ思い違いでよくコケる

松江市　松本知恵子

優しい息子お前になんぞ負けないよ
強がりが名刺の上に乗せてある
一人ぽっちの月見守っている一人
私の折れた心にロゼワイン
あの人だったら違う人生だったかも

松江市　松本文子

傘寿とや流浪の旅はまだ続く
世渡りの下手な男の無精髭
底抜けに明るい友と居て孤独
価値観の違う二人の美術館
老々の介護こころも手も温い

松江市　三島　淞丘

台風が逸れて出雲は日本晴れ
今度逢うのはチロリン村と決めて置く
じゃんけんに負けた位で泣くなんて
芙佐ちゃんと呼んでくれたは夢の中
さんざめく心の笛はお別れね

出雲市　石倉　芙佐子

爽やかな空だ思い出など干そう
ひと眠りしたらファイト湧いて来た
思考力ゼロの日もあるレモンティー
人生に渋滞もある渦もある
引き算をしつつ日めくり繰っている

出雲市　岸　桂子

稲藁で文化を祀る宝船
大やしろ柏手響く縁の里
裏切らずわたしと戻る影法師
時計代り汽車の音きく明けの星
老眼鏡かなしい世相読みかえす

出雲市　小白金　房子

被災地へ一役孫のおこずかい
退屈と思ったことがない老後
この先は言うまい老いの愚痴になる
我が家の景気判断ずっと底
言うがまま振るまう妻の誕生日

広島市　岸本　清

マッサンリタさんに沸く街で生きる
虫の音のひときわ高く赤い月
小春日の七仏参り無になれず
一汁三菜長寿の父母を追い掛ける
朝ぼらけさてこの山を何う越える

竹原市　石原　淑子

玉手箱無いので夫は畑を打つ
ポプラ並木青春私にもありし
エプロンを洗濯幸福だと思う
赤い羽根もう一年が終るのか
本能と別にしっかり薬飲む

竹原市　岩本　笑子

安心感海に夕日が沈む景
言葉では尽くせぬ秋は穏やかに
も少しの人生サスペンスは嫌い
よくやった自分を褒めて踊らせる
我慢度を試されている八十路なり

府中市　藤岡　ヒデコ

慶よりも弔で集まることが増え
会長を三つ財布もくたびれる
これ位のことが出来なくなる八十路
安倍総理趣味は外遊かも知れぬ
縄電車妻が運転客は僕

宇部市　平田実男

両の手にたかが知れてる欲を盛る
四面楚歌私に青い空がある
惚けても指が記憶の鶴を折る
揺るぎない心に杉の木を植える
ありがとう言って逝ければ倖せだ

東かがわ市　川崎ひかり

マララちゃんの夢は出番が無くなる日
大自然も気紛れヒトを弄ぶ
呆けたかな秋の七草口籠る
後の祭りでくる人生の締め切り日
あの世との境界辺に居る私

松山市　古手川光

生れて死ぬそれが摂理と知ってても
せめてもの母へ買い置く冬支度
逆縁でゴメンネと子が今日も言う
薄氷の日々外出もままならぬ
ふるさとがすぐそこに在るいも煮会

松山市　宮尾みのり

おたかさんあれは昭和の戦士だよ
生まれ育ったむらが早晩消えそうだ
それはそれあれはあれ今はこの人
色あせて空気にならぬ妻である
走らねば誰かが僕を追っている

大洲市　中居善信

ふり向けば朧わたしの影法師
自惚れの視野から虹が消えてゆく
ミラクルパワー欲しい股関節病んで
旅出来ぬ日々が続いて溜まる鬱
風当たり恐くて莢を出られない

西予市　黒田茂代

雨上がり山は緑にはしゃぎだす
ヤスクニの友は静かに眼を開ける
歩き疲れて御国の春は遠すぎる
背負われた終戦の日のはるかなり
この身体よくぞここまで辿り着き

高知県　小澤幸泉

秋風とつもる話をする芒
わたくしの芯を太らす本を読む
年輪の重みは生きてきた証
包容力なくてちまちま生きている
愛情があるかないかの叱り方

高知市　小川てるみ

唐津市　岩崎　實

新米に古米混ぜればおいしいよ
切り売りもうまくなったねメロンまで
曳山囃子事前夜風に心地よく
たね蒔きは前から思いおりしこと
せかれてもよちよち歩く足となる

唐津市　坂本蜂朗

妻が持たせる携帯という鎖
黍団子貰い手と足には鎖
趣味の会年年太くなる鎖
まだ酒に誘う友あり青い空
本物の美人視線に慣れている

唐津市　山口高明

炯々と山門護る仁王の眼
同僚が愛妻弁当覗き込む
ラマダンの関取りさんは敗けが込み
名を捨てて実を取る方へ宗旨替え
煙突が無いと心配する息子

熊本県　岩切康子

人間ドック何も無いと七十五
不機嫌は私の留守の所為らしい
上品な栗の皮剥き楽じゃない
靴を買う少しお洒落を意識して
留守中へオデン多目に作り置く

雑物

（つづき）

神奈川県　小田幸子

母の好物身体に悪い物ばかり
つながれて犬はますます吠えたてる
熱演に生命の叫び感じとる
燃えつきる音を感じて胸震え

佐渡市　高野不二

ケータイはわざと忘れる日曜日
押入れは売れるものなし捨てる物
主治医よりテレビの診断気にかかる
ノーベル賞日本人として祝う

江南市　脇田雅美

集りにジェラシー入り興ざめる
天の句に賞と拍手と笑み貰う
七輪で日本の文化サンマ焼く
要領が悪い人には助け舟

三田市　今西廣子

墓の事妻に聴いたが別々に
白よりも白になりたく化粧する
親の年越えておまけは医者通い

（前月分）山鹿市　三谷直男

女性に媚び自分のかみさんだけにしろ
うまいもの医者がうるさく止めるもの
一年中殆んど同じ句が出来る
地球やめどこかの星に移りたい

川柳塔の川柳讃歌 ⑫

木津川　計

漏洩防止か持ち物は無記名

星野　育子

すべての持ち物を無記名にしたらどうなるか。銀行や郵便局の通帖、住所録や手帖、健康保険証に診察券などを紛失して私の物ですと証明するのは至難の業だ。

胸につけるネームカードが人物を特定するからいけないという論議があると聞く。育子さん、世の中逆立ちしてますね。一切知られたくないというなら表札も全廃する。すでに個人宅の電話番号案内は機能不全状態だ。それほど知られたくないなら消える他はない。

お化粧はすたりスマホという車内

関本　かつ子

化ける様は見られたくない、知られたくない筈だったのに、そうではなかった。手の内を全部さらけ出して恥も外聞もない娘たちの形振り構わぬ光景が消えたのをやれやれと思っていたらスマホ一色の車内風景である。国民の知性が劇的に高まったのではない。ゲームを楽しむ遊び志向に火をつけた第二の〝一億総白痴化〟である。かつ子さん、文明の進展は〝考えない葦〟をどこまでも量産させると考えましょうか。

名刺だけ貰い有難がっている

片山　忠

だが有名人の表札はよく盗まれるという。盗んだ表札をどうするというのか。第一使いものにならないし、売り出す訳にもいかない。仮に売れたとして買うた人間はどうするのか。密室に飾るしかない。

有名人の名刺は誰もに見せられる。ほう！こんな方と交じわっているのかと感心される。感心されること自体、身分不相応の疑念故なのに気づくこともない。陰湿や上げ底、上辺だけの人間は忠さんと嗤うしかない。

カレンダーに何もかも書く物忘れ

升成　好

僕はA5版の手帖を使っている。開けばA4に一ヵ月の予定を書く。毎朝睨み、見渡す。碁盤の局面と同じで日々変わる。それから紙に今日明日の細かな段取りを書く。そうせねば抜け落ちる。大した仕事もしていない小世界の小局面で僕の悪戦苦闘は続く。

なぜ悪戦か。物忘れと戦っているから。なぜ苦闘か。負けそうになっているから。好さん、あなたも頑張れ、僕も踏ん張る。

人数が余り人材不足する

喜田　准一

シナリオ作家を養成する学校の講師を務めていたことがある。年二回年間一〇〇人が入学して二年間学ぶ。数年に一人、専門ライターが育つかどうかという割合。その人材を生み出すために数百人が授業料を納める。報われない多数派が学校を支える。文学学校も似たようなものだ。

競争社会の非情と無情である。選別され、淘汰される情景を見るのは辛く寂しい。正に「人の世の寂しきものにみちしるべ」である。

常連を大事にしない宝くじ

江島谷　勝弘

場末の宝くじ売り場から三億円の当りくじが二枚出たと報道された。確率は同じだからどこで買おうと変わりはないのに付和雷同する。柳の下にいつも泥鰌はいないのを忘れる。

宝くじは世渡りのルールをはずれて成り立っている。有難い常連やお得意が大事にされない商売であることも忘れる。報われざる膨大のお蔭で宝くじは繁栄する。今年も貧乏人の団結が大金持ちを生む。人の世の嗚呼の溜息である。

（『上方芸能』誌発行人）

自選集

万歳三唱きれいに締めていただいた
句集ひらくとわたくしが立っている
マッサンも歩いた町並みを歩く
男ばかりのイクジイになってやる
カープ女子どうするイケメンの将だ

小島蘭幸

風花や少し騙して行った人
うつむけばうつむく影の美しさ
預金などないが味噌汁あたたかい
以下余白言いたい事はあるけれど
老愁の真只中の浮世かな

波多野五楽庵

年齢差若い笑いがピンと来ぬ
窓の花も太陽好きよとプロポーズ
陽のそそぐだけの野花も子供好き
天女笑って舞い出でそうな青い海
笹の葉が揺れて励ます海の風

林瑞枝

100周年目標できて生きる欲
ＥＬＤ月は眩しいかくれんぼ
上手に歳とってる人のいい笑顔
逃げるが勝ちの夢でベッドを転げ落ち
小さな蟻群をつくって生きのびる

前たもつ

黄昏にまだどきどきとして遊ぶ
もう少し遊んでいいと心電図
風船も逃げ腰になる向かい風
着ても脱いでも深くなってく老いの色
ひとつずつ脱ぎながら書く私小説

政岡未延子

父超えてからもやっぱり父である
十二月この世の終わりではないが
急いでも急がなくても年の暮
冬の夜の長さ一冊読み終える
ことさらに師走師走と駆け回る

三宅保州

動かねば老いるわたしに油さす
字あまりのこれからを行く花の道
フクシマを綴るわたしも底力
気まぐれな今日はビールと糠漬と
女ひとり生き抜くための黙否権

宮西弥生

かくれんぼ

失くした物またかと笑う仏たち
抽斗(ひきだし)は暗くて旅に出たらしい
どちらかが飽いたら終わるかくれんぼ
とうに忘れたふりして探し続けていて
そのうちにきっぱり諦めるつもり

八木千代

古稀や古稀修正ペンが手離せぬ
不整脈だとさ恋では無いらしい
真人間になる頃死刑執行だ
談合と賄賂モラルの文字が泣く
賞罰は無いが浮気は二つ三つ

両川洋々

いいかげん戦争ごっこやめなはれ
真っすぐに歩ける道をがむしゃらに
人間は阿呆だ馬鹿だと八釜間しい
地に落ちた栗もりんごも樹にならぬ
存命の喜び楽し八十三歳

板尾岳人

東京にも広っぱがあり遊んだ日
イヤリング母の形見に守られて
母の想い汲んだつもりの早とちり
どこで吹くのか秋風に乗りシャボン玉
いいことがあると信じて開けるドア

奥田みつ子

折衷案まだ納得はせぬ頑固
逆説を出して相手の腹を読む
久し振り帰る故郷の様変り
それとなく本心を聞く酒を注ぐ
目配せのサイン通じぬもどかしさ

河井庸佑

ホウレン草だけでポパイにはなれぬ
わたしの影が私から離れない
ヤジロベエですか中間管理職
一分のドラマ泣いてた児が笑う
お気の毒他人は嬉しそうに言う

川上大輪

下駄の音からから聞けぬ世に変わり
亡き母と茶飲み話がしたくなる
天女には一度も逢わずまた師走
魔法の箱あけず幸福信じたい
余生楽しむ友一人去り一人逝く

小西雄々

見守っていよう花芽を抱くのです
稲を刈る子らの瞳は生き生きと
レモンティーそして大人になっていく
手作りの村でいのちが洗われる
地球色昔はもっと青かった

斉藤劦

一番は富士山　二番伯耆富士
月光の街マイカーは宇宙船
若者に分からぬ金のおそろしさ
頭から枯れる花木も人間も
道端で倒れぬようにネジを巻く

新家完司

研鑽と努力多くを語らない
民謡も封印します御嶽山
来たるべき刻受け止める沈丁花
おばちゃんの気骨台風迷わせる
好事魔をかいくぐっての好きな道

津守柳伸

音楽はさっぱり進軍ラッパ吹く
百才の元気糠漬けあればよし
猿よりも早起き栗が落ちはじめ
笑うたらいけないでしょうか鬼瓦
よく焦げる鍋だ三分が待てん

遠山可住

一年に一度は整理する机
この歳で歴史は繰り返すなんてイヤ
テレビなど消して抜け殻になった夜
ごゆっくりお日さま今日は誕生日
新しい軸へ期待の輪が回る

都倉求芽

養命酒のんでいのちを慈しむ
箱入りの茶碗が何と百万円
頬杖をつき考える男(ひと)になる
認知症ではない馬鹿のつく野郎
恋をして愛するというこころ酒
男が変わる冬がきて雪が降る

土橋螢

寂しくて包帯巻いておくこころ
後期高齢おのずと道は見えてくる
ひたすらに褒めて暗闇くぐり抜け
流暢な言い訳尻尾見え隠れ
老人と思ってくれてない家族

西出楓楽

誘われてみたいというのは勇み足
誘われてきましたという投票所
誘ってはくれなかったは後ろ向き
誘ってはみたが都合は読めていた
結論は誘い誘われのはずだった

仁部四郎

第21回 川柳塔まつりは
平成27年10月3日（土）
開催予定です。

第三回 卑弥呼の里誌上川柳大会

兼題と選者（各題２句）

「　色　」　森中惠美子　選
「　穴　」　大西　泰世　選
「　時　」　木本　朱夏　選
「　味　」　樋口由紀子　選
「　群　」　赤松ますみ　選

投句用紙　専用用紙(コピー可)またはA4大用紙
参加費　1000円（切手不可）発表誌呈
締　切　**平成27年1月15日㈭ 消印有効**
投句先　〒842-0103
佐賀県神埼郡吉野ケ里町大曲2426-2
卑弥呼の里川柳会　真島久美子
TEL・FAX 0952-52-1061
賞　各題特選１句・有田焼　一万円相当
各題佳作５句・有田焼　五千円相当
（その他サプライズ賞あり）
※男女を問わずたくさんのご参加をお待ちしています

川柳・明日香
創刊20周年記念全国誌上大会

課題と選者（５人共選）

「　新　」
佐藤　岳俊・戸田美佐緒・林　ひかり
新家　完司・木本　朱夏
２句詠（表現自由・読み込み可）

参加費　1,000円
締　切　**平成27年１月31日(消印有効)**
用　紙　自由（清記します）
賞　合点10位まで呈賞
発　表　川柳・明日香　平成27年4月号
投句先　〒369-1102
埼玉県深谷市瀬山21の９
てじま方
明日香川柳社　TEL 048(583)3093

温故知新

『谷垣史好句集』より

美女だから迷彩服が似合うのさ
烏賊という文字面白し墨を吐く
ロマンスに縁なき髪となりにけり
散策の道筋にある墓石店
夏の女の鎖骨に魔力めいたもの
タイガース　選手もファンもきっとマゾ
もう強いて生きたいという世でもなし
大河かな死者が流れる神が流れる
戻らないものに株価と体重と
活け造り鯛は死ぬほど恥ずかしい
運命はいつもふらりとやって来る
髭を剃る誰方が来てもいいように
特攻に似て冬の蚊を殺せない
ソ連崩壊　大家のいなくなった長屋
風葬にしていただけるならモンゴルで
ぼくも政治もぼてぼてのゴロばかり

西出楓楽選

河内長野市　藤塚克三

半熟の決断ぶるん揺れている
前向きに考え後ろ振り返る
ありのままの自分になっていけたらな
閻魔から待っているぞと夢便り
スーパーのレジ並んでもまだスマホ
どうですか聞いてパソコン見てる医師

尾道市　日谷　寛

川柳塔に集う柳友みな笑顔
川柳界に川柳塔が旗手たらん
我も卒寿柳誌九十年祝う
大阪に興す川柳甲子園
川柳塔縄文杉に負けてない
新しい歩みへ拍手なりやまず

泉大津市　助川和美

恋愛中真っ赤なチェリー夢見てた
背広からカジュアルに変え父元気
また逢いましょう言うて五年も便りなし
支えてくれた人を忘れる自惚れる
君しか出来ぬ言われ単身赴任する
名月に今日も言いたい事を呑む

大阪市　太田としお

他人事と思われません孤独死は
好きになる武士の情けが分かる人
ご清潔言われそれから肩が凝る
陽はまた昇る明日の日本を信じたい
転んでは只では起きぬ私です
女子力は開花している昔から

大阪市　髙杉　力

またいつかいつかがあった例ない
アイドルにサインを頼む警備員
年下の閣僚増えて老いを知る
席取りに負けて車両を一つ換え
あいづちが欲しくて誘う縄のれん
孝行は親より先に死なぬこと

岡山市　丹下凱夫

秋日和どこかに落し穴がある
気付かれぬように出ている昼の月
ひそやかに逢う人のあり酔芙蓉
月食でなくしたボクの影法師
他人とは思っていない常備薬
夜明けからきっといい日とわかる風

羽曳野市　藤原大子

ほっとすることも無駄ではない時間
言いすぎても言いそびれても残る悔い
もう少しが我慢できずに口はさむ
こだわりが右向け右を聞き入れず
二歳児が自己主張するイヤと好き
ジェラシーがあってまだまだ伸び盛り

神戸市　木村忠義

好きな挨拶「ありがとう」「お大事に」
生きるため注意事項が増えてきた
海・山・田ぼくの心の薬です
眼鏡が壊れ惨めな暮らしする羽目に
言い違え大恥をかく英会話
同じ花一斉に咲き仲がよい

南あわじ市　萩原狸月

総理殿与謝野晶子をご存知か
チャンネルの違いに惑う旅の宿
白魚がピアノに歌を唄わせる
バッカスに魂売って夜の街
もてなしをしびれる足で耐えるお茶
薬指白馬の王子待っている

奈良市　尾畑なを江

手がかりのあいまいな時勘で行く
好奇心全開にして疲れきり
共白髪とうにツーカー諦めた
人並に生きることってむずかしい
旅最中ふと人生を振り返り
一本のペンの力のもの凄さ

川崎市　成田せいじ

ダメだして山動かした巨星逝く
国技館どこの国技か書いてない
青色で進み射止めた物理賞
オレオレと言って母にも怪しまれ
デパ地下の試食で巡る観光地
ライバル紙傷にここぞと塩を塗る

和歌山市　北原昭枝

ぽつぽつが好きでうだつが上がらない
もう一本つけて今夜は語り合う
望郷へ見上げる月が冴えている
若き日のおもいを語る影法師
よく眠る夫の顔が子に戻る
晩秋の空に豊かなつるし柿

嬉しいよ親しき人のノーベル賞
研究の苦節知る故光る賞
マスコミの騒ぎ過ぎたるノーベル賞
喧騒を見舞う手紙を受賞者に
マスコミのやり過ぎにこそ興さめる

愛知県　樺　嶺志

似合うねと言われピンクがお気に入り
夫婦とは色だしあって絵を描く
退屈な番組見ては笑ってる
幸の数倍苦労妻にかけ
被災地にかける言葉のもどかしさ

大阪市　浅井公平

ビンゴゲームリーチばかりで終っちゃう
洩れてくるヒソヒソ話耳ダンボ
向かい風追い風受けて老いの坂
この年じゃ元は取れないバイキング
延命を拒否する旨を子等に告ぐ

大阪市　磯島福貴子

形まで人真似すると何もない
ソフトだが核心ついたアドバイス
三叉路で自問してみる夢最中
ゆっくりと歩幅合わせてする介護
山肌が崩れて知った天の声

大阪市　内田志津子

同窓会確かめあった老い加減
抜けがらにならないように五七五
居酒屋の喫煙いまもフリーパス
心まで束縛されぬ羽がある
秋風に散歩の距離が伸びている

大阪市　宇都満知子

気付かれずたばこを吸いに部屋を出る
盛り塩であるじ息災縄暖簾
七輪で秋刀魚を焼いた遠い日々
クーラーのスイッチ切替秋が来る
人の世を見透しとまる烏かな

大阪市　大治重信

ライセンスいっぱい持って嫁かぬ気だ
才媛といわれた友もずれてきた
迷いなさいそれが若さというものだ
いい潮どきとにもかくにも別れましょ
賞味期限なんてわたしにありません

大阪市　柴本ばっは

英語より笑顔が世界共通語
ここだけの話が殊に面白い
さあ歩け笑えとアンチエイジング
もう一個食べろとお茶がけしかける
為すことの無き日楽ではありません

大阪市　田中ゆみ子

すれ違う人の香りがいつまでも
冷や飯が妙に恋しい鍋の後
万博の夢現実になってきた
ツバメからひかりのぞみとバトンパス
あなたとは神の許しで結ばれた

大阪市　藤田武人

身体中迫る老化を手懐ける
当たっては砕けています趣味の壁
6Bと紙をサプリにして元気
三日目のおでんさすがに食べ飽きる
出来ちゃったもう冗談はない二人

池田市　上山堅坊

黄金の田に紅を指す曼珠沙華
敏感に台風響く台所
半日のパートで主婦のリフレッシュ
天高くウエストライン消えてゆく
漬物で新米の味浮き上がる

貝塚市　石田ひろ子

故里はトンビぴいひょろ舞うところ
コスモスが揺れるやさしい風といる
少し飾って生年月日遠去ける
迷ってる風のひと押し待っている
検査が続き病人らしい顔になる

貝塚市　吉道あかね

軽いノリ空気読めずでつまはじき
逃げ足も超特急の軽い人
台風と共に頭痛が上陸し
重い口を竹馬の友が開かせる
午前様家目前の重い足

河内長野市　大島友子

疑いを持たぬ母には嘘つけず
病得てますます絆強くなる
はじけない堪忍袋母は持つ
縫いものをしてるひととき傍に亡母
針を持ち母の仕草を追いかける

河内長野市　森田ひろこ

老いてなお花を咲かせる夢を見る
ハードルを少しずつ上げ新境地
時を待ちもつれた糸を解いていく
戦争を知らない者がはしゃぎすぎ
医師よりもうまい問診老いの友

堺市　大和峯二

月食の神秘損う街路灯
電柱の根元はいつも湿ってる
円満はお互い我慢してるだけ
いつのこと貧乏人の子沢山
夫婦って他人どうしでできたもの

高槻市　三谷白黒

何となく馬が合う友心地いい
古希に趣味麻雀加えはまってる
母さんは縺れた糸の解き役
掛け値なしいい女房とよいしょする
掛けられた情け素直にありがとう

豊中市　荒木郁子

競技会老いの負けん気笑み誘う
行き先は決まってるのに何急ぐ
病気して美女になったと褒められる
上弦の月の光に母捜す
流行って許容範囲が無限大

豊中市　荒巻夢

フンフンと今日も愚痴聞くおつきあい
太短い指も親子の絆かな
女ですたまの意地悪顔を出す
老いの頭スイッチ入る敬老日
地下足袋がうずうずしてる秋まつり

豊中市　南正代

鰯らは自在に群れて輝けり
自らを灯して生きる深海魚
地に降りて神は戦に使われる
傷に塩すり込むように靖国派
レジームを昔にもどす呆け者

寝屋川市　荒川鈍甲

妙案は会議の席より縄ノレン
火に油そそいだようなホラを吹き
よく喋り聞く耳もたぬ妻の口
ゼンザイを食べて別れる老いの恋
新刊書ぐらいじゃ落ちぬ脳の錆

寝屋川市　岡本勲

脳味噌を洗濯いしたい時もある
漱石の載る朝刊の待ち遠し
昼寝して夜も寝られる有り難さ
お金より友の絆が宝です
休日は素ッピンですのTELにして

東大阪市　織田登子

ふと気づく秋はすぐそこ虫の声
人前は歳をとっても上がるくせ
よかったとその日の日記終戦日
ドラマ見て戦中戦後なつかしく
ハローチューインガム初めての英会話

箕面市　寺井柳童

口利かぬこんなお仕置あったのか
定年後何故爪ばかり伸びるのか
物よりも値札を先に見るお客
買いました防災セット二人分
湧き水が買い占められてゆく日本

八尾市　田邊浩三

ネギ茗荷家庭菜園雨を待つ
雨上がり花も私も生き返る
雨ですとトタンの屋根が唄い出す
山肌を凶器のように雨走る
ゲリラ豪雨雲走らせて走らせて

八尾市　中岡　妙

米農家パンを買うのは気が咎め
良く食べて働くことは生きる事
辛くても夜はかならず朝が来る
楽しみはソフトな野道日々散歩
仕事には疲れ遊びは元気出る

大阪府　小栢　こずえ

のびのびと育ってほしい宝の子
布団に地図画いた息子も二児の父
臨場感地図で確認古戦場
激戦のラーメン銀座味競う
かたちから入って奥儀極めます

神戸市　井上　忠貞

隠したい弱み涙が洗い出す
霧の中しばし隠れていたい日も
モカの香に寄りかかっての一呼吸
締切りの中でじだんだ踏む百足
本当の事を言うから割を喰う

神戸市　冨永　恭子

口べたで冷たい人とあしらわれ
姫鏡十五の春をおき忘れ
説得の母の涙に負けました
のびのびと生きて悔いなし青い空
八十路坂生きるハードル少し下げ

神戸市　山根　弘子

転た寝の中でも探す妻の影
舵取りは妻に任せた定年後
古稀だってまだまだ恋の火種あり
新米の旨さの中にある苦労
酒タバコ止めてメタボの薬飲み

小野市　田中　辰夫

青空に月白くして古稀の秋
あらまほしことなど無くて柿たわわ
折り合いをつけた終章模索する
定年後苦労話をする夫
業務連絡のような会話で金婚に

川西市　大坪　一徳

天高く地には実りの秋祭
泣き笑い五分五分なりし老いの坂
残り福後生大事に共白髪
五里霧中授かる運の赤い糸
木曽節を御詠歌として聴く無念

川西市　日野岡　和之

篠山市　藤井美智子

百一歳感謝感謝で母は逝く
千の風百一歳の亡母乗せて
もう何も言わない亡母は我が胸に
介護する我が心にも介護する
腰痛をかばう介護のコツ探す

三田市　多田雅尚

プリン体ゼロにひかれて発泡酒
カモ親子渡る道路はビップ並み
掃除ロボ犬も一緒に真似て見せ
バナナからイグノーベルを思いつく
ジャンボくじ手取りはいつも五百円

西宮市　株元玲子

朝のうち脳の細胞まだ元気
ママチャリと二人三脚明日を行く
ママチャリの時速だんだん重くなり
ママチャリの油も古びギーコギコ
夜の九時そろり瞼が下りてくる

奈良市　安福和夫

手間かけた膳には箸が畏まる
ドンピシャリ着地決まって美技生きる
踊り場でひと息入れるクセがつく
裃は脱いだが素顔見せぬまま
歌声がハモって仲間盛り上がる

奈良県　谷川憲

趣味が増え次第に埋まる予定表
坂道が段々きつくなる加齢
夢のなか持病すっかり治ってた
倉の町モネやグレコに会いに行く
名人芸絶妙の間にどっと沸く

和歌山市　磯部義雄

親の手を離れ戻らぬブーメラン
釣りに行く早朝妻に置き手紙
聳え立つ御嶽山が憎らしい
今時の名前ルビなく読めません
料金も税も払わず吸う空気

和歌山市　平田元三

ツーカーで済むから夫婦口利かず
お朔日塩盛ったのに蟻の山
店閉鎖働く人の糧思う
拾い物あるかもと行く蚤の市
ヒトコトの手間苦にせずに賀状書く

和歌山市　福呂秀子

残り火を大切にして辞書を繰る
優しさと趣古寺に百日紅
猛暑去り元気の気配電話口
待ち時間川柳塔誌早めさせ
満月が凜と見透かす心内

紀の川市　楠原富香

積み上げた知識が消える認知症
歳月が絵になる夫婦作り上げ
生真面目に生きて時代に流される
散りぎわの花に我が身を置きかえる
精一杯生きて来たから迷わない

田辺市　小川イセ

春夏秋冬花は気取らず咲きほこる
老いぴたり付いて来るから振り向かぬ
鍬洗う真っ赤な夕日拝みつつ
お人柄偲びつつ読む記念号
いやなこと総て忘れて日の出待つ

和歌山県　森下よりこ

台風の通過を待っているひとり
ばあちゃんの知恵を絞った褒め言葉
世論動かすか香港の若い声
山ガールになっていたかも私も
久し振りの雨でしっかり昼寝する

鳥取市　近藤秋星

初恋の星永遠に美しい
砂丘には四季折々の顔がある
長生きはしたくないのに生かされる
寝ていては果報など来ぬ稼がねば
何悩む此岸彼岸の境い目で

鳥取市　田中天翔

よそ見している間に寿命きてしまい
テキストに無い人生が面白い
手を貸して貰った恩は忘れない
夫でも貸したお金は取り立てる
ぽっかりと記憶が飛んだ二日酔い

倉吉市　岡﨑美知江

そっくりだ鏡の中に母がいる
嫁選び母そっくりの人選ぶ
ゆるやかに老いて夕日を眺めてる
朝日より夕日が映える過疎の村
旗色を見ながら動く男の世

倉吉市　中村毅

神様はしないだろうな依怙贔屓
台風の進路気になる収穫期
コスモスとススキが揺れを競う風
川柳でボロボロになる広辞苑
ペダル踏む小さい秋に囲まれて

米子市　生田和之

また敗けてスポーツ欄を三日見ず
清濁を呑んで老後にたどり着く
高台を買って今日とて坂に泣く
彼岸花咲いているかと墓参り
記念誌にくすぶるように名を連ね

米子市　永井三津子

生き下手が尖ったまんま泳ぎきる
不便だが田舎の暮らし温かい
欲と言う影の本音に惑わされ
この五体切らずに神へ返したい
丸くなりゃ楽に暮らせた嫁の椅子

米子市　野川宣子

終章は楽しかったと結びたい
一族を結んだ根っ子太かった
程好い距離で愉快に嫁と同居中
愉快な風に吹かれ長生き出来そうだ
正義感翳すと軋む音がする

鳥取県　飯野菖子

山里がしばし賑わう選挙カー
選挙戦過疎の昼寝をおびやかす
長らえて我が身の始末気にかかる
相棒の居る幸せに気付かない
幸せがよそ見の道に待っていた

鳥取県　下田茂登子

音沙汰ない息子離婚の気配する
淋しさに追い打ちかける夜長来る
物忘れ毎度のことで気にもせぬ
返事せぬ亡夫に向かい喋り出す
夫逝って家の管理が残された

松江市　武島千代枝

限界を知って妥協の道選ぶ
ビンゴゲーム百均品で盛り上がり
芋の蔓仲間に入れて秋を食う
窓灯りそれぞれドラマ待っている
答え出ぬままに東の空白む

雲南市　菅田かつ子

秋桜の中で道草したくなり
山彦の余韻残して夕茜
放浪の旅に出てゆく白い雲
格好良い案山子に恋をした雀
褒められて今更後へ引っ込めず

雲南市　松本昌

老妻の幸せ白菜切る音に
メールより声が聞きたい雨しきり
無事帰る初心者マークに胃が痛む
父母眠るこの地に次は俺の番
パスポート我が家の漬物欲しい朝

松江市　中筋弘充

押し売りの電話しばらく聞いてやる
少々の酒は薬と言う主治医
ああ言えばこう言う癖が治らない
百均で買った茶碗が壊れない
パーマから戻った妻がよく喋る

沈黙が解けてポツリと秋になる
マスカット口に含んで無言でいる
頷かぬつもり皿ばかり誉める
他言無用があちこちで囁かれ
回遊魚だって潮時知っている

岡山市　工藤千代子

家族の灯まだ歯車でいるつもり
苦も楽もみな懐かしい現在地
迷ったら多めに入れる熨斗袋
曼珠沙華秋の舞台の真ん中に
アドリブが洒落にならずに落ちる穴

岡山市　藤成操江

鍵一つ二つと捨てて行く余生
酒取るか命取るかと言われても
人並みでいいと一人の立ち泳ぎ
転ぶたび太くなってく私の根
独り言ばかりが増えて秋終わる

瀬戸内市　東槇ますみ

温泉場お腹引っ込め姿勢良く
笑いのツボ涙のツボが同じ友
ふくらはぎ鍛え効果を期待する
「早く来て」畑に呼ばれ今日も行く
空店舗空地さみしや風通る

玉野市　片岡富子

医学書に時が薬と書いてある
ていねいな文書で届く不採用
育児書に添うて育ててそむかれる
輪の中でずっと無色のままでいる
着の身着の儘とても自由と嘯いて

備前市　森ふみか

くじけまい祭り太鼓が鳴っている
一度にはふたつの事がむずかしい
良い事をそろそろ綴る閻魔帳
留守番の夫に弾む酒肴
原点に戻る元気な握り飯

岡山県　田中恵

生きている夢の続きへ夢を積み
せせらぎへうたた寝の夢ふわり浮く
特命係言葉のしっぽ逃さない
おしゃべりへ鴉もカアと笑ってる
台風の安否のメール子よ孫よ

竹原市　若年幸子

頑張った時は自分を褒めてやる
よそ様の話で弾む午後のお茶
輪郭が崩れた字余りのお世辞
味噌汁の香りが呼びにくる寝床
本心は見せぬ華麗なうわぐすり

三原市　鴨田昭紀

どん底でしっかり掴む蜘蛛の糸
花野茫茫　想定外の風と会う
夜の虹まだうたかたの恋に触れ
逃げた影愛想笑いをして戻る
揺らぐ決断ケイタイが鳴り止まぬ

山口市　中前幸子

生存の確認をする年賀状
老いて尚無欲になれず詐欺の餌
追伸の陰にかくれている本音
脇役で生きた男の自尊心
他人ごとのように呟く老い独り

宇部市　高山清子

苦労した人だ物腰やわらかい
しなやかな仕草の奥にある気品
廃校の跡にしぐれる校訓碑
残照へ孤高無言の木守柿
言葉の海で犬掻きばかりしています

松山市　栗田忠士

紅葉の山が突然怒り出す
若い芽を御嶽山が呑み込んだ
月食に暫し見惚れる秋の虫
値札見て秋刀魚の前で腕を組む
ベネッセのお詫びで電子マネーなど

松山市　神野きっこ

麗らかや再会の皆よく笑い
地蔵みな微笑んでいる伊予の秋
几帳面すぎて猫にも嫌われる
反り返る気持の鼻を風が撫で
一筋の足跡残す気で生きる

今治市　渡邊伊津志

そばに居てくれると気持ち楽になる
甘いもの脳へエネルギーを送る
コンビニのおでん和食の顔をする
長寿国和食ブームに火を付ける
五十年そばに空気のいる安堵

大洲市　花岡順子

本当は海を知ってる金魚の瞳
目を閉じて夜間飛行の空にする
声出して笑い昨日を四捨五入
心こころ形状記憶です私
試されているのか柔かい言葉

佐賀県　真島久美子

まがり角私の未来その先に
うそつかぬカメラにむかい機嫌とる
忘れ物忘れたことをまた忘れ
口げんが決して負けぬ卒寿母
骨折をするまでは履くハイヒール

山鹿市　柳田白沙

夕焼けの金ふうわりとしょい帰る
マニキュアを銀から金へ秋の中
泣いていい相手知ってる赤ワイン
エンゼルが一本を消すバースデー
読み聞かす自分が先に泣いている

弘前市　肥後和香子

目標もそのまま終わる十二月
引き際で男の度量値踏みされ
玉子かけご飯は茶碗選ばない
朝ドラ後今日もスタート軽い腰
来年はスマホマスターするつもり

塩竈市　木田比呂朗

倒れた日母の予約は美容院
母逝きて月下美人がその夜咲く
百寿まで少し残して母らしい
家族葬肩肘張らず和やかに
大往生南無阿弥陀仏亡母浄土

つくば市　嶋本喬

好物は豆とフルーツ笑うこと
怖がりに手術せよとは御無体な
小一の給食ゴーヤ出たそうな
孫達に勇気元気を貰ってる
身支度に犬は不安な顔をする

横浜市　巌田かず枝

誘導尋問ポロリ本音がこぼれ落ち
美しい横顔亡母は幸せだったのか
身に覚えあるからだんまりを通す
図星だなりんごのように染まる頬
嬢ちゃんばあちゃんまさか私のことですか

横浜市　川島良子

でき過ぎたきゅうりレシピが増えました
ハイテンションの孫につられて浮かれだす
楽しいこといっぱい孫と長電話
標準時間六つ混乱しませんか（カナダ旅行2句）
メープル街道カナダの地図にない名前

横浜市　長島亜希子

一日を大事に生きて老いて行く
悲しみは病む友多しこれが老い
ノー天気生き方上手それがいい
シャンソンを口ずさむたび若返り
心から話せる友は宝物

静岡市　渡辺芳子

戦などしてる場合じゃない地球
嫁を得て義母の心情合点する
帽子傘蒸発ボケも本調子
自立して生きてきたんだ胸を張れ
露天風呂しぶとく生きる蚊に追われ

長岡京市　日置みどり

家庭内野党にされた定年後
不揃いの青いりんごが自己主張
着席が右に偏る与党席
校庭で輝き授業では曇る

豊橋市　藤田千休

古狸いくらでも切る空手形
大盛りをちょっと減らした検査前
芯もなくそんなもんやで生きている
海の日はあると山までしゃしゃりでる

大阪市　寺本実

ボケ防ぐ本を読みつつ居眠りす
タクシーと抜きつ抜かれつ新御堂
家急ぐ人それぞれの秋の色
懐かしく会うのは誰か死んだとき

大阪市　梅里南天

幾度かは嵐乗り越え今日があり
だいじょうぶ終焉だれも来るからね
惚けたって贈り物だと受けとろう
今がいいいつの時代も言い聞かせ

大阪市　橋本典子

川柳は今の世の中すぐ分かる
平和という車に乗った若い鳩
人形も喜怒哀楽を見せている
増税で何時も泣いてる小銭入れ

大阪市　前川善之

久しぶりだけど名前が出てこない
人生は一日毎のアミダくじ
断捨離はこまめにやれば楽なのに
手をつなぐ老いた夫婦のほほえまし

大阪市　松田聰

終電まで一杯やろか飲み仲間
医者通い順番取りで友になる
日和傘杖の代りをしてくれる
恩給は多少減ったが有り難い

大阪市　吉田知之

月見酒天体ショーが肴なり
ほほえめば知らぬ誌友となごむ席
柚子熟れて手の届きそう塀の外
摩訶不思議漆黒の宙ショータイム

大阪市　若本安代

南国の神社ビーチの波の上
孫晴れ着暑さに耐える七五三
琉球の風に吹かれて七五三
ウチナーンチュ（沖縄の人々）息子家族を頼みます

河内長野市　穂口正子

新喜劇後を残さず笑いこけ
お父さん何食べたいと今日も聞く
近頃はシネマも年を聞かれない
年賀状年々減らすこの勇気

河内長野市　渡邊修

優勝へメンバー燃えてミーティング　堺市　梅木澄空

病衣着て素顔の我に会えました
免許証に鋏を入れて後呑気
夕飯のメインの刺身見切り品　堺市　近藤治子

道の駅曲ったキューリハイおまけ
良い明日が来ると信じて今日終える
助け舟くれた父母なつかしい
おいしいの言葉はげみに料理する　堺市　羽田野洋介

都合よくもの忘れする老いの意地
悪友の方が人情細やかに
盗み食い重ねりゃ次はダイエット
刺激し合うライバルがいて今がある　堺市　増田わこう

野次の質議員の程度よく分る
県議さん号泣するも涙出ず
国会はねじれなければ独裁だ
戦争で民を守った歴史ない　堺市　山﨑早苗

せつなさは親に言われたすいません
同窓会あの手この手で若作り
お姉さん呼ばれて振り向くシルバーカー
熱を出す元気が今も残ってた　四條畷市　西川ひろし

テロ屈せず世界変えるとマララさん
国作りテラ銭頼り明日見えず
彬いた衛戍監跡踏みしめて
爪に火をともせず夜長眠れずに　豊中市　源田啓生

災害の死角でそっと生きている
手付かずの明日の為に飯を食う
生存を賭けて藪蚊が血を奪う
愛のバラ棘も一緒に貰い受け　羽曳野市　磯本洋一

秋暑しデング恐いと合羽着る
体育祭六ヶ所に貼る絆創膏
医者でなく財布が止める酒煙草
備長炭鰻が無くて秋刀魚焼く　羽曳野市　安本美喜

膝痛に気象予報士なりそうな
おせちの注文早く早くと案内状
娘の温み手編の帽子贈りくれ
素顔です面会お断りしています　枚方市　河田洋子

どうせなら孫の結婚みてみたい
インプラント六十代ならやっていた
孫娘生きる手に職持たせたい
終活は好きな事して老い忘れ

枚方市　坂本ミヨノ

一日を呑んだ夕映え燃えている
晩秋はのど越し水も冷たくて
卒寿越しまだ夢みてる辞書を繰る
大正も昭和平成母している

枚方市　松原保

ダダをコネ子供みたいな野党群
県議さん同類議員あぶり出し
この国は想定外が多すぎる
オスプレイ不安無いのかパイロット

藤井寺市　田付絹枝

腹据えて喜寿の定検受けに行く
結果聞く心の準備深呼吸
素食して血液検査オールパス
夢覚めりゃ今日もバタバタさしすせそ

八尾市　前田紀雄

消費税庶民の財布底抜ける
凡人で知ったか振りの身の破滅
てのひらに乗らぬ女房持て余す
ＴＰＰ実りの秋に影落す

大阪府　髙木道子

目が合うて慌て直角鬼やんま
柿の赤平時有時のカラスたち
百歳の笑み置き去りに黄泉の旅
称賛が沸点となり自惚れる

大阪府　西川冷子

列島を跨いで四股踏む十九号
嵐去り初冠雪の朝となる
弱気かと思えど八十路サプリ飲む
モンゴルから又も怪物賞二つ

大阪府　畑中節子

栗実落ち坂道転ぶ昼さがり
栗拾いどこかで匂う金木犀
手作りを褒め合い遊ぶ生き上手
大根を間引く手先に赤とんぼ

神戸市　玄番美恵子

高騰の野菜芯まで刻んでる
もう一度ここに立ちたい山の地図
初めてのお使い地図を握りしめ
秋夜長ＬＥＤがありがたい

神戸市　輿水弘

派遣だが思いはでかく居づいてる
声を聴き磨いています腹の虫
鳥瞰図迷った道が濡れている
青汁にちょっぴりお酒休肝日

小野市　藤原泰宏

人間の思考が鈍るお昼過ぎ
強くなる雨も暑さも台風も
長い列蟻がせっせと冬支度
宣誓にごちゃごちゃ少し言い過ぎる

飲んでよし浸っても効くラドンの湯
ワイナリー試飲の余韻バスの中
試し食いしても買わないお菓子飴
格安の旅麦とろメシに癒される

加西市　中川　修

任せ整理娘は捨てちゃう惜しい服
生きる証髪は伸び背が縮む
それなりのお化粧にあるちょい自信
青い空急ぐことない杖の足

加東市　岩本　美緒子

赤い月三年振りに手を合わせ
床ずれをさせぬ介護のありがたさ
窓覗く月に聴かれたひとりごと
黒豆とお城の街にほこりもち

篠山市　石田　久子

極楽はお湯の中から沸いてきた
めがね越し視線が語るご叱責
これ以上無理な仕事だ明日がある
湯上がりに風鈴の呼ぶ茜空

篠山市　佐々木　勇

楽しみな今日から先を思案する
春がいい秋もいいねと京の旅
主婦として輝く笑みを忘れない
よく食べておしゃべりも好き女子の会

三田市　足立　つな子

とり急ぎ私の気持風に乗せ
おかあさん寂しい秋になりました
改善の余地ありますね私たち
そしてまた歩いてゆこうこの道を

三田市　上田　ひとみ

トンネルをくぐり介護を模索中
気力あるだけど歳には勝てないなあ
老い二人台風の夜超早寝
旬の秋栗豆米と舌鼓

三田市　辻　開子

心のつぼ押せば笑いがこぼれ出る
水中花枯れない辛さもて余す
子を亡くし乳出す鯉を離す池
見続ける夢がいまだに叶わない

三田市　野口　晶子

飲薬並べ比べてにらめっこ
悩み事逆に思えば笑い事
説教とお灸の痛さ知らぬ孫
飛行雲青空高く何処へ行く

三木市　山口　久子

思い出も共に断捨離後悔す
どん底に落ちて味わう世の情
秘めごとは言葉話せぬネコに言う
負けるならとことん負けて立ち上がれ

宝塚市　井上　風花

新冠沈む夕陽に馬の影（北海道）　宝塚市　丸山孔一

無為無策だけど三度の飯は喰う
悲しみを愛で包んで花は咲く
言いました聞いてませんと今日もまた　岩出市　村中悦男

年金をねらって飛来する息子
見守り隊道草楽しと教えない
道草の楽しさ知らぬ子ら育つ
平凡な暮らし大事にする後期　田辺市　大峠可動

相討ちになったと思う対角線
紅葉逝く風の囁き背に負うて
病臥以後しっぺ返しの鬼ごっこ
哀楽に絵あり八十路の風負うて　鳥取市　大前安子

胸の中ちょっとしょっぱい祖母が住む
愛の巣をもがきもがいて城になる
ざれごとに始めた趣味に泣いている
あなたへのパントマイムが座を沸かす　鳥取市　坂本とも湖

頑固だねバレる嘘でもつき通す
老いる私深くなるシワ防げない
イスラムよ君のおかげで世が乱れ
海賊船カリブの海は泥沼だ　鳥取市　高原かおる

失敗の肝に銘じて笑わせる
楽隠居しゃべって飲んで食べている
隠居部屋在った筈だに物置に
逆ギレの輪ゴム思わぬ方へ飛ぶ　鳥取市　谷口回春子

空手形いつも切ってる妻の前
爺婆におもちゃをせがむ孫の知恵
役不足プライドだけは上をゆく
木犀が匂い土産にやってくる　鳥取市　津村律子

三教授ノーベル物理賞に湧く
二歳児の強いステップ負けとれん
人の目は漫才らしいどじ夫婦
鈴生りも余程渋いな鳥も来ぬ　鳥取市　山下凱柳

命令口調あっちこっちと妻のナビ
雲つかむような話に騙される
過疎の村にも自販機が置いてある
長生きの秘訣笑いと教えられ　倉吉市　田中紀美恵

爪の垢煎じて飲めと言われても
父母の汗涙煎じて飲んだ子立派
柿一つ残して来年豊作願う
繕い物今の子知らぬ継ぎ接ぎで

倉吉市　堀　かずこ

またひとつ年をひろって生きていく
満月が秋の夜なべを照らしてる
道端のすすきゆれてる散歩道
夕暮れにどこへ帰るか赤とんぼ

境港市　中井虎尾

年輪のしわと我が手をじっと見る
流通のレギュラー遠い二千円
御嶽山親しく言えぬ山となり
蝉しぐれあれはこの世と別れ唄

米子市　池岡たけし

結ぶ手が少し汗ばみ気もそぞろ
老いたけど愉快な日々が袖を引く
秋晴れに身体丸ごと息を吸う
待ち遠し秋の吟行晴れ祈る

米子市　小野鶴子

スイッチ切り聴いてあげましょくつわ虫
秋の雲幾何学模様わざの技
衣替え増えるケース持て余す
義理買いに断る理由に嘘も出る

米子市　加藤正二

古時計ねじ巻いただけ時を打つ
独り言言って気合をかけている
一病を大事に抱え夢を見る
老い独り何も忘れて夢を見る

米子市　田村周子

老いの身は元気そうでも脆いもの
慣れないが仏のぼたもち作ってる
青春を飾った恋は脆かった
退屈は不善のもとと母が言う

米子市　見山温子

収穫の汗も吹き飛ぶ穂の重み
できそうでやって見たけど出来なんだ
黄金の穂波に踊る赤トンボ
老介護海より深い恩返す

鳥取県　田口清帆

吹けばとぶ一円玉もわたくしも
逸ノ城殊勲敢闘おめでとう
マイペースどこまでグータラなんだろう
便りとだえた友の笑顔がふとよぎる

鳥取県　橋谷静江

秋の日は人の気持を落ちつかせ
食欲の秋へ献立忙しい
道の駅目あてに旅の案を立て
古里の思い出今も忘れない

松江市　相見柳歩

制服を脱いで偏差値グッと上げ
胸めがけキャッチボールの思いやり
潤して何もなかったような顔
十字路で恋へ曲がったばっかりに

力ある声で良かった秋の虫
一呼吸忘れた物を思い出す
食欲もやる気もあるが物忘れ
久々に日光浴びた散歩道

松江市　山根邦代

ハッピーな知らせも届き有頂天
信念を持って取り組む夢ひとつ
マイウェイオンリーワンのまわり道
形にして原爆のこと後世に

出雲市　黒目英男

一寝して絶好タイム寝待月
酒呑まぬ多病息災すぐ九十路
爺の小遣い程でよい株配当金
メダル手に美しきかないい笑顔

安来市　原煩悩児

凸凹の道も均して往く夫婦
群植をされると映える秋桜
良い事がこの先もある曲り角
未来への鍵を握っている絆

岡山市　永見心咲

千の風母は大空かけめぐる
桃好きの父へ土産のコンポート
お父ちゃんほっこりしてね布団干す
四十九日来るとほんとの別れの日

岡山市　前田恵美子

闇になる不安こころの眼をひらく
起きがけの豆球見えて今日も無事
命だけ祈ったオペにもう欲が
目も耳も夫婦でかばい半人前

岡山県　池田たか子

許されて許してそして認知症
口減らしだった昔のお嫁入り
竹原がマッサンブーム乗りのりに
白壁とコスモスコラボ秋映す

竹原市　土井輝恵

朝ドラでずいぶん元気もらえそう
月食は不思議感じる大宇宙
マヒの手を右手でさすり今日を生き
入院が決まり取り出すハーモニカ

竹原市　六田半徳

独り旅影も一緒についてくる
恋隠すもっともらしい顔をして
死は潜みいつでも出番待っている
御嶽の爆発なぜか予知できず

防府市　坂本加代

断捨離をしました過去も捨てました
宴たけなわメールが入り興が醒め
運命の根っ子にあった赤い糸
妻の願い退職したら別れましょう

山口県　増田めだか

懲りぬのがステキと言われまた懲りず　高知市　三谷　待太郎
カブトガニ沈んだ平家とこっつりこ
凧なのかヤマタノオロチか偏西風
戦争と愛を抱き込む青い地球

老いも良し亡母の気持が判る今　北九州市　小松　紀子
子の様にハグしてくれる孫二人
決して他人ごとと思えぬ認知症
親の出来言わずして子を悪く言う

ロシア民謡わが青春の子守歌　福岡県　本田　さくら
ゴキブリよ来世は違う生受けよ
一年生色いろ傘が自己主張
諸先輩の句を読む外は雨模様

筆順は違うが同じ文字を書き　唐津市　北村　松風
投函をしてから誤字を思い出す
日の丸は家にはないの曾孫きく
碁会所に一日坐る羅漢さま

世の中はうまくゆかないことばかり　佐賀市　清水園　實
何事もせかずあせらずのんびりと
男なら泣き言いうなあきらめて
ひとり旅みやげはやはり孫の物

独り居が多い老女のクラス会　唐津市　吉冨　節子
駅の花流派によって美の変化
新米に勤労奉仕懐かしい
柳友の励まし私の特効薬

毎日が呆け防止にと誘われる　佐賀県　門井　孝
呆け防止スーパー行って暗算を
天高し何からしょうか趣味多し
天高しコスモス笑う散歩道

周りは外人ここはどこ大阪　熊本市　杉野　羅天
大都会私もアリのようかしら
喰いだおれどこへ行かはりましたんや
台風は気まぐれ予想ずれている

通帳はまだゆずらない意地っ張り　山鹿市　前田　幸子
食卓にたっぷり並ぶ娘の情け
長電話子供にだけは惜しみなく
赤トンボ窓越し我を慰める

予知出来ずあとで能書き専門家　山鹿市　三谷　直男
飽きもせず寄ってたかってバカ番組
狂ってる日本の世相なにもかも
もう飽きたこの日本にも地球にも

山鹿市　米加田　恭代

拾う神多くうれしい手が足りぬ
がむしゃらは母親譲り姉もそう
肥料などいらない自然農法で
台風の風雨に耐えて隠居部屋

沖縄市　森山　文切

多忙でも余所見するくらいは出来る
微笑みに塗れ不安になって行く
身動ぎもしないで首を言い渡す
粛粛と頭痛の種を蒔いている

シドニー　坂上　のり子

ノーベル賞取った彼等の低姿勢
未来地図その頃私もういない
忘れな草咲き続けてはアピールし
台風の被害ないかと問う電話

メルボルン　藤原　ポン吉

もう一杯飲める喜び悔やむ朝
翌日に出来もしないが返事よし
宝くじ翼広がり夢が飛ぶ
コーヒーの香りストレス癒える午後

札幌市　斉藤　宏子

昼下がりコーヒーの湯気老い独り
セピア色家族写真ははつらつと
ずっしりとトマトの命土の味
クラス会またの出会いを誓いつつ

（小田幸子さん、高野不二さん、脇田雅美さん、今西廣子さん、三谷直男さんの句は42頁にあります）

札幌市　富永　恵子

貴船菊灯油の値段連れてくる
襤褸装い力の限り義捐金
歌碑一基草の中でも輝ける
近道の石段登るまだ気力

弘前市　高森　一呑

津軽には師走に神の使い来る
おつかれさんまずはビールで句読点
日没にゆっくり送り人がくる
甘皮を剥いだ女の薄化粧

弘前市　吉川　ひとし

冬の使者一気に加速する津軽
休火山妻のマグマが噴火する
ライバルに明かす事ない非常口
一筆せん今朝の笑顔も添えてある

東京都　川本　真理子

飛び立った親の知らない戸を開けて
羽音なく巣立っていたと気付かされ
花は地味なるほど草と書いてある
旅の宿 入日を臨む部屋をとる

東京都　高岡　弥生

お彼岸を過ぎても暑さ負けてない
何事も動じなくなる悲しさよ
開店日パンの匂いで行列に
感動を沢山もらい若返り

新川柳鑑賞 (34)

麻生　路郎

先生に云うたろ先生喧嘩中

（阿　茶）

「先生に言うたろ」

「言うのなら言うて見い」

というのが、学童の喧嘩の売り言葉に買い言葉であるが、「先生に言うたろ」と言ったところが、その先生は、そんな学童に耳を貸すどころか、先生自身、喧嘩の真ッ最中だというのである。学童そこのけでストをしている先生達へ投げられた実に痛烈な皮肉の句である。

子供好き田舎教師で世を終り

（万　古）

一方には坐り込みで騒ぐ先生もいるが、他方にはこんな教師もいるのである。子供好きが自分の出世などは忘れ、伸びゆく学童のために田舎教師として埋れたのを詠んだもので、軽い穿ちの句である。

鉢巻をすれば先生もおっさんや

（蛙眠子）

先生と言えば一般に曽ては尊敬されていた。しかし、民主主義時代自由主義時代になって、先生は労働者になり下がった。それでも、まだ筋肉労働者との間に一線を劃して多少の尊敬を保持していた。ところが勤評問題から多数の先生が一般の労働者と同じように、鉢巻をしてデモるようになってから、先生に対する尊敬の念が全く後を断ちそうである。先生も鉢巻をしたら、ただのおっさんだとは皮肉な観方である。

デモってからの先生が安く見え

（六　花）

勤評問題以来、先生の坐り込みやデモ行進などが、ズンズン明るみへ出るようになり、従来の先生に対するイメージが薄らいで、所謂労働者と何等変わらないという印象をうけるようになったのである。

鉢巻をしてデモッている姿の先生に教育者としての敬意が払えないとすれば安っぽく見えるのが当然であろう。

先生よ先ず鉢巻をとり給え所

（文　庫）

先生も労働者であると言って労働組合を作って、いろんな要求をすることになり、ねじ鉢巻で坐り込みまでやるようになったので、斯うした皮肉な句が生れたのである。

こんな先生に教育されるのでは、学童たちも、ゆくゆくは労働運動のベテランになることであろう。この句「先ず」の措字が非常によく利いている。

先生先生と情報たえまなし

（奇　童）

この句を読むと小学校の先生と、学童との親密なありさまが眼に見えるようである。

「Bさんが、こんなことをされました」

「A君が、ボクの鉛筆を」

とか、なんとか、次ぎ次ぎに情報をもたらして来るのである。それは先生にとって、まことに煩しいことに違いないが、煩しいとも思わずに一々面倒を見てやるところに、小学校の先生でなければ味わえない親しさもあるのである。この句は内包的に多くの味を持っている。

恩師機嫌わしも家内が苦手じゃて

（伊知呂）

恩師のために一席を設ける。いける口とて、とても迎も御きげんである。「お前は梯子か、そうか、家内がうるさがるって、そうかそうか、ワシも家内は苦手じゃて……」男にはこんなうれしい世界があることを世の女房どもは知っておくべきであろう。情景なり、人物なりが話し言葉よって躍動しているではないか。

一本立出来ると弟子はすぐ思い

（梅　志）

この句では何の弟子か判らないが、弟子というものは一寸出来るようになるとすぐに天狗になるものだ。その点まことに可愛いものである。しかし、さて一本立になって見ると、それほどでもないことをしみじみと感じるものである。この「すぐ思い」の下五がよく利いている。

西尾　栞句抄

（定本『西尾栞句集』平成八年発刊）

いささかの旅愁となった通り雨
嫁と呼ぶ垣あり若く美しく

九月七日吉川英治忌

笑い合うは貧しさでなし雉子郎忌
舌出した嘘げんこつの真似ですみ
何事もなかった顔で二階下り
今日という今日女という名が哀し
感謝していますと妻の口答え
やわ肌の血潮を聴診器にきかれ
雛の目の初恋人に似て楽し
活動家とも出しゃばりとも言われ

隠岐吟行

逝く春や遠流の島の駅の鈴
御所二つ今も悲劇の帝たり
この家並ま昼を通るもと廓
正弁丹吾父娘と見えぬ箸を割り
ネクタイだけ黒にしてゆく小さい義理
元旦の一歩国旗を掲げに出る
長生きも芸のうちなり秋叙勲
雰囲気を和らぐ蜜柑くばられる
レイかけて夢のハワイよ詩の島よ
屋根に落ち屋根より落ちし猫の恋
十二神将ハッタとにらむ瞳と出遭い

英語 de Senryu ㊱

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim HORNE

民主主義いつまでも金のない同士

democracy
and I
both are no money

一行詩これが私の墓だとは

one-line poem…
my grave
this is

～リバーウィローのため息～ (川柳の国際化 10: 今川乱魚著　速川美竹訳『ユーモアは世界を変える－英訳・今川乱魚のユーモア川柳』(新葉館出版 2011)

この本には、*Humor Changes the World —The World of Imagawa Rangyo's Senryu*—と英語のタイトルも付いている。さらに本の帯に「乱魚のユーモア川柳」「人生をユーモアで切り開く」「五七五のリズムを英訳川柳で楽しむ」「HAIKU より熱い、SENRYU を！」「川柳の楽しさとパワーを世界の人に！」「周囲を笑いの渦に巻き込み、心の平和をもたらし、自分自身をも元気づける！読めば元気になる！」「愛と勇気と知性の香るユーモア川柳厳選 128 句」と記されているように、今川乱魚氏の川柳はユーモアが主点に置かれています。乱魚氏（1935 — 2010）は、東京生まれ。本名充。大阪で川柳をはじめ、999 番傘川柳会会長、東葛川柳会最高顧問、東京みなと番傘川柳会会長、全日本川柳会会長を歴任し、第 3 回日本現代詩歌文学館館長賞、第 9 回川柳・大雄賞、第 40 回川柳文化賞受賞など、見事な経歴が輝きます。立正大学名誉教授で、英語の名手である速川美竹（和男）氏の英訳による本書は、乱魚氏の川柳と速川氏の英訳が読者をユーモアの世界に引き込みます。それでは、いくつか紹介しましょう。3 句目の川柳では、英訳が複数形の ***kisses*** となっています。その句意を思うと顔がほころびます。

天国に近い髪から抜けていく

The nearer to Heaven/The more quickly/The hair falls out.

いちじくの葉っぱの位置は動かせぬ

The position/Of the fig leaf/Is hard to change.

口づけのあと年収に触れてくる

A girlfriend is apt/To bring up his salary/Even after kisses.

誹風柳多留一二篇研究 18

伊吹和男・山田昭夫
石川道子・小栗清吾
細井龍夫
清　博美

134　**又妻が久しいものと母いわれ**

伊吹　情況のはっきりしない句だが、あえて限定すると、また姑が嫁をいじめて追出してしまい、何回もこのようなことでは、息子に嫁の来手がしばらくないだろうと、まわりの者がその母親に言っている。

去り状の内三くだりハばゝのさく　宝13礼1

小栗　久しい物は、古くさい。相変わらずだ。お株が始まった。例によって例のごとし。聞き飽きた（「江」）。

「また妻が『久しい物』と言っている」と母が（息子に）言われる、ということか。句意定かならず。

細井　右の例句から「灸」を「久しいもの」と読んでいることから「また妻が灸を据えている」と息子から母が言われている。となりそうですが……。

清　分からず。

135　**よくうれるうしろに手代壱人リ立**

伊吹　呉服見世の売り場手代。美男で勧め上手で売上げ成績のいい手代には、そのうしろに補佐役の手代が一人立っている。

陣のい、手代もやうをたんとうり　一九22
呉服屋も能クはやるのハ二人リつけ　五41

清　賛。

136　**つのつ口して枝がきのたねを出し**

山田　角っ口は「角口に同じ」で、「口をとがらせること。また、その顔つき」（「日国」）。枝柿は「②つるし柿」（「広辞苑」）。

そのままの実景句。口をとがさせて吊し柿の種を吐き出す。

ゑだかきのたねを出すのに目がすハり　一五20

清　賛。

137　**東北へだはゝのまじる風呂の内**

山田　東北は謡曲の『東北（とうぼく）』。それを風呂の中で謡っていると、「だはは」が混じるというのだが、この「だはは」が分からない。「合いの手」や「熱い湯でのうめき声」などの説があるが、風呂の中での謡曲だから、そのどちらでもあり得るであろう。なお、『東北』は、正月三日の江戸城での謡初式でも『老松』や『高砂』と共に必ず演じられる、初春にふさわしい曲だから、正月の初風呂あたりの情景かも知れない。

てん〳〵にしやうるりあらふ風呂の中　拾九12

小栗　よくわからぬが、いい期限で「くダハハ……」などと無意味なはやし（「〜とくらァ」のたぐい）を入れるのではないか。

念仏もだはゝか付クとおもしろい　宝13仁5

伊吹　小栗氏説と類句に賛。親戚の法事に行くと、御経の合間や息継ぎにやたらとダハやダハーハーを入れる僧侶の主導の法会であります。

清「だはは」の用例が欲しい。

138　**座頭さん又嶋かへとわたしもり**

山田　江の島の弁財天は盲人の信仰が厚く、江戸から検校になれるよう祈願に度々訪れる座頭が多かった。「座頭さん又島かえ」と渡し守が声を掛けた。六郷の渡しであろう。

なお、晴れて検校になれた座頭は、江の島の弁財天にお礼参りをするのが習わしであった。

江の嶋ハつつついてさへ行ク所　五10

清　賛。

139　**からつゞらせなあにしよわせ引はずし**

山田　空葛籠を田舎の兄に背負わせて奉公先を辞する下女。三月四日の出替わりに重年出来なかったのであろう。真面目な下女なら、

だん〳〵と葛籠の孕ムかたひ下女　七二38

なのに、この下女は働きが無いようで、

あはれ今年も明つゞら下女下り　九二36

なお「引外し」の「引」は強調語で、外すは「⑤その場から離れる」（日国）意。

小栗　引外す（ひっぱずす）は、①ひっぱってはずす。②身をひいて避ける。そらす（「日国」）。

「引外す」の語釈から見ると、田舎へ帰りたくない下女が、ダミーのつづらを兄に背負わせて自分はトンズラするというような場面が想像されが……。しかし、「九二36」の句を見るとやはり礎説か。

清　同。

140　**むだ口へ子の小便をふりむける**

山田　子供に小便をさせている時に、無駄口を叩いてからかっているのが居たので、小便の向きをそちらの方に向けて、かける真似をする。乳母あたりであろう。

またくらを引ッさき御うばしいをやり　天六和3

清　賛。

141　**ばくろ丁二かいへずつと文づかい**

山田　日本橋馬喰町は、旅籠屋が軒を連ねていた。観光客や商売人も多かったが、公事つまり訴訟事で滞在する者の宿泊所でもあった。

馬喰町諸国の利非の寄る所　三八38

一般に裁判事は長期間にわたる場合が多いのは、今も同じだが、

麦めしのあぢもわすれた長い公事　四38

というような事も珍しくなかった。だからその間、遊里に遊びに行くような不届き者も出る。

い、かげんどらにしてやる馬喰丁　安八松3

その客へ、遊女からの文を持った文使いがやって来て、直接二階の客室に持って来た。粗末な木賃宿だから、案内を乞うまでもないのだ。

小栗　賛。文使いが来るほど遊んだ奴もいるのですか。びっくり。女房や親父など気兼ねする人がいないから「ずっと」来るのでしょうね。

細井　礎賛。長逗留するうちに、ついつい……。

清　賛。金さえあれば、田舎者でも持てるとみえる。それにしても、公事に来て、その合間に遊ぶなんて、見上げた御仁だ。こういう人物、個人的には大好きですね。

句集紹介

『再会 Ⅱ』小島蘭幸著

新家完司

今年10月4日に開催された「第20回川柳塔まつり　川柳雑誌・川柳塔90周年記念川柳大会」の出席者全員に記念品として謹呈されたのが本句集。

美しい朱色のクロス張り表紙に金箔文字が鮮やかである。最初の頁に著者近影があり、蘭幸さんの穏やかなお顔。次頁には「大好きな人と芒が原にいる」の染筆。

序文は橘高薫風師の「川柳塔の旗手小島蘭幸」。だが、これは昭和63年の「川柳木馬」第38号に掲載されたものを出版元の許可を得て転載したもの。

この中で薫風師は「蘭幸作品の特徴の一つは、自分を含めて、家族を詠んだ句に佳句が多いことである」と述べている。

この鑑賞文に向かうために本句集を精読したが、印象はまったく同じであった。

その家族については「父」「母」「妻」「娘」「孫」そして「自分」を対象にしている。それぞれの句は項目ごとに分けられているのではなく渾然となっているのだが、鑑賞の便宜上、全頁からピックアップして次のようにまとめ直した。

不器用な父不器用な僕がいる
大きな海だ大きな父のふところだ
父の銀よりもやさしい銀になる
亡父の靴のまわりで虫が鳴いている
父に似た蟷螂がいる父の墓

まず「父」を詠んだ作品。それぞれの句から、父上も寡黙で大きな男だったと推定できる。昔の父は概ねそのようなもので、座っているだけで存在感があった。また、「不器用な父」の「不器用」は、もちろん手先のことではなく、世間を器用に渡れないという意味。世間ずれしていない純粋さや朴訥さは「不器用な僕がいる」によって、父譲りであることが分かる。また、その父は「やさしい銀」であった。そして、自分はそれ以上の「やさしい銀」になりたいという。これもまた、現在の蘭幸さんを拝見していると納得できる。

おふくろは元気だフライパンの艶
おふくろの横顔ばかりある祭り
おふくろも観音様もいい耳だ
いい医師に出会うおふくろさんの運
おふくろの欲をよろこぶことにする

母上の元気さと「フライパンの艶」の取り合わせが絶妙。家庭の中心は台所であり、そしてまた、その中心はさまざまな調理器具。包丁や鍋や食器やフライパンの手入れが行き届いているかどうかは、主婦の元気度のバロメーターである。

観音様のような福耳を持った母上は、いい医者とも巡り合うことができた。また、高齢者の「欲」は嫌われがちだが、欲こそ生命力であることを認知した上での「よろこぶことにする」であろう。

自転車の妻と明るくすれ違う
一月一日の靴を磨いている妻よ
布団干す妻のたくましさを見たか
妻の実家で妻を小さな声で呼ぶ
犬の歯を磨く厳しい妻である

蘭幸さんの奥様に初めてお目にかかったのは四半世紀も前のことだが、明るい笑顔も若々しい仕草もまったく変わっておられない。自転車ですれ違ったときの様子が目の前に浮かんでくる。だが、犬の歯を磨くときは、「ジッとしていなさい！」と容赦しない。それは、愛犬のためを思ってのこと。靴を磨くのも布団を干すのも、すべて家族のため。明るく朗らかだけでは主婦業は務まらないのだ。

長女一歳叩けば叩き返すなり
校内放送ときどき次女の声がする
春ふわり長女の靴と次女の靴
ジャングルジムの一番上にいる姫だ
かぐや姫嫁いで男ばかり生む

お嬢さん二人の誕生から成長までが衒いなく述べられている。そのときどきの様子が明確に伝わってくるのは具象の力。すなわち、「叩き返す」「校内放送」「靴」「ジャングルジム」「男ばかり」によって、背景が明確に分かり印象深くなっている。

水平線キリリと孫の名は航（わたる）
陽が昇る今産声は陽（はると）です
路郎忌に生まれた孫よ名は拓（ひろむ）
僕も孫もご先祖様の眉をもつ
正義の味方アンパンマンを孫と見る

その「男ばかり」の孫たちの名前もまた具体的に「航」「陽」「拓」と述べて、きっちり一句にまとめているのはさすが。また、自分と似ているとは言わず、「僕も孫もご先祖様の眉…」によって、孫自慢になることを避けているのもベテランの技。

沖の灯のひとつは師だと思いたし
路郎師の写真と対座してひとり
師を越えることなど出来ず弔詞読む
笹に願いを句碑にお酒を路郎の忌
師の句碑は師のかたちして風といる

麻生路郎の生誕地である尾道市は、小島蘭幸宅の竹原市から40㎞ほど。13年前の句碑除幕式と記念大会には私も出席させていただいたが、蘭幸さんは折にふれて訪ねておられる。それは麻生路郎師が川柳塔社の始祖であるという儀礼的なものではなく、こころから師を尊敬し慕っていることに他ならない。その真摯な想いが作品の端々に現れている。

赤とんぼみな恋人がいて飛ぶよ
予言だと思う蟋蟀鳴いている
天道虫も私も持っている宇宙
愛犬チョコ狼に似た影をもつ
知恵の輪を猿もカラスもすぐに解く

蘭幸さんの優しい目は、家族や師や仲間のみならず生きものたちにも注がれている。が、客観的な描写ではなく「恋人がいる」「予言だ」「宇宙を持つ」「狼に似た」「知恵の輪を解く」と、哲学的な想いを寄せているのが川柳の川柳たるところ。

ふところに数珠ありまっすぐに歩く
退職しました一年生になりました
腹筋の弱さがもろに出る嘘

右3句はご自分を対象としたもの。佳句満載だが紙数が尽きたので割愛。中でもイチオシは次の一句。広大な宇宙と矮小な人間の対比が見事！

青空があるのに門が閉めてある

句集鑑賞

『再会Ⅱ』を読む

弘津　秋の子

小島蘭幸さんが川柳塔主幹に就任されて四年になる。今年は川柳雑誌・川柳塔九十周年記念川柳大会の年である。大会のパンフレットをいただき「呈・小島蘭幸川柳句集」の一行に目が釘付けになる。

中学三年生の時から川柳を始めた蘭幸さんは、学生句集『竹の子』（昭和四十二年発行）、句集『再会』（昭和五十二年発行）と二冊の句集を出されているが私はどちらも持っていない。大会日が待ち遠しいことであった。

私が小島蘭幸さんと初めてお会いしたのは、平成十四年の春、自宅全焼で急死した父・石原伯峯の通夜の日である。呆然と座り込んだままの蘭幸さんと挨拶は交わしたが会話の記憶はない。

一周忌の平成十五年、竹原川柳会の方々が父の川柳たけはら誌の鑑賞を一冊の本にしてくださった。その時「発刊によせて」の一文を頼まれ、更に平成十八年竹原川柳会創立五十周年記念川柳大会の選者を亡父に代わって私が受けることになった。また平成二十年から川柳たけはら誌の竹の塔鑑賞を隔月で引き受け、一年のつもりがアッという間に今日に至っている。

大会一週間前の九月二十七日、御嶽山が噴火した日に蘭幸さんから電話をいただいた。いつものように瀬戸の海のような穏やかな声である。「句集の鑑賞を秋の子さんにお願いしたいのです」と言われ「何行くらいですか？締切は？」と問うと「詳しい事は木本朱夏さんに聞いてください」と電話が切れた。

句集は、読み手に記憶してもらえる一句があればいいのだと思っている。読み手は、作者の渾身の一句を見つける努力がいると思っている。たけはら誌の蘭幸句を数年読み続けており、蘭幸句を理解していると思い込んでいた。

翌日、真っ赤な表紙の句集『再会Ⅱ』が届く。句集を一読して頭が真っ白になる。

著者近影の次のページに蘭幸さん直筆の一句が掲載されている。

大好きな人と芒が原にいる

この句が読み手に一番伝えたい一句であろう。ところが、私には「芒が原」にいる蘭幸さんが見えない。震えながらページをめくってゆきラストから二ページ前に「次女千枝結婚」という前書の句を読み唖然とする。千枝さんは、竹原川柳会の会員で、たけはら誌の近詠竹の塔に句を投句されているが、最近欠句が続いており、どうされたのかなと思っていたところである。結婚されていたとは思いもしなかった。

直ぐに蘭幸さんに「すみません。鑑賞は無理です」と伝えたが、寡黙な男は「大丈夫です」と言うだけである。

句集を読み返す日々が始まる。句集の中に芒が原の句がもう一句あった。

芒が原は銀色亡父を立たせてみる

三年前の秋に歩いた箱根仙石原のすすきの原の道が蘇る。秋の風に頭を揺らす日本の芒。その様は蒸し暑い瀬戸の夕暮れ時に、祖母が煽いで風をおくってくれたうちわを思い出させたのだった。

芒が原は愛しい故人の住む所なのだ。そう思って句集を読み直せば、麻生路郎師、有原拓先生、山内静水会長、西尾栞先生、寺尾俊平先生、高杉鬼遊先生、石原伯峯先生、橘高薫風先生、先輩の林荒介さん、沖浜正宏さん、大森喜久恵さんたちへの悼句が散りばめられている。

悼　東野大八先生

群像や私も書いて欲しかった

悼　小出智子さん

美しい湖があるあなたがいる

若くして竹原川柳会の会長となった蘭幸さんの川柳の道は孤独であったであろう。最初に川柳の手ほどきをしてもらった先生に匹敵する先生はいない。最初の師（故）静水師が情熱の赤の人とするならば、亡父・石原伯峯は白。見守る人である。蘭幸さんは、竹原から一人各地の川柳大会に出かけ、先輩の句に耳を傾け先輩の言葉を噛みしめる。句碑に詣で自問自答して帰る。古書店を巡り埋もれた句集を手に取り、いにしえの声を聞く。自分で学んでゆくしか道はなかったと思う。川柳の作句の場所が芒が原なのかもしれぬ。自分を受け入れてくれる大好きな人たちがいる所。孤独であるが一人ぼっちではない。芒が原がストンと私の胸に納まった。

読み手のもう一つの楽しみは、全句の中から、お気に入りの一句を取りだすことである。

妻が見てると卵がうまく割れません

この句は平成二十二年川柳塔誌十一月号に掲載された句である。初めて目にした時からグイっと心を掴まれる句であった。

蘭幸さんの奥さまの小島尚美さんと初めてお会いしたのも亡父の急逝した時である。クッキーハウス若竹（社会福祉法人）の仕事を休み駆けつけてくださった。

着の身着のまま焼け出された義母の足のサイズが尚美さんと同じサイズとわかった時、尚美さんは、履いていたスニーカーを脱いで差し出された。持っていたパッチワークの手縫いのバッグから中身をとりだし「使ってください」と差し出された。とっても自然に差し出された。

どんな人も敵わない。卵がうまく割れなくていいのです。

『再会』は、尚美さんとの結婚が決まってから編まれた句集だと聞いている。今回『再会Ⅱ』という句集名にこだわった蘭幸さんの思いに頷くものがある。

つい先日届いた川柳たけはら十月号の長女の史子さんの句を紹介したい。

父の句に我が家の歴史と未来がある

新潟　史子

家族の理解、柳友の支援に支えられ、その声援に応えるべく東奔西走の小島蘭幸さん。

川柳歴五十年の川柳作家・小島蘭幸の根っ子は、常に「芒が原」にある。それをしかと受け止めました。

蟋蟀が「できます」と鳴く夜に

秋の子

江戸を楽しむ 24

いずれ終わりは来る

小栗清吾

江戸川柳は、森羅万象何でも題材にします。人の死も例外ではありません。しかしそれを単に悲しがるのではなくて、一ひねりして「なるほど、なるほど」と思わせる句に仕立てるのが江戸川柳です。

すまぬこと母の湯灌を寺でする　二一19

人が亡くなると、身体を洗う「湯灌」をしてから棺に納めますが、この句の息子は、母の湯灌をお寺でしたのは申し訳ないことだと言っているのです。なぜでしょうか。

江戸では、地主・家持ち以外の人は、自宅で湯灌をすることを禁じられていました。この句の息子は、本来なら自宅で湯灌をしてあげられる身分だったのです。ところが、道楽が過ぎて、家屋敷を手放すことになってしまった。そのためにお寺で湯灌をせざるを得ず、それが「すまぬこと」だというわけです。

患(わずら)った沙汰は聞かぬと裃着　明五義4

葬式には裃を着用するのが礼儀です。葬式の通知を受けて、「さて、病気だったという話は聞いていなかったが、どうしたんだろう。事故でもあったのか」などと言いながら、裃を着て準備している様子です。

若死にと聞いて悔やみに念を入れ　六24

若い人が亡くなったときには、念を入れてお悔やみを言います。人情の機微でしょう。

お年寄りの時に、「お年に不足は無いとは言え」などと言うことがありますが、

無礼な口上御年に不足なし　傍二31

という意見もあります。確かにそうですね。

葬式には、故人を悼む人ばかりではなく、義理で不承不承来る人もいます。

遠い寺亡者をそしりそしり来る　二二16

「まったく、こんな遠いお寺で葬式やられちゃかなわねえな。一日がかりだぜ」などとぶつぶつ言いながらやって来るのです。

そういう男の中には、葬式が終わったら吉原へ繰り込もうなどと、罰当たりなことを考える輩もいます。

さあ事だ寺は箕輪で七つ時　五六26

箕輪（三ノ輪）は、現在でもお寺の多いところですが、ここから吉原は目と鼻の先。七つ時は夕方の四時頃ですから、吉原へ繰り込むには絶好の条件が揃っている葬式です。「さあえらいことだ、どうしよう」というわけですが、むろん結論は決まっています。

二丁ほど続いたが後家自慢なり　六37

亡くなった夫の葬儀の列が二丁（約二〇〇メートル）も続いたのを、後家が自慢しているというのです。皮肉っぽい句ですが、気持ちはわからないでもありません。

葬儀が終われば、形見分けです。

泣き泣きもよい方をとる形見分け　一七44

解説は不要でしょう。薄情なのではありません。人間はそんなものなのです。

いずれにしても、死は必ず訪れます。

葬礼を見て初鰹値ができる　八35

初鰹の値段があまりに高いので買うのを迷っていると、向こうを葬列が通る。「そうだ、生きている内に楽しまなくっちゃ」と決心して、買うことにしたのです。人生、この心構えでなくてはなりません。

※

この連載の始めに「誕生から墓場まで」の人の一生を縦糸にして書かせていただくことをお約束しましたが、今回で「墓場」に到達いたしましたので、終了とさせていただきます。二年間、誠に有り難うございました。

民族の詩歌 (30)

―石上露子

三好専平

『明星』の歌人の一人として取り上げてみたい。近代日本夜明けの歌として。

かつては、京都から高野山への参詣道の一つであった古市には、藤井寺の道明寺から誉田八幡を経て、竹ノ内街道とクロスした、狭くくねくねした道が通る。さらに、富田林の寺内町を抜け、河内長野、紀見峠へとつづく。そして、高野山の石道へ。苔むした険しい道、二十キロ。古木鬱蒼とした道。

河内平野はまれにみる動乱の地である。戦国武将たちが命を削った。一向一揆も絶えることはなかった。荒地を丹念に開墾し、木綿、無花果、梅、葡萄など。

浄土真宗の興正寺を中心とする富田林の寺内町は商工の町である。整然とした街並みは見事で、お土居ものこり、自治組織も発達していた。紀伊、奈良、中河内、海から、石川からと物資の集散地であった。

石上露子は、明治十五年、本名杉山タカとして、富田林一の造り酒屋の杉山家に生まれた。二二歳で明星を知るが、翌年日露戦争が始まった。明星創刊四年目で、旺盛な執筆活動が続く。与謝野晶子が「君死にたまふことなかれ」と歌ったのはこの時である。大町桂月は、この詩を「あまりにも大胆」と批判したが、晶子は「詩は真実を歌うもの」と一蹴した。

「平民新聞」へ投稿したのがきっかけで、夫との間が気まずくなり、二七歳で執筆活動を断念する。長谷川時雨が「読売新聞」に「明治美人伝」を書くほどの美人であり、才女であった。五十歳で執筆活動を再開し『冬柏』(寛・晶子)にかかわり主として短歌を発表した。六十四歳で夫没後、自らの病気や次男の自殺など恵まれているとはいえなかったが、七十九歳まで生きた。家永三郎は「明星派歌人と社会主義思想」(昭和三十年)で、彼女を紹介した。現在、富田林図書館に彼女に関する専門書がある。

代表的短歌

君が門をわれとおそれに追はれ来て姿さびしき野にまよふ日や

蝶ならば袂あげても撲(う)たむもの幸なら消えし恋の花夢

みいくさにこよひ誰が死ぬさびしみて髪吹く風の行方見まもる

多感な若き時代の、恋・孤独・絶望を歌った露子は老いてさびしい歌を詠む。

我がくるよ人のいづこと問はれには落ち葉の国と告げてやれかし

たまゆらに八とせは過ぎぬああ心常世(とこよ)の国をしのび泣きつつ

「落葉の国」という自伝がある、源氏の文体を模倣したような。なお、「小板橋」という恋の詩が一篇のみのこる。

愛染帖

新家　完司　選

（投句　２６６名）

加齢臭どんな臭いか言ってみろ
（評）誰が言い出したのか知らないが、高齢者を揶揄したような言葉。単なる体臭ではないのか。体臭なら若者のほうが断然臭い。
松江市　中筋　弘充

子の自慢させて下さい親だから
（評）子自慢や孫自慢は聞き苦しいと言われるが、親が自慢してやらなければ誰がしてくれるのか？　本当にいい子なんだから。
河内長野市　谷　久美子

高いとこ上がると命惜しくなる
（評）そうか、高所へ上がるとビビッてしまうのは命が惜しくなるからか。理屈ではなく本能が「ヤバイ！」と脳に知らせているのだ。
明石市　糀谷　和郎

阿保なテレビ見ている私もっとアホ
（評）暇な人を対象に視聴率を稼ごうというアホ番組。ふと気がつくと自分も引き込まれている。「貴重な時間を無駄にした」と反省。
奈良市　加門　萌子

ほんとうのハグは親子の初対面
（評）日本でも広まってきたハグ（hug）。親が生まれたばかりの子を抱くのが原点だという。これからはそのような気分でしょう。
鳥取市　夏目　一粋

滑り台親と似た子が下りてくる
（評）下で待ち受けている親の所へ滑り降りてきた幼児。よく見ると親とそっくり。鋭い観察眼が生み出したヒトコマ漫画。
西脇市　七反田順子

脳梗塞なんてへっちゃらラリルレロ
（評）幸いにも大事に至らず目立った後遺症もなかった。この元気とユーモア精神には脱帽だが、今後とも油断せず充分に養生を！
岡山市　丹下　凱夫

枝豆と酒を供えるご命日
（評）ご命日がちょうど枝豆の旬なのだ。大好物だったほとけさんも「おお、忘れずにいてくれたか」と喜んでおられるだろう。
大阪市　津村志華子

阪神に勝ってほしいとテレビ見ず
（評）タイガースは「恥ずかしがり」なのか？いつもテレビをつけた途端に打たれたり逆転されたり。ニュースなら安心して観られる。
枚方市　松原　保

急速にからだの中に入る秋
（評）ああもう秋かと思わせるのは十月の中ごろ。ひんやりとした風が身体に沁み込み、こころも身体も秋にしてしまうのだ。
鳥取県　西谷　悦子

老人のかたちになっていく背中　三原市　鴨田　昭紀

怪我しないところで見てる片想い　三田市　今西　廣子

ストローの折れた処に溜まる愚痴　今治市　渡邊伊津志

おはようのようあたりからトップギア　海南市　小谷　小雪

敗者復活赤いリンゴを丸かじり　松江市　三島　淞丘

触れないで金魚の泡は疑問形　佐賀県　真島久美子

青空がレール元気な高齢者　長野県　丸山　健三

黒ぼくの大地へ育てトムソーヤ　鳥取県　斉尾くにこ

寝て起きて食べてまた寝て良い実家　大阪市　藤田　武人

未亡人の妹いちばん気前いい　橿原市　安土　理恵

犯罪の多発で都会的田舎　松江市　石橋　芳山

暴走に顔をしかめるマホメット　大阪市　古今堂蕉子

森に木をもどせと熊は里に出る　橋本市　石田　隆彦

藤井寺市　若松　雅枝
計算が好きでレシート溜めている

三田市　堀　正和
自転車を漕ぐために買うスニーカー

豊中市　松尾美智代
おいしいねそのひと言で栗を剥く

大阪市　坂　裕之
浅学を多忙の所為にしてないか

鳥取市　吉田孔美子
登校の切れ目を後期高齢者

鳥取市　岸本　宏章
ゆっくりがいいな落語も漫才も

弘前市　髙瀬　霜石
悪友と成人病はワンセット

岡山市　永見　心咲
糠漬けは出ないだろうな晩餐会

堺　市　奥　時雄
ピロリ菌不法侵入罪ですよ

高槻市　島田千鶴子
「惜しかった」カラの魚籠から常套句

三田市　上田ひとみ
お互いに言わぬ知り合う前の恋

高槻市　片山かずお
老人に馬鹿丁寧な教え方

貝塚市　吉道あかね
秋日和靴紐結び直します

和泉市　横山　捷也
あちこちで警報装置鳴る日本

香芝市　大内　朝子
ごくたまに夫に感謝しています

枚方市　丹後屋　肇
自尊心ずたずたになる美容院

鳥取市　前田　楓花
分かってはいてもゴメンは言いにくい

池田市　栗田　久子
ゆっくりと食べて満腹感にする

弘前市　吉川ひとし
老々介護眉間のシワが深くなる

松山市　神野きっこ
外用の顔はにこにこ空元気

大阪市　平井美智子
点滴がゆっくりいわし雲を追う

岡山県　田中　恵
茜空浄土が見えてくる時間

大阪市　笠嶋　恵美
雑念が多すぎ頭ゴチャゴチャだ

鳥取市　山下　凱柳
絵手紙に渋くおさめる秋の色

神戸市　能勢　利子
師を忍びトルコ桔梗を買ってくる

三田市　福田　好文
パスポートないが大阪まで来れた

倉吉市　山中　康子
古漬けの塩抜く水を取り替える

三田市　北野　哲男
低気圧今日は一日寝ていよう

堺　市　矢倉　五月
人として品格保つ金が要る

広島市　岸本　清
倫理など一気に崩す大ジョッキ

和歌山市　柏原　夕胡
突然に花を貰って狼狽える

河内長野市　坂上　淳司
地よ海よ風よ神さま仏さま

倉吉市　岡崎美知江
魂が遊びに行ったまま秋に

奈良市　辻内げんえい
全没でも再会うれし塔まつり

和歌山市　古久保和子
没続き折れる心にじっと耐え

大阪市　太田としお
スッピンのときに限って客が来る

ドアチャイム慌てて探すシャツズボン

スーパーを覗きたいけど金が要る

硬化した脳が個性を言いたがる

体操の着地にわたしまで力む

薬よりよく効く孫の笑い声

戦争へ烏合の衆となるヒト科

銭湯に生きていました浪花節

負けまいと張り切り過ぎて医者通い

子の帰省ふとん布団と騒ぐ妻

カロリー計算楽しく痩せたことはない

達人だなんぼ飲んでも乱れない

藤井寺市　太田扶美代
味噌汁の味の薄さも旅情なり

川西市　山口　不動
レシピ読みエプロンかける妻の留守

宝塚市　田中　章子
誰とでも仲良くなれて独りぼち

吹田市　太田　昭
シャッター街パチンコ屋だけ賑々し

和歌山市　土屋起世子
小春日の温さ程度の恋でした

奈良県　安福　和夫
足らぬ知性情熱燃やし埋めるのみ

鳥取市　西川　和子
気が置けぬ仲間にもある縦と横

大阪市　奥村　五月
口と耳悪いが爪は伸びている

長岡京市　山田　葉子
コーラス後のおしゃべりトーン高いまま

西宮市　片山　忠
過去ばかり語る男に成り下がる

三田市　久保田千代
薬のむコップに朝の光さす

河内長野市　梶原　弘光
扇風機今年も揉めた仕舞いどき

河内長野市　大島　友子
饒舌の夫はどこかキナ臭い

鳥取県　竹信　照彦
真っ暗になるまで釣ってボーズなり

弘前市　福士　慕情
寄り道をしないと帰る気がしない

藤井寺市　鈴木いさお
飲んできた晩もいつものように呑む

米子市　竹村紀の治
肝臓が退院の日を知りたがる

大阪市　栃尾　奏子
昭和史は父もお米も偉かった

唐津市　岩崎　實
盆栽の松も聞いてる入社式

奈良市　大久保眞澄
極楽行きまだ諦めたわけじゃない

豊中市　藤井　則彦
口裏を合わせ損ねてついくしゃみ

東かがわ市　川崎ひかり
だんだんとケチに徹する奇数月

枚方市　伊達　郁夫
特売の品ばかりある僕の膳

芦屋市　黒田　能子
当たらないから楽しみ続く宝くじ

大阪市　髙杉　力
池越えは古いボールに取り換える

鳥取市　永原　昌鼓
完食がすぐ現れる腰あたり

大阪市　伏見　雅明
別腹がいつの間にやら太鼓腹

弘前市　肥後和香子
嫁たちに手は打ってある死に化粧

西宮市　牧渕富喜子
避難準備　友の住んでる街が出る

堺市　村上　玄也
旧友の面影崩れゆく八十路

東大阪市　北村　賢子
行く所あって元気な古稀の坂

弘前市　岡本　花匠
妻の留守肉じゃが笑いはずむ酒

富田林市　中村　惠
外食で舌を鍛えるとは虚言

羽曳野市　吉村久仁雄
妻の尻に敷かれ悩みのない暮らし

八尾市　中岡　妙
おずおずと四十階のバイキング

堺市　羽田野洋介
カラオケもテンポの遅い曲選ぶ

三田市　上垣キヨミ
バスガイド帰路はお客を寝かしつけ

三田市　多田　雅尚
朝ドラを欠かさず見てはヨッコイショ

鳥取県　細田　裕花
目標があいまいだから足止まる

豊橋市　藤田　千休
気がつけば影も形もない若さ

大阪府　米澤　俶子
直角に曲がる台風　日本好き

大阪市　井丸　昌紀
待ちぼうけケータイぴくりともしない

小野市　藤原　泰宏
古稀が来る気持はやっと五十過ぎ

寝屋川市　籠島　恵子
後方支援それが私の現在地

高槻市　初代　正彦
最後まで読めと冊子に叱られる

大阪市　大川　桃花
寝不足は昼寝しすぎの副作用

鳥取市　岸本　孝子
小学生の団体さんは行儀いい

唐津市　山口　高明
蓄積の数値が怖い十年後

八尾市　村上ミツ子
もう当てに出来なくなった腹時計

篠山市　酒井　真由
ゆっくりと出されたものを平らげる

奈良県　渡辺　富子
上半身磨けば下半身ふとる

茨木市　藤井　正雄
たんぽ売る話仏壇閉めておく

大阪市　藤原千恵子
棚田路におらが自慢の案山子展

倉吉市　中村　毅
鳥取じゃ遠の昔にジゲおこし

貝塚市　石田ひろ子
大根の間引き菜嬉し一夜漬け

和歌山市　上田　紀子
寝たきりにならぬ散歩で骨を折る

奈良市　尾畑なを江
家計簿は暗算で済むそんなもの

大阪市　榎本日の出
家計簿はつけていませんケチである

香南市　桑名　孝雄
就活の終わった孫へ酒のコツ

和歌山市　福井　菜摘
友人に別れを言えぬ家族葬

鳥取市　田中　天翔
先祖さまお経は月に一度です

高槻市　左右田泰雄
二階から食べる時だけ下りて来る

高槻市　富田　保子
爪楊枝の要らぬ食事に老い二人

和歌山市　楠見　章子
新米とサンマお替り三杯目

松江市　相見　柳歩
いてくれるだけでうれしい好きなひと

防府市　坂本　加代
子のために自由なくした覚えなし

富田林市　中井　アキ
残された端切れ　昭和の地図だった

羽曳野市　永田　章司
社会面闘ぎ合ってる善と悪

鳥取県　石谷美恵子
痛いとこ突かれとぼける外はない

江南市　脇田　雅美
近所の目何より便り留守の家

大阪府　籾山　隆盛
ストレスを溶かすお酒と馬が合う

富田林市　山野　寿之
蝶番みんな緩める酒二合

高知市　小川てるみ
戦争反対異国で眠る父の骨

鳥取市　吉田　弘子
僕よりも三日長生きせよと言う

松山市　栗田　忠士
呆けてないちょっと忘れただけである

岡山市　藤成　操江
お馴染のポストまで行く一千歩

藤井寺市　田付　絹枝
豆腐屋の鐘が急かせる夕餉膳

沖縄市　森山　文切
予想だにせぬ鼻歌を口ずさむ

三田市　尾崎　一子
母元気生命線もまた伸びた

尼崎市　春城　年代
先代の表札のまま秋深む

米子市　見山　温子
秋日和子供がいない日曜日

寝屋川市　岡本　勲
妻だけが運転できる火の車

和歌山市　平田　元三
水槽で人を観察してる魚

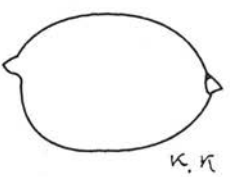
寝屋川市　冨山ルイ子
来年は私の干支で未年

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　358名）



「年忘れ」　牧野芳光選

もう年は忘れたいけど付き纏う　鳥取市　西川　和子
年忘れ七尺梯子リンゴ掩ぐ　弘前市　髙森　一呑
年忘れ同じメニューの続く日々　茨木市　藤井　正雄
忘年会数だけ他に引け取らぬ　大阪府　籾山　隆盛
年忘れ皺も宝と笑い合う　河内長野市　谷　久美子
これからだと言ってるうちに忘年会　堺　市　内藤　憲彦
古稀と喜寿子供三人知らん顔　大阪市　佐藤　忠昭
明けましてあっと言う間に年忘れ　鳥取県　山下　節子
座右の銘変えてすっきり年忘れ　横浜市　菊地　政勝
忘年会顔・顔・顔に来た道が　西宮市　福島　弘子
左見て右向きゃもはや年忘れ　奈良市　岩本　浩二
どたどたと間合い短くなる師走　西宮市　山本　義子
年忘れボヤキで暮れる老い二人　寝屋川市　岡本　勲
カラオケで今二十歳です恋心　和歌山市　坂部紀久子
年齢なら忘れたことにしています　橿原市　安土　理恵

「年忘れ」　古久保和子選

年忘れ顔を名前がずれてくる　西脇市　七反田順子
一年へ削除キー押す年忘れ　松江市　三島　淞丘
年忘れ今年も無事に蕎麦啜る　岩出市　藤原ほのか
外れくじ酒の肴に年忘れ　田辺市　岡本　昇
年忘れ貧乏神が出てゆかぬ　東京都　伊勢田　毅
年忘れ商品券をみな使う　藤井寺市　鴨谷瑠美子
二度とない一年でした年忘れ　青森県　松山　芳生
忘年会国際化した露天風呂　貝塚市　石田ひろ子
若い人交じると楽し年忘れ　今治市　渡邊伊津志
年忘れ静かな人が弾けてる　河内長野市　辻村　ヒロ
晦日そばすすりリセットボタン押す　大阪市　栃尾　奏子
しきたりにうるさい母と晦日そば　大阪市　津守　柳伸
うっかりと忘年会で喋り過ぎ　大洲市　花岡　順子
年忘れ女子会だけが盛り上がる　弘前市　稲見　則彦
耳鳴りが合唱をする年忘れ　和歌山市　北原　昭枝

年忘れ忘れちゃならぬ方が逝く　松江市　相見　柳歩
飲むために忘年会を企てる　高槻市　片山かずお
忘年会よいこと嫌なこと煮込む　和歌山市　土屋起世子
年忘れ赤いチャンコを脱ぎすてる　鳥取市　松川　行男
花柄は年を忘れて闊歩する　鳥取市　大前　安子
へそくりで豪華な主婦の年忘れ　米子市　後藤美恵子
年忘れしたい出来ない火の車　高知市　小川てるみ
年忘れ商品券をみな使う　藤井寺市　鴨谷瑠美子
認知症思いおもいの歳で生き　倉吉市　山中　康子
ほんまの年忘れてるから元気です　東大阪市　北村　賢子
大風呂敷ほどかぬままに年忘れ　京都市　桝本　宏子
年忘れ馬鹿になるのも悪くない　和歌山市　柏原　夕胡
思い出を篩にかける年の暮れ　備前市　森　ふみか
忘年会四つもやって忘られぬ　出雲市　伊藤　玲子
ケータイも車も全てピンク色　松江市　藤井　寿代
それぞれの花火を上げて年忘れ　大阪市　平井美智子
年忘れしたくないほど良いお年　大阪市　江島谷勝弘
忘年会コンビニ弁と発泡酒　弘前市　吉川ひとし
次年度に期待してますハルキスト　横浜市　小野句多留
仲良しも鬼も一緒に年忘れ　和歌山市　武本　碧
問う度にわたしは・た・ちと車椅子　堺　市　矢倉　五月
一年の終り幸せ数えとく　長岡京市　山田　葉子
多過ぎて残ってしまう年忘れ　倉吉市　中村　毅

煤逃げの隠居集まる年忘れ　堺　市　澤井　敏治
もう来年を睨んでるタイガース　大阪市　太田としお
忘年会よいこと嫌なこと煮込む　和歌山市　土屋起世子
年忘れ座右の銘も今日は反故　河内長野市　藤塚　克三
来年へ希望をつなぐ年忘れ　和歌山市　松尾　和香
年忘れあんなこんなをチャラにする　大阪市　田中ゆみ子
年忘れのどがころころ鳴りだした　米子市　後藤　宏之
バーゲンのはしごが妻の年忘れ　羽曳野市　吉村久仁雄
どたどたと間合い短くなる師走　西宮市　山本　義子
年忘れご破算したいことばかり　鳥取市　倉益　一瑶
おいそれと忘れてならぬことばかり　富田林市　中村　恵
年忘れしたら私が消えていた　西宮市　亀岡　哲子
のどもとを過ぎた振りして年忘れ　鳥取市　池澤　大鯰
忘れたい酒が今年を放さない　枚方市　伊達　郁夫
安穏の世に魂を置き忘れ　鳥取市　土橋　螢
年忘れ平和な国で腕を組み　寝屋川市　平松かすみ
コンビニが毎日あって年忘れ　長野県　丸山　健三
聞き忘れ言い忘れして年忘れ　大阪市　升成　好
居酒屋で買った負けたと年忘れ　堺　市　加島　由一
年忘れ朝のそば屋はあいている　高槻市　富田　保子
忘れたいこと蒸し返す年忘れ　橿原市　居谷真理子
年忘れだけど茶碗が欠けている　佐賀県　真島久美子
年忘れ何か一芸身につける　大阪市　藤原千恵子

診察券一枚ふえて年忘れ　塩竈市　木田比呂朗
クリスマスは派手に年忘れは粋に　西予市　黒田　茂代
帰巣本能かき立てる年忘れ　尼崎市　春城　年代
いいことも一緒に消える忘年会　四條畷市　吉岡　修
年忘れ母三歳と笑ってる　倉吉市　岡崎美知江
忘年会隣に来たら困る人　大阪市　井丸　昌紀
うっかりと年を取るのを忘れてた　富田林市　中村　惠
浅野より吉良に同情する師走　弘前市　高瀬　霜石
清水の揮毫気になる年忘れ　奈良市　加門　萌子
どう絞ろうか悩む貫主の太い筆　羽曳野市　徳山みつこ
年忘れアンパンマンに仲間入り　河内長野市　梶原　弘光
何年分忘年会に行くつもり　大阪市　坂　裕之
失敗はちゃんと覚えて年忘れ　八尾市　宮崎シマ子
パズルまだ残したままの年忘れ　岡山市　永見　心咲
てにをはを替えて未来を迎えたい　和歌山市　玉置　当代
喜よりも忌多くなっての年忘れ　大阪市　古今堂蕉子
本年もマニュアル通り暮れていく　札幌市　小沢　淳
フクシマは置いてけぼりの除夜の鐘　大阪市　近藤　正
忘年会反省なんかするものか　大阪市　川端　一歩

秀　句

年忘れしたら私が消えていた　西宮市　亀岡　哲子
年忘れ人間臭い息を吐く　山口市　増田めだか
ゴミ箱に投げ込む２０１４年　松江市　石橋　芳山

年忘れ忘れたくないこともある　堺市　羽田野洋介
曲がり角曲がり今年の年忘れ　鳥取市　中村　金祥
狭い路地脱輪させる年忘れ　西宮市　片山　忠
忘年会隣に来たら困る人　大阪市　井丸　昌紀
来年に全部持ち越す年忘れ　枚方市　寺川　弘一
ゴミ箱に投げ込む２０１４年　松江市　石橋　芳山
本年もマニュアル通り暮れていく　札幌市　小沢　淳
嫌な事みんな第九が吹き飛ばす　明石市　糀谷　和郎
ギブアップしたこともあり年忘れ　鳥取県　斉尾くにこ
紅白の心に残る歌がない　東大阪市　佐々木満作
年忘れ許せぬ事が多すぎる　備前市　森　ふみか
年忘れ今年は特に入念に　羽曳野市　永田　章司
災害の置場所がない年忘れ　鳥取市　鈴木　一弘
年忘れみんな忘れたわけじゃない　可児市　板山まみ子
不揃いのぐい呑み寄って年忘れ　富田林市　関　よしみ
お世話になった人を囲んで年忘れ　寝屋川市　籠島　恵子
パズルまだ残したままの年忘れ　岡山市　永見　心咲
帳尻は少しプラスの年忘れ　高槻市　原　洋志
年忘れ黄色い声の中にいる　奈良県　渡辺　富子

秀　句

年忘れ人間臭い息を吐く　山口市　増田めだか
それぞれの花火を上げて年忘れ　大阪市　平井美智子
押し迫りポインセチアの赤せわし　大阪市　柴本ばっは

「狙う」

（投句　196名）

吉岡　修　選

狙っても下一桁の三百円　西宮市　足立　茂
竜宮を狙い散骨海へする　鳥取県　竹信　照彦
もう誰も私を狙わない夜道　東大阪市　北村　賢子
公園でそっと毒針磨いてる　橋本市　石田　隆彦
ポケットに出番を狙う夢を持つ　池田市　上山　堅坊
百狙い生きれば何が見えるだろう　シドニー　坂上のり子
白状します本当は「天」を狙ってた　藤井寺市　鈴木いさお
合コンへ狙いは美女の横の席　堺市　村上　玄也
受け狙うジョーク笑うの止めにする　大阪市　古今堂蕉子
スマホから花園覗く奴がいる　松山市　神野きっこ
此の人と狙いを付けた人と居る　藤井寺市　若松　雅枝
北の国じらして次に何狙う　大阪市　藤原千恵子
狙うものあって魂奮い立つ　香芝市　大内　朝子
狙うのは二番目でいいそんな歳　豊中市　水野　黒兎
飛び出した首がターゲットにされる　三原市　鴨田　昭紀
その昔輪ゴムで撃ったのが夫　橿原市　居谷真理子
松茸を狙うお箸の早いこと　吹田市　木下　敏子
狙ってもとどかぬ愛のもどかしさ　神戸市　山根　弘子
狙われていると気付かぬ野辺の花　和歌山市　柏原　夕胡
ナンバーワン捨ててオンリーワン狙う　高槻市　原　洋志
ほろ酔いの頬を男の目が狙う　高槻市　富田　保子
狙ったらまず外堀に手を付ける　和歌山市　平田　元三
大穴を狙った末の空財布　弘前市　稲見　則彦
狙う気にとてもなれない車間距離　堺市　遠山　唯教
無位無冠狙われる物何もなし　奈良市　米田　恭昌
狙いとは違ったとこで受けている　大阪市　高杉　力
狙われていたのは僕の影法師　東大阪市　佐々木満作
狙う夢あって枯れない好奇心　米子市　中原　章子
照準は極楽まっ直ぐ生きている　藤井寺市　太田扶美代
狙うものあるから長く生きている　神戸市　山田婦美子
狙い通り事が運んで拍子抜け　和歌山市　上田　紀子
鴉が狙う政治家の菓子箱　青森市　松山　芳生

佳　句

衛星にわが家の庭を狙われる　堺市　澤井　敏治
長寿を狙いせっせと写経ごまをする　大阪市　笠嶋　恵美
らりるれろ狙い通りに出て来ない　海南市　小谷　小雪
狙われているのか視線からみつく　鳥取県　山下　節子
ターゲットにされないように隅にいる　寝屋川市　籠島　恵子

人

目が合えばもういけません募金箱　弘前市　高瀬　霜石

地

照準をしっかり決めるのは片眼　枚方市　寺川　弘一

天

ノーベル賞狙うかでかい呱呱の声　奈良県　渡辺　富子

軸

狙い目にだいぶ背伸びがいるみたい

「コーナー」

（投句　195名）

山岡　冨美子　選

ふるさとは角を廻ると海がある　弘前市　高森　一呑
警察が気軽に来いと言うコーナー　茨木市　藤井　正雄
手を借りずコーナーからの独り立ち　河内長野市　谷　久美子
コンビニの隅で蠢く夜光虫　塩竈市　木田比呂朗
コーナーから食み出しいつも叱られる　大阪市　榎本　舞夢
コーナーにきっちり嵌る私利私欲　和歌山市　武本　碧
コーナーでおいでおいでをする閻魔　紀の川市　宇野　幹子
タブレットコーナー若者に混じり　八尾市　高杉　千歩
止まり木の隅で命をあたためる　東大阪市　北村　賢子
郷土料理むかしの舌が寄ってくる　弘前市　今　愁女
四隅から白い笑いのおやじギャグ　大阪市　古今堂蕉子
幸せのコーナーに居て気付かない　香芝市　大内　朝子
コーナーを鋭く抉る消費税　大阪市　伏見　雅明
見切り品の中から妻を掘り出した　奈良市　大久保眞澄
四コーナーで貧乏神のバトン受け　橋本市　石田　隆彦
隅っこのひそひそ話気にかかり　犬山市　金子美千代
隅の椅子僕の形にへこんでる　西宮市　緒方美津子
空振りの春樹コーナーまたの夢　札幌市　小沢　淳
宝石より仏具コーナー足が向く　米子市　後藤美恵子
コーナーを曲がりきれない手毬歌　高槻市　島田千鶴子

早死にの作家の本がよく売れる　弘前市　高瀬　霜石
四コーナー辺りで待っていた刺客　東かがわ市　川崎ひかり
コーナーを抜けると風が待っている　松江市　松本　文子
曲り角で味方の数を確かめる　鳥取市　岸本　宏章
知らぬ間に戦力外のコーナーに　神戸市　白川　淑子
陽が当たり隅の埃も噂され　堺　市　矢倉　五月
コーナーでチビリチビリが動かない　大阪市　榎本日の出
コーナーに昭和の匂いトリスバー　三田市　堀　正和
隅の席むつかしそうな顔ばかり　高槻市　片山かずお
英雄の顔で喫煙コーナーへ　四條畷市　吉岡　修
コーナーを回ると馬は叩かれる　大洲市　中居　善信
最終のコーナー神がほほえんだ　奈良県　渡辺　富子

佳　句

喫煙のコーナーさえも姿消す　堺　市　村上　玄也
人生にニュートラルコーナーなどは無い　鳥取市　谷口回春子
コーナーに立って遠心力を待つ　沖縄市　森山　文切
その角を守る小さな地蔵様　橿原市　居谷真理子
ビルの角上手に曲がる鐘の音　高槻市　原　洋志

人

コーナーごとに箝口令が敷いてある　藤井寺市　太田扶美代

地

どのコーナーも字余りは許さない　鳥取市　土橋　螢

天

避難所は畳二枚のテリトリー　唐津市　山口　高明

軸

陽だまりに猫とわたしのシルエット

「枝」

（投句　196名）

小沢　淳　選

乾いた枝から火に焼べられて行く　沖縄市　森山　文切
枝道に話がそれる長話　大阪市　板東　倫子
まだ咲ける枝がバサリと落とされる　橿原市　居谷真理子
枝振りに惚れて人生見誤る　豊橋市　藤田　千休
折れそうで折れない枝が私です　和歌山市　柏原　夕胡
枝や葉を切って我が身をさらけだす　倉吉市　山中　康子
自己主張したがる枝を切り落とす　和歌山市　磯部　義雄
侘助のひと枝こころ和ませる　東大阪市　北村　賢子
木の枝にみの虫ぶらり冬仕度　三田市　尾崎　一子
未熟でも枝豆として日の目見る　岡山市　永見　心咲
枝振りの良い娘はすぐに虫がつく　河内長野市　藤塚　克三
濡れ落葉妻の小枝にしがみつく　堺市　澤井　敏治
枝打ちでスリムになった虚栄心　和歌山市　武本　碧
盆栽の枝ぶり自慢し合う仲　鳥取市　永原　昌鼓
隣家から押入る枝に柿一つ　奈良市　大久保眞澄
言い難い事は枝ぶり褒めてから　藤井寺市　若松　雅枝
大樹の枝はプラス思考で伸びてゆく　枚方市　寺川　弘一
枝ぶりをほめて散歩がお茶になり　唐津市　仁部　四郎
知事賞を射止めた美しい枝振り　藤井寺市　太田扶美代
どの枝も愛しと思う花鋏　大阪市　津村志華子

ひと枝の紅葉を寝たきりの母へ　藤井寺市　鈴木いさお
盆栽の枝振りわかる歳になり　和泉市　横山　捷也
よう生きた縄文杉の枝も老い　大阪市　柴本ばっは
サラリーマン柳の枝のように生き　大阪市　髙杉　力
摘心をして枝振りを確かめる　松山市　神野きっこ
風雪に耐えて連理の枝となる　弘前市　福士　慕情
枝道にそれて目標見失う　紀の川市　楠原　富香
根も葉もない噂に枝が揺れている　弘前市　吉川ひとし
枝打ちをされた樹木が天を突く　鳥取市　岸本　宏章
家系図の一枝にぶら下がる私　札幌市　三浦　強一
枝打ちの空からラジオ降りてくる　三田市　堀　正和
枝つけて採れよと婆の吊し柿　三田市　北野　哲男

佳　句

枝打ちの森が大きな息をする　西予市　黒田　茂代
枯枝に老いも若きもぶらさがる　青森県　松山　芳生
困ったらここへ止れと枝を出す　鳥取市　竹信　照彦
天を突く枝に期待がぶら下がる　松江市　三島　淞丘
剪定の枝に度胸が試される　香南市　桑名　孝雄

人

フィクションに枝葉を付ける小説家　貝塚市　石田ひろ子

地

お休み下さい　わたしの枝でよかったら　弘前市　髙瀬　霜石

天

話したいことをいっぱい持つ枝だ　海南市　小谷　小雪

軸

僕は枝鳥に結婚迫られる

初しぐれ教室

題 ― 土壇場

山口光久

新年はお互いの無事を確認し合う年賀状を交換しますが、この頃の年賀状は殆どがパソコンで作られたものです。出来栄えは見事ですが何か物足りなさを感じます。その点、版画のもの、写真入りのもの、墨書のもの等を戴くと心が和みます。さらに、メッセージが入ったり、一句が添えてあると格別です。私が戴いた賀状の中からご紹介します。

① おめでたい言葉を中心にした句

あかねさす陽はまた昇る日の本に　氷筆
幸運の神は自分の中にいる　いわゑ

② 人生観、年頭の決意を表す句

人間に磨きをかけてゆく加齢　保州
逆転の明日を握っている冬芽　朱夏

③ 身辺を知らせる句

孫の名を一人書き足す祝箸　楓楽
キッチンにまた立てる幸しみじみと　みつ子

④ 干支を詠み込んだ句

天翔る手綱を緩めてはならぬ　蘭幸
おみくじは吉何事もウマくいく　大輪

さあ、皆さんも一句を添えてみたら。

【添　削】

原 もしかしてその言葉ってプロポーズ　福貴子
題の「土壇場」が感じ取れません。題を間違えられたのでしょうか。

原 メ切りをひかえて作句に四苦八苦　治子
中八の破調句です。「て」の助詞を省いても句意は変わりません。

添 締切りをひかえ作句に四苦八苦

原 如意観音答えを下さい崖っぷち　晶子
この句も中八です。

添 如意観音助けを願う崖っ縁

原 落とし穴土壇場で知るはかりごと　英男
「落とし穴」と「はかりごと」は似たような意味があり、どちらか省きましょう。

添 土壇場に噂で知ったはかりごと

原 土壇場で相手のゴール意気消沈　(高)弥生
下六になっています。下六は座りが悪くリズムもよくありません。

添 土壇場で相手に敗れ意気阻喪

原 曲がり角土壇場だからスーイスイ　安子
句意が解りにくいです。読者に解り易く。

添 土壇場に立たされている曲がり角

原 関空でパスポート忘れ気がついた　モモ
「関空」は伊丹でも成田でも通用する句です。このような句を「動く句」といい、嫌われています。

添 パスポート忘れ搭乗できぬ羽目

原 苦肉の策土壇場みごと切り抜ける　心咲

添 土壇場を苦肉の策で切り抜ける

原 運動会土壇場で孫追い起さる　(山)久子
「起さる」は「越される」の間違いだと思いますが、投句前にもう一度確認をしましょう。

添 運動会孫はゴールで追い越され

原 土壇場に立ちて甘えるメール打ち　(畑)節子

添 土壇場で友に甘えるメール打つ

原 締切は明日徹夜で作句する　武人

添 土壇場になって徹夜で作句する

原 土壇場にならなきゃ詠めぬ癖がつき　喬

添 土壇場にならぬと作句出来ぬ癖

原 土壇場と気づかぬ妻で救われる　ひろこ

添 土壇場も素知らぬ顔の妻である

原 北へ来い土壇場までも花もたす　勝治

添 北へ来い土壇場までも気を揉ます

原 不肖でも行きつくところ子に託す　和之

添 不肖でも後事を託すのは息子

原 迫られる決断へ子がパパにつく　(前)洋子

添 土壇場で娘はパパの側につく

原 土壇場の泣き落とし術みえかくれ　つな子
添 土壇場で泣き落とし戦術に出る
原 土壇場の言葉を聞いて燃え上がる　開　子
添 土壇場に追い詰められて燃え上がる
原 土壇場の力さっぱりダイエット　まさる
添 土壇場に力さっぱり発揮せぬ
原 幾度となくピンチチャンスに変えてきた　友　子
添 幾度となくピンチピンチの連続で
原 土壇場に書くから没句ばかりなる　律　子
添 土壇場であわてて作句没の山
原 土壇場で火事場の力出し尽す　マユミ
添 土壇場に驚くほどの力瘤
原 先きのばししては土壇場慌ててる　(見)温　子
添 先のばし出来ぬ締切り大慌て
原 特攻の基地で土壇場神になる　ミヨノ
添 特攻隊出撃間近無の境地

【少しの修正でよくなる句】

原 土壇場で詐欺に気づいて顔洗う　(川)洋　子
添 土壇場で詐欺に気づいた紙一重
原 土壇場に右か左で運を分け　こずえ
添 土壇場に右か左か運任せ
原 土壇場の決断幾多喜寿の春　絹　枝
添 土壇場の決断あまた喜寿の春
原 いよいよになればわたしも力出す　亜希子
添 いよいよになれば私の力瘤
原 土壇場で思わぬ人に助けられ　国　和
添 土壇場で思わぬ人の手が届く
原 土壇場でやっともらったプロポーズ　満知子
添 土壇場でやっと決まったプロポーズ

【入選句】

土壇場で明暗分ける身のこなし　(富)恵　子
幾度の土壇場越えたシワの数　辰　夫
終了のベルがせかせる答案紙　(斉)宏　子
土壇場になって決まった家族葬　義　雄
テスト前切羽詰まった一夜漬　(中)修
土壇場も踏んで男の独り立ち　忠　士
土壇場のそのひとことで恋もさめ　(山)純　子
火事現場金庫かついでスタコラサ　紀美恵
土壇場のふんばりどころ持久戦　忠　貞
何事も土壇場になり動く古稀　洋　一
土壇場でやっと出て来た底力　登　子
土壇場でひらめく策に救われる　加　代
土壇場は鬼にもなろう母性愛　元　三
土壇場になって気を揉む力瘤　ひとし
土壇場に追いこみ部下の力みる　風　花
土壇場になれば歪な口と耳　(高)道　子
土壇場で見せたる老いの底力　凱　柳
土壇場で匠の技が役に立ち　泰　宏
土壇場に立って実力思い知る　回春子
土壇場から涼しい顔の子が戻る　(川)真理子
土壇場で閻魔買収しましょうか　狸　月
土壇場にならねばやる気出ぬ試験　のり子
土壇場でおろおろしてる意気地なし　(山)弘　子
土壇場で男の意地が目を覚ます　富　香
土壇場になって自分がやっと見え　恭　子
ドタンバで投げた一球危機救う　志津子

【佳　句】

土壇場であなたに決めた吉だった　孔　一
土壇場を思い出してる木守柿　昭　枝
土壇場を越えて人間丸くなる　紀　雄
あと一歩積木崩しが始まった　きっこ
登頂寸前切羽詰まって下山する　(株)玲　子

【今月の推せん句】

土壇場の藁一本の温かみ　石田ひろ子
絶体絶命口紅だけは濃く赤く　肥後和香子
土壇場でやっと素直になれました　田中　天翔

平成二十六年度初歩教室年間賞

プライドを捨てれば楽になる吐息
紀の川市　楠原　富香

崖っ縁女の武器ですり抜ける
大阪市　内田志津子

土壇場の藁一本の温かみ
貝塚市　石田ひろ子

川柳塔鑑賞

同人吟　水野黒兎

―11月号から

モノクロの映画女優の名を忘れ

夏目一粋

いいえ、実はよく覚えておられるのです。近頃の俳優さんの名前こそ忘れるというか覚えられないのです。原節子、轟夕起子、高峰三枝子、田中絹代など、ほら夏目さんよく覚えていらっしゃるではありませんか。飯田蝶子だってモノクロの時代の女優だったと思います。

坐ってる場合じゃないが坐ってる

谷口　義

この堂々たる態度は近頃の私を含めて軟弱な男たちは見習わねばならない。肝が据わっているのである。

読まれることも想定内で書く日記

大久保　眞澄

そうです、ふとしたはずみでいつ誰が読んでしまうかもしれぬ日記。所々に夫や姑を褒める言葉や感謝の気持をさりげなく書いておきましょう。

逆転ホーマー袋叩きにあっている

米田恭昌

打たれた投手がではない。殊勲打の選手が味方の選手たちに手荒い祝福を受けているのである。近頃は袋叩きのほかに水らしき液体を頭から振りかけるのが流行っている。

鱗捨てよう古本を処分する

髙島啓子

鱗とは何を指すのかは読み手の鑑賞次第。昔の苦い思い出か、世のさまざまな柵か、スイスイと自由に泳ぎ回っていた頃の煌めくような衣装か。ともあれ断捨離をしよう。でも捨てるのは難しい。特に親の思い出の品とか、愛読書などを捨てるのは忍び難い。しかし断捨離を決心した以上やるしかないと先ず古本の処分。

簡単レシピ法螺だったのか割烹着

岩本浩二

とはいうもののリケジョ達、頑張れ！

ローコスト目指した果てのハイリスク

村上直樹

最近大きく話題になったのは肉。肉に限らず電気製品でも衣料品でも同じことであろう。安さを狙うあまり、品質管理上のリスクが生じ、また海外移転する工場により国内労働の機会損失と言うリスクを負うことになる。

松茸は口に合わないことにする

古手川　光

我家では松茸はおろか、うな重も、国産のサクランボも一家全員口に合わないことになっております。ところで、外国人に採りたての松茸の匂いを嗅がせると「足の匂いがする」と顔を顰めたりするとテレビで放映していました。

お化粧はすたりスマホという車内

関本かつ子

優先席に座りお化粧に夢中で目の前の妊婦さんに気付かない娘さんもいたが、そういえば最近化粧は減った。スマホに取って代わったのである。すごいスピードでスマホの画面を撫でまくっている。車内の文庫本を読む人はめっきり減った。

常連を大事にしない宝くじ

江島谷　勝　弘

そうです、そうですと声を大にする。少数の億万長者が出るのも実に多くの不運な常連達が黙々と藤で支えているからである。

死神を置き去りにした救急車

柿　花　和　夫

救急車はすぐに駆けつけてくれるが、受け入れの病院探しに三十分もかかってしまったとの話もある。しかし救急車のおかげで、そして受け入れてくれた病院のおかげで、待機していた死神は見事に置き去りにされたのだった。有難いことと感謝している。

三日ひとり言葉忘れてしまいそう

松　尾　美智代

一人二人と子供たちは巣立っていった。いまは元の二人だけに戻ってしまった毎日。おしゃべり好きの作者はご主人相手にせっせとしゃべる日課。優しい旦那さんは「うん」とか「そうか」などと時に相槌を打って聞いてくれる。そのご主人が急に三日ほど旅に出た。ああ、寂しい、誰も私の話をきいてくれない。

まん中に座した父権もセピア色

島　田　誠　一

席こそ真ん中であるが、定年後どうも自分の家庭内の地位がどんどん下がっているように感じる。我がことながら昔はもっと威厳があったと思うが近頃は家庭内序列も飼い猫の下辺りになってしまった、などと述懐する秋の暮れ。

夕立が去っても続くお茶タイム

富　田　保　子

にわかに降ってきた夕立、ご近所の知り合いとちょっと雨宿りに喫茶店に入りあれやこれや話が弾む。おや、もう雨は上がったようだ。けれど話は終りそうもない。かくして延々と雨宿りは続くのである。

百均のレジで原価を思う秋

森　松　まつお

えっ、こんなのも百円！と驚くこともある。この店の儲けを20パーセントとすると仕入れは80円、商社もいくらか儲け、船賃など運送費を考えると製造元の原価は一体いくらなんだろう、暮らしていけるのだろうかなどと他人ごとながら心配している。

きのこの香早い巡りの秋を知る

栗　田　久　子

今年の夏は短かった。去年の長い夏の記憶があるからことさらそう感じるのである。そしてもう店頭に並ぶ松茸の香が秋を知らせている。

大会にお手伝い出来ありがとう

富　山　ルイ子

何か催し物、例えば川柳塔まつりなどに、お手伝いしていただける人たちの存在は実にありがたい。しかも参加させてもらってありがとうとは嬉しいことばである。また次もお手伝いを頼みますと大会関係者は思っていることでしょう。

待ち遠しくて郵便受けになり果てる

太　田　扶美代

吉報とか愛しい人からの便りを待ちに待つ、そんな気持ちを郵便受けになり果てるとはシュールで素敵な表現。

川柳をしててよかった合言葉

大　内　朝　子

留守番に川柳作句する至福

松　尾　和　香

おしめしていても川柳止められぬ

土　橋　はるお

水煙抄鑑賞

—11月号から

福西茶子

話すうち小さくなってゆく怒り

高山清子

あんなに腹を立てていたのに、昂奮して話しているうちについ、滑稽になってしまう事ありますよね。話を聞いてくれる人がいるって有難いですね。

投資した子供はみんな村を捨て

岡本勲

投資しても親はまだ納得できますが、出生からずっと投資してきた地方自治体はやるせないですね。出世したら「ふるさと納税」でもして故郷を忘れないでくださいね。

ダイエット僕の財布もやせている

太田としお

身体だけでもダイエット出来たら成功ですよ。私なんか粗食絶食しても効果なし。いつも財布だけ痩せています。

ありがたい亭主が作る昼ご飯

宇都満智子

本当に羨ましいことです。お尻に根が生えて、奥さんに「お茶、風呂」しか言えない人もあるというのに…

やっと今気づく日本一の亡妻

上山堅坊

孝行をしたい時には…と言いますが、失ってみて真の有難さが身に沁みます。日本一と気付かれたことに感動です。

働いて来た日のビール旨いこと

藤原泰宏

同感。特に毎日が日曜日となった昨今、働きに出ること自体稀となり、つい気合が入ります。達成感とビールの旨さ。

三日経てあちこちに貼るサロンパス

高木道子

そうそう。何故こんなところが痛いのか。あっそうか。三日前の…忘れた頃に来るしっぺ返しですね。

家計簿は暗算で済む金額だ

尾畑なを江

我が家と一緒で思わず笑ってしまいました。それなのに年金は毎年毎年減ってきます。一揆でも起こしましょうか。

高いビル建って花火が見られない

田邊浩三

都会では地上から花火を見るのではなく、ビルの屋上から花火を見下ろすようになるかも。田舎の空はぐるっと三百六十度、満天の星が笑いかけてきます。

ねばならぬ事など無くて今日を生き

大坪一徳

適当に金と暇があって、悠悠自適の生活。縛られると精神衛生上よくない。理想の生き方ですね。

ライバルにライバルだとは思われず

高杉力

ライバルとは自分と同レベルの人。力さんはレベルが高すぎてライバル視するには程遠い人かも。

浮き沈みよくぞ生きたと振返る

飯野菖子

沈んで人の温かさを、浮いて人を思いやる事を知る。泣いて笑って、皆そうして生きてきたのでしょうね。

体当たりしようか壁はニンゲンだ

真島久美子

一万歩過ぎるころには草臥れる

丹下凱夫

48

星に想う

前回は月を対象にした作品を取り上げましたが、今回は星です。月も様々な想いを抱かせてくれますが、星はより一層ロマンチック且つ神秘的であり、歌謡曲でもヒット曲がたくさんあります。懐かしいところでは、「星の流れに・菊地章子」「星屑の街・三橋美智也」「星は何でも知っている・平尾昌晃」「星のフラメンコ・西郷輝彦」「地上の星・中島みゆき」「見上げてごらん夜の星を・坂本九」等々、そして、「星影のワルツ・千昌夫」は、川柳塔まつり懇親会のお開きの歌としてすっかり定着しました。この曲が様々な宴会での「お開き」で歌われるのは、歌い出しの「別れることはつらいけど…」という歌詞がピッタリだからでしょう。やはり「ことば」の力は凄いと改めて思います。もちろん、川柳作家の皆さんも星に想いを重ねていくつもの秀句を生み出しておられます。

寂しさの募る一番星のころ　守田　啓子
いい空気星が証明してくれる　岸本　宏章
冬銀河冴えどこからかジャズピアノ　西出　楓楽
星は好き天文学はとんと駄目　岩崎　和子
奇蹟を乗せて奇蹟の星がまわってる　小川　佳恵

元気者でも夕暮れどきは何となくセンチメンタルになるものです。それを「夕暮れ」ではなく「一番星のころ」と表現したのが手柄。都会ではネオンや排気ガスで星も霞んでいますが、田舎ではキラキラ星が「いい空気」であることを証明してくれています。また、冴えわたる「冬銀河」と「ジャズピアノ」の取り合わせが絶妙。星は好きだが「天文学」となると敬遠したいのも納得。この星が存在して私たちが存在していることこそが大いなる「奇蹟」です。

オリオンが昔むかしと語りだす　藤田　武人
オリオンが光る休耕田の上　佐藤　岳俊
午後八時星のかけらが降るでしょう　森田　律子
夜空から弾かれたのか流れ星　泉水　冴子
決断はこうあるべしと流れ星　井口　薫
遠回り星のきらめく道歩く　宮本かりん

宮沢賢治作詞作曲では「星めぐりの歌」があります。それほどヒットしていませんがご存知の方も多いでしょう。最近では、高倉健主演の映画「あなたへ」の挿入歌として取り上げられ、田中裕子の歌が心に沁みました。その歌詞は、

あかいめだまの　さそり　　ひろげた鷲の　つばさ
あおいめだまの　小いぬ　　ひかりのへびの　とぐろ

それぞれ「さそり座のアンタレス」や「おおいぬ座のシリウス」を詠っています。二番では「オリオン」や「アンドロメダ」が出てきます。聴く者をその詞の世界に引き込み想像の翼を広げさせるのは具体的に星の名前を述べているため。いわば具象の力です。川柳では音数が限られているので具体的に言いにくいこともあるでしょうが、想いを深く広くするためにも主な星の名前と位置ぐらいは覚えるべきでしょう。

したたかに酔えばゴッホの星月夜　原　洋志

右は星を見ての想いではなく、ゴッホ晩年の作「星月夜」に酩酊を重ねたもの。混迷している精神状態までを想像させるのも「ゴッホの星月夜」という具象の力です。

『麻生路郎読本』余滴 (24)

「矢車」と路郎作品 ⑥

桒原道夫

「矢車」二八号は、編集発行人・森井荷十の病気のため、明治44年7月20日には発行されず、8月10日に発行された。「矢車」の目指す句風は、古句とは異なり、自己の思いを述べるところにあったが、それは、当時の文芸思潮であった自然主義の影響を受けたものであった。そして、他ジャンルの人にも「矢車」を贈り、交流をはかっていたことは、8月号の「余滴」で紹介したように、歌人・若山牧水が「創作」に感想を書いていることからも知れるが、二八号には、詩人で評論家の相馬御風と服部嘉香が寄稿している。

相馬御風は、明治16年7月糸魚川市に生まれ、昭和25年満67歳で死去。明治34年、与謝野鉄幹の新詩社に入会し、「明星」に作品を発表。同35年、早稲田大学予科に入学。翌36年、新詩社を退会して岩野泡鳴らと「白百合」を創刊。同39年、早稲田大学卒業後は、師の島村抱月によって再刊された第二次「早稲田文学」の編集に携わり、自然主義評論家として第一歩を踏み出す。翌40年、三木露風、野口雨情等と早稲田詩社を起こし、口語自由詩の理論と実践を推し進め、トルストイやツルゲーネフの翻訳でも活躍した。大正5年、糸魚川に帰郷後は、良寛の研究に没頭した。「春よ来い」「カチューシャの歌（島村抱月との共作）」「早稲田大学校歌・都の西北」の作詞者としても知られる。（『相馬御風著作集　別巻二』の「相馬御風年譜」等参照）

「矢車」に掲載された相馬御風の文章を全文挙げておく。このときの御風は満28歳。前年には長男も生まれ、早稲田大学講師であった。

＊豊川町より

……始めてあの雑誌（筆者註―「矢車」のこと）を送つていたゞいた時には、私は又かと云ふ氣がしました。その『又か』と云ふ意味は此の頃世間で矢鱈に出る不得要領な道樂雜誌の類だと思つたからの嘆息の意味でした。さう思ひながらも念の爲め第一頁をあけて見ました。

所がその第一頁から受けた印象は、全く私には思ひがけない新しいものだつたのです。私はいつの間にか全頁を讀んでしまひました。

川柳詩――貴兄等（筆者註―「川柳詩」は中島紫痴郎の造語なので、「貴兄」は紫痴郎を指し、紫痴郎宛てに送られた原稿であると思われる）の主張さる、川柳詩といふ形式には遺憾ながら私は心からの同情を持つ事は出來ません。これは兼ねてからの詩の制約的形式に對する私の意見を御了解くだすつた方ならば今更其の理由は申さなくても好い事と思ひます。だが川柳と云ふ從來有り來りのものまでも、高尚な詩の領域へ引き上げて見せやうとなさる諸君の努力に對しては私は敬意を拂はぬ譯には行きません。殊にさう云ふ有り來りの形式をも

使驅(マヽ)して、その中に諸君の新しい情緒、新しい心持を盛らうとせられる諸君の藝術心を私は何よりもうれしく思ふのです。

川柳といふものに對するこれまで有り來りの觀念を打破して、寧ろかう云ふもの、中にこそ眞實人間の聲があるのだと云ふ事を示さうとなさる諸君の抱負には、たしかに一種の意義があります。その諸君の運動は決して諸君が川柳詩如きチッポケな仕事にばかり現はれるに止めて置くべきものではありますまい。

諸君の生活――諸君が現代に生活される全體の心持の上に、出て來なければなるまいと思ひます。『何か起りつ、ある』――此の大きな暗語の意味と、諸君の現在の心持とを好く考へ合せていたゞく事は私の最も多く希望する所であります。諸君の現在の心持は決して川柳詩を起す爲めのみの心持ではありますまい。私は諸君の川柳詩そのものよりは、川柳詩とまで成つて現はれねばやまぬ諸君の心持を懷しく思ひます。

七月八日南風の砂を吹きつける二階にて

＊明治43年に小石川区老松町に住んだ御風だったが、44年4月郷里糸魚川の生家が大火で類焼、一時帰郷する。5月に、長男が亡くなり、小石川区高田豊川町に転居し、郷里の老父と同居する。

御風の本文中に、「貴兄の主張さる、川柳詩といふ形式には遺憾ながら私は心からの同情を持つ事は出來ません。これは兼ねてからの詩の制約的形式に對する私の意見を御了解くだすつた方ならば今更其の理由は申さなくても好い事と思ひます」とあるが、「早稲田文学」明治41年3月号に発表した御風の評論「詩界の根本的革新」を参考にして説明しておく。

御風は、明治になって起こった新体詩は、名前は新体詩だが、旧体詩だと批判している。新体詩は旧来の七五調や五七調を用いて、全体の形式だけ西洋の配列法を真似ているにしか過ぎない。そして、次のように言う。〈わが新體詩をして眞に價値ある文藝の一部面たらしめやうとするならば、今の所謂新體詩を根本から破壞してかゝらねばなるまい。あらゆる新體詩と稱するものに對する觀念を棄却して、內より外に形をなすの態度に出で、作せねばならぬ。即ちわが新體詩界の眞の革命は、先づ詩の起源に於ける第一歩に歸つて、內より湧き出づる聲さながらに歌ふことである。〉

口語自由詩を確立しようとしていた御風の立場からすると、川柳の五七五は「制約的形式」に過ぎなかったので、「貴兄の主張さる、川柳詩といふ形式には遺憾ながら私は心からの同情を持つ事は出來ません」と言ったのだと思われる。

川柳詩という形式には同情しないと言った御風だが、その内容に対しては、「殊にさう云ふ有り來りの形式をも使驅して、その中に諸君の新しい情緒、新しい心持を盛らうとせられる諸君の藝術心を私は何よりもうれしく思ふのです」と讃辞を呈している。「詩界の根本的革新」で、御風は、「詩界に於ける自然主義は、（略）自己中心の叫びをさながらに發表する、そこに眞の詩の意義が存するのではないか」とも言っており、「自己中心の叫び」に近いものを、「矢車」の川柳に見出したのだと思われる。

「諸君の藝術心を私は何よりもうれしく思ふのです」とあるが、御風は、大正元年1月「新潮」の「藝術活動は人間生活其の物なり」（『相馬御風初期評論集』名著刊行会・昭和57年6月に収録。『相馬御風初期評論集』は、『相馬御風著作集 別巻一』に

も収録されている）で、芸術について次のように述べている。

世の所謂藝術家乃至藝術作品のみを藝術の本體として考ふる人々は私達の友ではない。藝術の全部を否定しながらも、なほ且つ眞の藝術家、描かず刻まず歌はざる眞の藝術を創造し得た人のある事を考へなければならない。藝術は現實に始まつて現實に續く活動であつて、藝術品はたゞそのシムボルたるに過ぎない。現實生活が藝術を生むのでもなければ、藝術が現實生活を化するのでもない。生活を營むことであり、藝術を味ふことが同時に生活を味ふことである。生活の追求と創造が、同時に藝術乃至宗教の追求であり創造である。

服部嘉香は、明治19年4月東京に生まれ、昭和50年満89歳で死去。明治37年4月、早稲田大学予科に入学。同級に若山牧水、土岐善麿らがいた。北原白秋、三木露風らは中退。同41年、英文科卒業。卒業後は、早稲田文学社に入り、秋田雨雀と『文芸百科全書』編纂に従事。以後、新聞記者や母校の講師を務めた。大正10年関西大学講師となり、昭和12年、早稲田大学に復帰し、昭和31年退職まで文学部教授を務めた。昭和25年には、日本詩人クラブの創立にも参画した。詩集『幻影の花びら』、歌集『夜鹿集』、評論『口語詩小史』などがある。（昭和50年10月、早大「国文学研究」の原子朗編「服部嘉香先生略年譜・著述目録」参照）

服部嘉香が寄稿した「短詩形の効果」は、約二八〇〇字の長文なので、要約しながら抄出しておく。

徳川時代の川柳の生命とするところは、一種の「穿ち」で、人生人事の弱点と矛盾を警句的に言い表したものである。このように狙いどころが単純なだけに、出来上がった作品は単調である。川柳の芸術的効果は、深くもなく高くもなく、要するに平淡と奇警とを加味した一種の文学である。

次に続く部分は、そのまま引用する。

『矢車』の同人諸君が、此の單純と淺薄とに飽いて、眞に明治の一短詩形として、内容と形式とに於て意義ある改革を施さんとした事はたしかに卓見である。川柳を單に『穿ち』又はをかし味のものとせず、人事趣味を謠ふ外に内面的描寫を之に加へて主觀詩にしやうとする努力をしてゐるやうに見える。併し實際の作品を見ると、穿ちもをかし味も無い、淺薄な作品も少なくないやうである。語の選び方が甚だぞんざいで、十分こなれてゐないやうなのも多い。わざとらしい、生硬な、又無暗と軟弱な、厭味のあるものがずゐぶん見えるやうである。かつて鈴木哀花氏が獨力『綠熱』を經營發行して、俳句の十七字を改革して新時代の短詩を作らうと、殆んど獻身的努力をしてゐた。それにも初めは『矢車』に見えるやうな缺點が多かつた。これらは思ふに、最初の出發點が悪いのでは無からうか。

『綠熱』は俳句から出て俳句を破らうとした。『矢車』は川柳から出て川柳を破らうとしてゐる、そして共に短詩形を以て主觀的發想を實行しやうとの目的を以て進んでゐる。けれども二つながら其の足元には俳句なり、川柳なりがある。俳句なり川柳なりの鐵鎖に繫がれてゐながら、自由に大空を翔け廻らうとする。そこに何等かの束縛を感じて徹底的な革命を爲し得ない理由がありはしないか。つまり俳句を改革しやう、川柳を改革しやうといふ立場が悪い。十七字の前後を出ないやうと思ふのが悪い。

すべての習慣、あらゆる連想、悉くの約束を打破して、新しい心を以て新しい短詩形を作る――こゝに最善の努力を費やされんことを私は特に希望したい。

嘉香の本文中に、「併し實際の作品を見ると、穿ちもをかし味も無い、～無暗と軟弱な、厭味のあるものがずゐぶん見えるやうである」とあるが、例えば次のような作品がそれに当たるだろうか。「矢車」二七号から挙げてみる。

またくるといふて別れて逢ひもせず　青明
老人と子供のあひにわれがさまよふ　五葉
窓に倚り紅きメロデイ痛み聞く　破魔杖
俳優になつてをんなをだましたし　龍郎
よくのろける友に別れし初夏淋し　由三
さめて行く酒よ募り行く暗愁よ　三郎
のめば苦がき酒こひわたるこの憂ひ　荷十

このように、「無暗と軟弱な」としか言いようのない作品が「矢車」に多いのは事実である。

また、嘉香は「『矢車』は川柳から出て川柳を破らうとして」おり、その出発点が悪い、とも言っている。嘉香も御風と同様に口語自由詩を目指していたので、五七調や七五調を形式の制約と見ていた。『口語史小史』の「柳紅の詩史的地位」に、〈本来、象徴詩は、自然主義の後にあるべきもので、敏・有明・泣菫らによつて自然主義以前の象徴詩が形成されたのは、外来詩風の影響によるものであつたが、複雑・微妙な心の世界の動きを、その色・光・匂いをまで、言葉の上に暗示し、表現するには、絶対に形式の自由が必要なのである。七五調や八六調などの形式の制約は、表現を制約するばかりでなく、内容までも変形せしめるからである〉とある。

嘉香は、さらに、「十七字」という定型であっても、やりようがあるのではないかと、土岐哀果、石川啄木を例に挙げて、次のように述べている。

土岐哀果、石川啄木二氏の新短歌には一種の趣味がある。日常生活の出來事なり感想なりを、一種の調子を加へて歌つてゐる。これも短歌の三十一文字の前後を彷徨してゐるのであるが、作者の態度に獨想的な處があるだけに、少しも不熟とか厭味とかを感じない。その藝術的價値の問題は別として、此の二氏がおの〳〵自分の生活を其のまゝに、少しも僞りなく描いてゐる處に權威がある。そして全體として作者の人生に對する心持が出てゐるのは見逃してはならない特點であると思ふ。

十七字を改革するといふにも、單に形式の上に苦心するよりも、哀果、啄木二氏の如く全く新しい態度を以て進まねばならぬ。直ちに内容の革命である。その内容の革命が形式上の變化と化合して一種の新體を作り出したのである。『矢車』の人々は、哀果、啄木二氏の態度について一考せねばなるまいと思ふ。（以下略）

哀果、啄木の新短歌には、「作者の態度に獨想的な處」があり、「自分の生活を其のまゝに、少しも僞りなく描いてゐる處に權威がある」と言っている。逆に言えば、「矢車」の川柳には、作者の態度に独創的なところがなく、自分の生活を偽りなく描いているとは言えないということになる。筆者も嘉香の意見に賛成で、「矢車」の作品の多くは、自己の思いを述べようとはしているが、その思いに溺れてしまっているように思うのである。

（次回に続く）

本社 十一月句会

◇十一月七日(金) 午後一時
アウィーナ大阪

十一月句会は百十一名（投句十名）の参加で開催。初参加は京都市の筒井祥文さん。

句会に先立ち先ごろ逝去された神磯夏典子さんに黙祷を捧げた。お話は村上玄也さん。「東西日本の食文化」と題して、会社生活四十年間に転勤により、西日本に二十年、東日本に二十年在住した体験を通じて、食文化の違いを感じたとか。最も違いを痛感したのは「納豆」。納豆の起源は弥生時代、朝食に食べられるようになったのは江戸時代。昔の関西人は納豆を知らなかったという。

ある年の調査によれば、納豆消費量の第一位は福島、二位が茨城、大阪は四十六位。因みに最下位は和歌山。その他、食材・味・食べ方・食べ物の呼び方など、東西の食文化の違いを語られた。最後に食い倒れ大阪の食の言葉が廃れてゆく傾向にあることが危惧される、と締めくくられた。（朱夏）

月間賞は古今堂蕉子さん。（大阪市）

（司会―蕉子・善純）（脇取―真理子・扶美代）（受付―裕之・美智代）（清記―勝弘）

席題「善」　渡辺 富子 選

善人の仮面そろそろ脱ぐとする　一歩
勝ち負けの中で善悪見極める　完次
善人のフリして鳥居くぐるボク　茂
いい人と言われてエゴを持ち出せず　行兵衛
善を積むポイントためて逝かはった　ばっは
とりあえず笑顔善人の振りをする　理恵
失態のシミがまだ浮く善後策　誠一
善戦をしたいと思う十二月　信子
善行を積んだと書いてお布施する　敏治
病む世相性善説が狂い出す　いさお
善行を積んだ和尚が穴に落ち　朋月
暗闇に置いても光る善玉か　紀乃
善人の顔して並んでいる茅の輪　美智代
善哉が何より好きな夫婦です　ばっは
善は急げ手持ち時間はもうないよ　葉子
論語の国善と悪とはどうしたの　修
寝たきりの母も生きてることで善　見清
善隣の気運引き裂く赤珊瑚　誠一
総括は善戦だったタイガース　勝弘
善人と言われ小さく生きている　楓楽
反省は後回しです善後策　六点
善哉の季節になると太る妻　黒兎
道を掃くだけが私の功徳です　冨美子
閻魔様貴殿は善人だったのか　靖鬼
善人も札束見たら気が揺れる　茂
大岡の裁きは皆が善になる　妙子
善人の真似は出来るがワルはワル　忠昭
僅かでも善行重ね逝くあの世　俶子
善人の足音とゆく遍路傘　アキ
善人の顔で末席汚してる　靖鬼
縁の下の仕事ばかりをしてはった　恵子
善人のふりをしている薬箱　扶美代
命得ていくばくなりの善を積む　美籠
善にも悪にもなれずに部屋の隅　扶美代
善人の仮面を付けた詐欺師達　克己
佳
知らないで相談してた人に裏　裕之
善があり悪あり今日が暮れて善　はこべ
善行はまだ間に合いますか閻魔さま　たもつ
善と悪抱く人間のうらおもて　寿之
選り分けて温いものなら善意です　はこべ
人
聖戦というのは神よ善ですか　冨美子
地
善悪の是是非非を聞く耳二つ　寿之
天
一善もしないで飲んで寝てしまい　月子
軸
ぐつぐつと偽善煮込んで年を越す

兼題「季節」　籠島 恵子 選

フクシマの秋は語らず暮れてゆく　幸泉
病身に季節の風はすぐ届き　遠野
秋夜長しばし圭吾にのめり込む　隆彦

気がついたらもう年賀状書く季節　善純
千枚田の四季に追われる父の鍬　洋
春夏秋冬酒を愛でるに事欠かず　敏治
青春へ朱夏へと回る走馬灯　進
わたくしの秋を知らせる膝の乱　冨美子
ズワイガニ解禁ひとごとで終る　信子
一番先に季節感じる土踏まず　楓楽
立冬と聞いて気持ちを冬にする　かずお
セージ咲くもうすぐ妻の忌が巡る　耕治
温室のメロン季節を忘れてる　美智代
被災の地まだ灰色の季語を抱き　誠一
口ずさむと歳も忘れる四季の歌　則彦
皇后さま確かな歩み照る紅葉　美津子
この季節喪中ハガキが忙しい　としお
筋雲の端から端を路線バス　祥文
干し柿のすだれが囲む里のいろ　俶子
我が胸に季節はずれの雪が降る　朋月
関節の軋み聞こえる季の移り　(安)和夫
若者の衣服に季節感がない　玄也
気がつけば冬に駈足してる秋　修
世の乱れどうあれ四季に花は舞い　誠一
お日様が当る角度で知る季節　桃花
紅葉の動画が届く遍路笠　アキ
駆け足で老いの季節がやってくる　富子
多すぎる季節はずれは天の声　一文
わたくしの四季物語幕あがる　紀華
一枚のもみじ演出する白磁　理恵
すべり台下では冬が待ち構え　奏子
ハイキング紅葉の赤に癒される　壽美子
接吻の全てを秋のせいにして　奏子
季節風地球の息吹き受け止める　靖鬼
都市砂漠失われゆく四季の色　武彦
母はもう居ない母屋のもがり笛　いさお
寒さ暑さはこたえますけど良き日本　哲子
佳
臥す母も聞いてるだろか祭り笛　万紗子
歳時記の悲鳴聴こえて来ませんか　武彦
街角に包丁研ぎが座る秋　たもつ
平和とはたちえば春の暖かさ　はこべ
巡り来る季節の中にでんと居る　扶美代
人
シーズンオフなんてなかった若かった　堅坊
地
秋ですね雲のかたちもやさしくて　ばっは
天
通りすぎた季節光っていましたね　朱夏
軸
晩秋のかたみに石蕗を愛でる

兼題「省く」　西内朋月選

デパ地下で買った惣菜並べとく　雅枝
省略へ白紙の部分よく喋る　肇
省いてはならぬ笑顔とありがとう　恵
生かされて愛を省くと蹴まずく　岳人
ひと手間を省き省いただけの味　かずお
仲間から省かれそうでゴマをする　裕之
二次会に上司省いて盛り上がる　忠子
待つ時間省きたいのは拉致家族　信子
句読点省き迷路に入りこむ　光久
わたくしを省けばそれで済む話　扶美代
もう今はあれそれだけで通じ合う　能子
お化粧を省くとあんたどなたはん　楓楽
通訳が要る若者の省略語　俶子
金と暇無いが三食忘れない　紀雄
くすくすと笑うこけしに鼻がない　祥文
無駄なもの省くと広い四畳半　好
引っ越しは無理な歳だと省かれる　葉子
納得のゆくまで削る大吟醸　正春
特急の停まらぬ駅で待ってます　真理子
ロボットに人間省けと言われそう　桃花
脂身を省いたげてもまだ太る　アキ
不意の客ボクの食事が省かれる　眞澄
面倒を省くと呆けが忍び寄る　則彦
スタイルも見栄も省いて冬籠り　完司
人生にロマン省けば彩がない　瑠美子
悪友を省くと友がいなくなる　洋
省かれた人の心を推しはかる　みつ子
手間ひまを省けば女性口説けない　扶美代
主人には手間も時間も掛けません　行兵衛
家族会議いつも私は省かれる　かずお
省かれたのは本当の事言ったから　美智代
戦争をさせない努力省けない　はこべ
人間を省いてみたくなる地球　洋
ひと手間を省いた付けはきっと来る　アキ

捨てるだけ捨ててもエゴが捨てられず　行兵衛
誰が書いてもなんとなくチューリップ　祥文
死はむごい省けない人連れてゆく　日の出

佳

玉ネギを剥くと何にも残らない　武彦
無駄すべて省くとつまらないこの世　楓楽
省くから余計分からぬカタカナ語　則彦
建前を省けばわたし透けてくる　文代
豹柄は省かぬ飴ちゃんの儀式　克己

人

鱗みな削ると自分らしくなる　武彦

地

しがらみを省けば風も心地よい　能子

天

思いっきり省いて私鳥になる　蕉子

軸

省くから辞めねばならぬ永田町

兼題「こそこそ」　片山かずお　選

胴上げの横をこそこそ引き揚げる　洋
こそこそと再稼働へのお膳立て　正和
割勘でこそこそ飲めば負けてまう　紀雄
こそこそと危険ハーブに逃避行　宏子
税金を取られこそこそ吐くけむり　朱夏
こそこそと言うてはるけどいい話　扶美代
こそこそとしたら尻尾を掴まれる　キヨミ
整理してこそこそ隠すラブレター　壽美子
どこにでもこそこそ動く輩いる　勝弘
こそこそと内緒話の波が寄せ　靖鬼
こそこそと儲け話は声ひそめ　黒兎
夫は妻に妻は夫に隠しごと　千代
こそこそと離婚届を書く準備　則彦
言っちゃダメ内緒内緒の主がいる　加お里
寝てるまに泥棒入り出て行った　葉子
こそこそとしなくていいよ皆承知　正春
こそこそはしない心が寒くなる　能子
子の寝息聞いてこそこそ寄ってくる　進
こそこそとこの手いけない事をする　六点
講演会おばちゃん私語で嫌われる　(安)和夫
瀬戸際のここでこそこそ逃げないで　好
見抜かれていたこそこそもそわそわも　蘭幸
こそこそと礼を言われて怪しまれ　桃花
なんでやねんこそこそとするネズミ取り　としお
秘書のせいこそこそしてもすぐばれる　一文
命日を外し参りに来るおんな　保州
こそこそと一人の時に金かぞえ　紀華
こそこそと会ってた頃が花だった　修
貧しくてこそこそ食べたお弁当　茂
こそこそとして関心をひき寄せる　見清
こそこそとするから流れ矢に当たる　完次
列島にこそこそ冬がしのび寄る　黒兎
ジャンボ籤そっと人目につかぬ様　いさお
昭和一桁なぜかこそこそ食べる癖　扶美代
好き好きと炬燵の中の足が言う　美津子
こっそりと耳打ちされて期待する　唯教
こそこそと残り時間が逃げていく　富子

佳

こそこそは苦手野武士の血筋やで　(矢)五月
妻と医者　話は僕のことですか　篤
こそこその噂ばらまくのは妬心　ふりこ
神の死角でこそこそ鬼と手を結ぶ　洋
寝入るのを待ってこそこそパパサンタ　章子

人

こそこそと妻は上手に貯めている　篤子

地

姉と妹　母へこそこそ女の目　理恵

天

補聴器がこそこそ話聞いて病む　武彦

軸

血筋だな息子もこそこそが得意

兼題「釘」　江島谷勝弘　選

九条は平和支えるでかい釘　朝子
母という釘が家族をまとめてる　すみ子
打たれても誠を述べる釘である　キヨミ
単身地時々釘を差しに来る　哲男
ああしんど釘付けされて孫の守り　武臣
五寸釘役に立たないゴミ屋敷　美津子
釘一本使わぬ塔が倒れない　一歩
家造り釘は昔で今は糊　美津子
何言うても糠に釘です北の国　善純
戦争に釘打つ積り一票で　はこべ
イスラムの処刑を見ると釘になる　紀雄
二杯目はちょっと思案の妻の釘　満知子

夫より釘を打つのがうまくなり　千枝子
成績表釘づけになる社内板　壽美子
新築の柱に釘は打てません　日の出
なんでやねん僕のひつぎに五寸釘　(柿)和夫
浮気はええが本気は駄目と釘さされ　としお
滅茶苦茶に打ったら釘もヘソ曲げる　進
無理強いへ曲ってみせる釘の意地　洋
目配せで釘を刺したが無視される　(安)和夫
四人から釘煮貰って味比べ　忠子
丁寧に文字を書きなと釘刺され　忠昭
鏡台の奥で寝ている五寸釘　完次
部屋中を釘付けにする毒舌で　紀乃
パチンコの釘はいじわるばかりする　克己
土壇場でお袋の釘効いてくる　六点
午前二時誰かが釘を打っている　万紗子
糠床の釘が技成す茄子の色　妙子
鼻薬急所にぴたり釘が抜け　誠一
少しずつ釘がゆるんで老いてゆく　紀華
藁人形五寸釘でもまだ足りぬ　眞澄
釘一本打たれて私嫁になり　菜月
置き手紙釘がきっちり打ってある　瑠美子
新しい釘ちんまりとかしこまり　月子
釘裂きのこころを癒す膝の猫　富子
わが人生釘打つ一句まだ出来ぬ　たもつ
腹心の友に釘師のいる強み　敏治

佳

クギて言うたら金槌つけてくるもんや　朱夏
何本も釘打ちすぎてうとまれる　蕉子
もう来ない金釘流の年賀状　武彦
お隣へ抜けないように釘を打つ　耕治
憎しみのかたちに釘が打ってある　朱夏

人

ご先祖も短気だったと思う釘　祥文

地

五寸釘で繋がっている飲み仲間　完司

天

父ちゃんが打った釘だけ曲ってる　玄也

軸

絶滅の危惧種にちかい五寸釘

兼題「訛」　小島蘭幸　選

方言も地酒も遠い街に住む　すみ子
切っ先をぐにゃりと曲げる京訛り　理恵
訛とて貴重な文化遺産だろう　洋
同郷が僕の訛を誘い出す　玄也
大阪弁旅する人を和ませる　俶子
津軽弁リンゴのような温かさ　満作
ほっこりと昔ばなしを聞く訛　朝子
赤トンボお国訛りで出迎える　光久
国訛り元気出してる同期会　堅坊
今日からが冬だと訛囁いた　信子
マッサンの訛りは朝を花にする　岳人
嫁ぐ娘に教えておこう津軽弁　(安)和夫
国訛り逝くまで変えぬ母だった　克己
ローカル線の駅舎に染み付いた訛　いさお
ふる里の訛聴きたし栗ごはん　瑠美子
夫には山口弁でリベンジだ　月子
京言葉なんでも許しそうになる　眞澄
外国語喋ると河内弁が消え　玄也
ふところに訛あたため持ち歩く　篤子
訛きつうて江戸の人には勝てまへん　眞澄
等身大のわたしを出している訛　恵子

洋

留守電にお国訛のいい知らせ　美津子
痴話げんか河内弁ならすっとする　祥文
こけしですちょっと訛りがございます　耕治
いやだった訛の中へ今帰る　能子
生粋の関西弁のわたしです　誠一
源氏名で生きて遥かな国訛り　完司
慣れてきた大阪弁の「あほやなあ」　誠一
訛ではない道頓堀の中国語　扶美代
直さんでもいいと言われている訛り　信子
新米を送ったからという訛　希久子
シャボン玉ポンとはじけてでる訛　保州
訛まで関西弁の親日家　哲子
江戸っ子になってしまった娘の電話　理恵
初雪だより北の訛と降ってくる　いさお
ズーズー弁同士の口喧嘩凄い　保州
訛にも慣れためんこい嫁である　俶子

佳

朝市の訛ほんわか頬かむり　真理子
私から訛を消してなるものか

里帰りもう方言は出てこない　扶美代
群衆の中で訛が立ち上がる　蕉子
泡盛が静かに語る島ことば　寿之
人
路地裏にオアシス板さんの訛　（柿）和夫
地
フランス語しゃべる津軽の林檎たち　朱夏
天

京の椿はかんにんどすえと落ちる　古今堂蕉子

軸
ヒーローの訛はふるさとへ向けて

―――○―――

十一月までの本社句会皆出席者は次の通りです。間違いがありましたら、事務所まで申し出て下さい。（順不同）

足立　茂　安土理恵　油谷克己　居谷真理子
石田隆彦　市坪武臣　江見見清　江島谷勝弘
榎本舞夢　大内朝子　加川靖鬼　指宿千枝子
小島蘭幸　熊代菜月　黒田能子　榎本日の出
坂　裕之　酒井紀華　澤井敏治　太田としお
島田誠一　新家完司　関よしみ　奥田みつ子
遠山唯教　栃尾奏子　中村　恵　片山かずお
西内朋月　西出楓楽　藤井則彦　鴨谷瑠美子
坊農柳弘　水野黒兎　牧浦完次　古今堂蕉子
村上玄也　矢倉五月　山口光久　佐々木満作
山崎武彦　山田耕治　山野寿之　柴本ばっは
吉岡　修　鈴木いさお　飛永ふりこ
松尾美智代　山岡富美子　（49名）

高野山川柳塔碑合祀報告

十一月八日に第二十六回目の合祀法要を実施いたしました。高野山の朝夕は摂氏零度近くまで下がるこの時期でありますが幸いにして法要のお昼頃はかなり暖かな陽気に恵まれました。合祀対象は下記の4名様で、そのうち美作市の大石様のご遺族及び句友の方々総勢7名、また米子市の田中様のご遺族様2名の参加を頂きました。川柳塔社からは小島主幹、新家理事長、板尾相談役、西出相談役など10名の参加で総勢19名での法要となりました。主幹からはお亡くなりなったのは哀しいことではありますが、こうして多くの皆様とともにお参りできることは心の安らぐことでもありますとのお言葉をいただきました。読経の後、お坊様から塔碑にも刻まれている倶会一処の言葉の説明があり、粛々たる中にも暖かな雰囲気の合祀でありました。

法要後の直会は新家理事長の献杯に始まり歓談で故人様たちを偲び、それぞれの思いを胸に散会いたしました。

大石家のご遺族様から、田中家のご遺族南波様から、また句友の小林妻子様から合祀に対してご芳志を賜りましたことを報告させていただきます。（水野　黒兎記）

法要参加の方々」

合祀対象者

津川　紫晃様（松江市）
田中　亜弥様（米子市）
徳田ひろこ様（鳥取市）
大石あすなろ様（美作市）

俳句

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

高知川柳社（前々月分）小川てるみ報

傘持たぬ時に限って雨が降る　和広
ロザリオをチラチラ見せている乳房　哲史
困っても陽気な妻が居る安堵　典雄
困ったらおいで智恵なら貸しましょう　美々
困っても昨日に戻る道がない　千鳥
お賽銭はずんで神を困らせる　てるみ

川柳あまがさき（兵庫）加川　靖鬼報

のほほんとしてると幕が下りてくる　耕治
目に見えぬ電波に追われ手にスマホ　千代子
追わずとも遠くて近い黄泉のくに　咲貴
言い過ぎたしばらくそっと待ちますね　つな子
のほほんと生きて鬱なし金もなし　初音
私の生命線に安堵する　廣子
ありがたい今日も生かされ夢追い日　洋子
ぼろぼろにされても立派に通す意地　雪菜
追う方が追われるよりも夢がある　和子
のほほんと余命まだまだのん気者　柳明
追っかける袖にされたら白を切る　健二
のほほんと過ごした親子嫁が未だ　修平
足並みを揃えてばかりいませんか　ひとみ
孤独死を自慢の息子知らぬまま　純
お金より絶対欲しい若返り　富夫
大器かもしれぬのほほん期待され　野鶴
孫の手を引いて安堵の登下校　よしひさ
羽畳み庭の花愛でのほほんと　ヨシエ
過去帳に知らぬ法名二・三あり　野薫
にぎり箸それではお骨拾えない　靖鬼
熨斗袋外は立派もこの中味　五月
だまし絵の立派にいつもじらされる　晴美
慢心の天狗が鼻で法螺を吹く　歌留多
のほほんとしてりゃどこまで付け上る　祐康
威勢よく雨戸開けるなまだ五時や　正和
少年が追う夢の旅終らない　朋月
能書きが立派すぎると疑われ　哲男
勉強は負けるがいつも勝つケンカ　茂
お多福の母が与える安堵感　比ろ志
四つ折りの紙幣生活のぞかせる　美籠

川柳塔打吹（鳥取）野口　節子報

まな板の音が三・三・七拍子　芳光
ちょうど良い位置にあなたの胸がある　美ッ千
るんるんの裏には泣いた日がいくつ　美知江
爽やかな朝はるんるん深呼吸　龍枝
テニス王準優勝しるんるんと　貴恵
るんるんと出かけ帰りはとぼとぼと　芙美子
掃除済みるんるん一人お茶と菓子　悦子
秋風がそっと囁く腹八分　たけ代
歩道にも秋鬼やんまよろけとる　照彦
秋嫌いやっと夏痩せしたばかり　道子
ずる休み実りの秋は山学校　野蒜
自画像に痒い所を書き忘れ　重利
古傷を痛し痒しとしゃべり出す　善江
痒いよりヒトスジシマ蚊恐ろしい　紀の治
哲学を噛んで脳味噌ジンマ疹　芳山
痒いのか地球あちこちドカンドカン　紀美恵
褒められた頭の芯がムズ痒い　完司
夕茜俺のハートを真っ二つ　節子
流れ星取ってみたいな夕涼み　久芽代
夕焼けと燃えて命が尽きる蝉　みち子
夕日より赤く染まった初デート　滋
灯がともり人の気配がちらほらり　三津子
カナカナと夕日が夏に幕を引く　公恵
ジオパーク夕日を受けて仁王立ち　耕治
落日の後でこっそり混浴し　幹啓
伸びきった木陰で虫のすだく声　和子

ありがたやじじとばばとの夕ごはん　石花菜
夕ぐれはもののけたちの目覚めどき　玲坊
夕陽背にするとマカロニウエスタン　くにこ

和歌山三幸川柳会　武本碧報

緞帳が下りてゆっくり脱ぐ仮面　菜摘
譜面など皆目読めず歌が好き　義泰
カタカナのように面接固くなり　俶子
面白いはなしに耳も笑い出す　当代
体面を保ち積木が崩れ出す　富香
忍の字の中の仮面がはずせない　昭枝
表面はとても綺麗な黄信号　竜
仮面なら本音伝える事出来る　八重子
ケースバイケースの面を持ち歩く　ひろ子
お互いにお面被れば仲がよい　起世子
面倒をかけたねとだけ書いた文　千鶴
面食いの母に旦那が気に入られ　みね
土壇場で仮面を脱いだデスマスク　宏夫
ほこりかぶり壁に吊され笑う面　弘子
老いてなお走りつづけた設計図　美枝子
年波へテトラポットが姦しい　純子
好奇心燃やして老いを遠ざける　イセ
老いというビッグサイズの知恵袋　和子
老いたなと五臓六腑が鳴らす鐘　孝子
もう齢だとは言わせないその若さ　准一
愛される老い目標に紡ぐ糸　豊
気の抜けたビールへファイト振りかける　碧
気を吐いた頃の炎は青かった　次根
空気感染しますここだけの話　保州
逆境へ越える気力を熱くする　幹子
気にかけてくれる人いるのも強み　美羽
つき合ってみれば成程気が若い　絹子
前向きに生きる気力でボランティア　義雄
気は若いまだ嫁さんに嫉妬する　よしこ
内気だがここ一番のホームラン　かず子
お大事にと味気なく言う精算機　幸子
偽電話息子の声に騙される　美子
脳みそに似てる蕾の断面図　章子
百点の宿題ママの字に似てる　智三
海坊主蛸か鯨か潮騒か　昇

川柳塔すみよし（大阪）森松まつお報

七十年平和な国に住んでいる　勝弘
住む世界格差拡がる同窓会　典子
殺人鬼澄まして暮らす街に住み　昌紀
戦争は無いと信じて住む日本　(矢)五月
阿弥陀仏となえ浄土に阿修羅住む　靖子
初恋もみんな知ってる所に住み　篤子
災いを口で招いて狭く住む　すみ子
内に住む負けん気出せずあかんたれ　満知子

太田昭選

漁夫の利は追わず堂々競い合い　大輔
出る杭に狭い世間の風あたり　公恵
言いたいが聞きたくはない愚痴話　公平
人間の壊れる音を聴く恐怖　厚子
人間の顔に戻れる里の駅　辰雄
出来不出来みんなお腹を痛めた子　美恵子
優しさに触れた種から発芽する　集一
人間をまるまる生きる難しさ　盛夫
地方創生 古墳ばかりを掘っている　麦青
熱いから火葬は嫌と言っておく　すみゑ

佳句地十選（11月号から）

古今堂蕉子選

のほほんとしてると幕が下りてくる　耕治
出る杭に狭い世間の風あたり　公恵
アルバムの余白に青いままの恋　純子
火も水もくぐった父の腕時計　富子
運だよと努力の結果あしらわれ　華蓮
十字路をひょいとまたいでまだ元気　久絵
千年の杉しんと吸うしんと吐く　ひふみ
渦巻きの一番外で待っている　靖鬼
変わったな杖つく丸い影法師　重忠
脱輪もあった夫婦の五十年　仁

虹色に見えるあなたの暮す街　美籠
イタチ君どこに越してもついてくる　公平
主人の目優しさが住む私には　廣子
若い二人未来を語るワンルーム　舞夢
母になった嬉しい町に住んでいる　芳香
籾殻を燻す煙の這って秋　安代
煙たい人だ善人にちがいない　ゆみ子
煙たいが後からほめる鬼コーチ　(奥)五月
風にのせ秋刀魚の煙おすそわけ　志津子
喫煙のロマンと余裕罪悪に　啓次
今宵また貴男好きよとおだてられ　舞蹴
七人の敵にサービス届かない　日の出
大サービス美人に弱い八百屋さん　直子
サービスはタダと思っていた誤算　桃花
税サ込みなしで三食毒の膳　克博
お酌などしてみたくなる秋の宵　萠
サービスが過ぎた蛇足に落ち着かず　重信
水はサービス日本文化のすばらしさ　一歩
改革の名のもと福祉削られる　克己
川下へまあるくなってゆく小石　かりん
削られた山肌悲し土砂の村　紀子
削りたいおなかとおしりダイエット　美世子
かつお節削り豊かな朝にする　温子
言ったこと削除するのにキーがない　妙子
キンピラの牛蒡削る手香り染む　福貴子
荒削りの円空仏にある温み　シマ子
秋晴れの湧き立つ歓声運動会　安昭

岸和田川柳会（大阪）　佐藤　幸子報

神様と太いパイプをもってます　昭
人生を太く短くマイペース　益祥
シャボン玉童話の世界広げゆく　和美
慕ってた人は他人を慕ってた　喜代志
万華鏡見果てぬ夢のファンタジー　幸子
頷いてくれたたったのひとりでも　ダン吉
寂聴の話に心洗われる　隆昭
頷いて涙分け合う妻と居る　大輔
幻想曲聴いてまどろむ僕と猫　珠子
ちょっと凭れる太い人脈　紀乃
ハリーポッター善くもここまでファンタジー　弘子
神経の太さメジャーで測ろうか　房惠
アルバムの中にときめく一ページ　正幸
ハンドルが虹の真下に差しかかる　三成
ランデブーファンタジックな夜でした　みつ江
聞きとれぬことに頷き母送る　義泰
ファンタジー映画の中に浮かべてた　失名

川柳塔おっぱこ吟社（香川）　川﨑ひかり報

メモ帳に今も生きてる亡母の味　よしみ
万歩計ずっと休んだままでいる　初恵
少しずつ荷を軽くして坂のぼる　いさむ
躓いた石に油断を諭される　弘
酒タバコ金を使った気がしない　放任
担い手のない廃屋に柿たわわ　ひかり

竹原川柳会（広島）　古田　太虚報

玄関が開くと孫が飛び込んで　汎美
じっくりと心を開く話合い　房子
畳紙を開くと母の愛零れ　淑子
窓みんな開いて告白を待つか　蘭幸
開き戸をあけて秋の色をよる　栄恵
産声の翼を開く小宇宙　幸子
私を開いて五七五に並べ　比呂子
折鶴を開いてらくにして上げる　静風
真正面の名前へ投票するつもり　笑子
人気取り女史の名前が多すぎる　白狐
ひらがなの名前に女の愛がある　鬼焼
情熱は一期一会の祝い酒　規代
熱燗で一杯飲んだ父笑顔　半徳
側にいる夫の熱源アルコール　京子
存分にお泣きなさいと熱いハグ　慶子
母さんのおデコ愛の体温計　輝恵
森羅万象太陽熱に生かされる　千代美
年金の話平熱以下で開く　力
恋の微熱が二十五時間続いている　寛

煮えたぎる闘志アスリートは寡黙　敬子
被災者の願いカープ勝ってくれ　歩美
見事な満月だお腹すいてくる　あゆみ
見上げればいつも優しい母の月　厚子
寝る前の水一杯の明日がある　栄香
父の句に我が家の歴史と未来がある　史子

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

しつけ糸つける間もなく娘が育ち　柳子
喪が明けて静かにほどく赤い糸　黙人
糸口を掴む手立ての難しさ　洋子
無口な子糸電話では弾む声　初枝
大宇宙描いています蜘蛛の糸　井蛙
とつとつと寡男繕う木綿糸　きよし
絹糸をたどると里の桑畑　劦
一の糸ここぞと捌く津軽三味　則彦
夜ふかしが公認された大晦日　規子
のれん街うずうず歩く妻の留守　花匠
決勝のテニスボールは眠れない　隆樹
すでに秋うずうずしてる山紅葉　ひとし
後期高齢者なって気が付く文学心　呑舟
今になり埋めた初恋芽を出した　一湖
その時は三途の河で賄賂だす　一呑
投函後今更遅い誤字脱字　美鈴
亡父の背の大きさを知る通夜の席　慕情

電害でりんご豊年露と消え　京子
大漁の旗がたなびき海豊か　小とみ
生きて生きて豊な地球見てやろう　龍馬
秋餅の杵音響く過疎の村　つとむ
何もない村に豊かな樹のにおい　芳生
四苦八苦出した答えが変わらない　龍人
客が去り静かな波に乗る二人　ふさゑ
底辺に生きてくわえる爪楊枝　花峯
ふりむけば　輪廻の風の吹くばかり　氏加子
ひと一人許して風に逢いにゆく　五楽庵
父親に君は誰だと名を問かれ　一花
本当の休息　雨の日曜日　霜石
経聞きてあちらこちらで鼻啜る　雅城
揺れながら儀式のように米をとぐ　和香子

南大阪川柳会　津守　柳伸報

返しなさいにぎり締めんと政調費　勝弘
誰に似た器用に足で扉締め　正春
朝帰りしめられている何処もかも　あさ子
締めた筈の蛇口が喋り歌いだす　とーな
有頂天笑い袋が締まらない　楓楽
あかんたれマイナス思考なおらない　恭昌
年金でマイナス暮らし綱渡り　修
猪口二杯マイナス思考すぐ消える　いさお
遂に赤字世界をリードしたソニー　祥昭

マイナス掛けるマイナスなんでプラス　昌紀
マイナスも有って人生味が出る　更紗
煩悩を捨てると空が広くなる　郁夫
恋の数失恋引いて今の妻　歌留多
尿酸値マイナスにした発泡酒　東風
手作りで遠来の客おもてなし　シマ子
料理本沢山持たせ嫁に出す　忠昭
今年こそおせち料理はせず旅行　柳伸
日中韓料理で競うだけでよい　一歩
登っていた坂がだんだんつらくなる　庸佑
つらい足まけぬ老いの字踏み歩く　タカ子
つらい事口には出さず耐えている　ルイ子
辛いのは怒られるより怒る方　篤
アト一球叫んでいたらホームラン　和雄
よそ様と比較するからつらくなる　なぎさ
体重より重い荷物を持たされる　栄子
甘辛の人生楽し金婚譜　たもつ
活躍のモンゴル力士見る国技　弘子
親子鷹夢は五輪の金メダル　直子
五輪まで生きて喝采するつもり　志華子
五輪旗のように世界は手を繋げ　克己

高知川柳社　小川てるみ報

忘れよう忘れようとて残る悔い　てるみ
遠ざかることはできても忘れない　哲史

飛行機の中で気が付く忘れ物　圭二
老化とは思いたくないもの忘れ　千鳥
満ち足りて飢えを忘れた罪と罰　ふき
忘れると言う特典で老いてゆく　美々

川柳ふうもん吟社（鳥取）夏目一粋報

悪の根をこぐと賄賂の数珠つなぎ　洋々
OBという肩書きにない序列　無限
今朝もまた女の愚痴を聞く鏡　麗
覚えたらさあ手話カフェへ出掛けよう　房江
言い過ぎた今日は眠られそうにない　天翔
人間を手と手でつなぐ手話がある　美佐枝
あれと言えばあれが出て来る妻の勘　雅女
手話学ぶ誰かの役に立ちたくて　みゆき
日本は負けはせんよと言って負け　清信
元彼がOB面で寄ってくる　金祥
大輪を夢見て小さい苗をこぐ　節子
観光は手話でとっとりおもてなし　善平
こぐ草の生きる命か根が深い　とも湖
加齢ですと診断されて礼を言う　蟹郎
手話習い私もしようボランティア　凱柳
生きているOBが守る靖国　のびる
御釈迦様手話もできます嫁にして　菊乃
おくやみにOB一人消える過去　行男
保育園手話のお遊戯すぐ覚え　千枝子
負けはせん家には強い妻が居る　地佳平
手話の指月が影絵にしてくれる　一瑶
丸福はスタバなんぞに負けはせん　隆浩
宿敵もまだ息災だ負けはせぬ　美恵子
派手に生き地味に逝きます家族葬　振作
経文の一字一句に無駄が無い　秋月
老いて死ぬ当たり前だが忘れそう　圭一郎
OBの年金カット許さない　末春
手話を見る子等の瞳に嘘はない　毅
テレビでも同時に手話でありがたい　幸子
今日よりも明日へ大きな穴を掘る　清帆
松葉づえ階段前でふと迷い　孝二
牡丹にも百合にも遠く老いぼれる　昌鼓
さよならも手話で伝える思いやり　回春子
補聴器の電池切れても手話がある　妻子
ドングリのようなOB慕われる　一粋

※「こぐ」は引き抜くの意

富柳会（大阪）古田千華報

保護色になって噂の輪を抜ける　千恵
わがままはもう許せない鰯雲　高鶯
大空へ飛び立つ為の羽繕い　伸雄
パワースポット噂が囲む気が囲む　アキ
北斎が世界遺産にした富嶽　正治
聞き耳をたてて桜の愚痴を聞く　彦次
風説におんな三人溺れてる　登子
息が合い怖さ忘れたシンデレラ　千華
空白が埋まらない日にある本音　寿之
天職の鍬でロマンの土を打つ　欣之
空間を埋める自分に問いながら　慶子
持ち時間指の隙間を抜けていく　未知
背伸びして父の企みまで届く　静子
風説に惑わされない唐辛子　佳子
紺碧の空を彩る花水木　壽峰
婆ちゃんの知恵を信じる信じない　武人
布団干しあたふた仕舞う俄雨　文重
空席へどっしり座る虚栄心　奏子
悪巧みざっくばらんに責めてくる　惠
青空は終の頁に塗るつもり　よしみ
てのひらの窪みに生きてきた証　紅紫朗
思慕一途あの大空へ叫びたい　和子
気持ちでは負けない何処の誰よりも　七朗
暗転はエンマに媚を売ってから　仁
ひまわりが一番似合う空の青　よりこ
風説を連れて戻ったブーメラン　信子
風説に迷う事なくネジを巻く　澄子
拝啓と書けば文字まで畏まる　常雄
STAPに取り乱された学者たち　清
山積みの苦労話が骸を脱ぐ　森子

川柳塔なら坊農柳弘報

黒幕のもずに仕置きを依頼する　喜太郎
家事労働老齢手当貰いたい　萌子

隠し場所忘れたもずの認知症　薫
二次会は百舌勘定でエスケープ　紀雄
竹割った性格だけに浮き沈み　貫一
竹箸で愛の欠片をつまんでる　郁夫
母さんの温もり貰う里帰り　弘風
着やせした女嵯峨野の竹の道　ばっは
足湯にて生きるヒントがほんわかと　ふりこ
かん高いもずに威嚇される俺　怜依子
比べれば利き足五ミリほど長い　勝弘
砂浜を裸足で駆けた若かった　洋子
ソプラノでつんざく百舌の自己主張　仁
汗水のおかげ秋の収穫祭　將文
砂浜を裸足で駆けた青春譜　恭昌
百舌勘定重ねどでかいビルを建て　富子
幕内を目指しすり足四股を踏む　比呂志
竹割った気性過去には拘らぬ　克己
天国へ階段登るのは裸足　完次
その先の修羅は語らぬ竹の花　柳弘
竹槍へ洗脳受けた日の記憶　堅坊
もず鳴いて二人の闇を深くする　柾子
太陽が味方裸足のプロポーズ　惠美子
貰うなら大きい方と決めてます　修
どん底で貰った藁に救われる　辰雄
最上の靴は裸足の履き心地　順啓
相伝の茶筅が刻む里の風　成子

青空に貰う勇気と活力と　朝子
ガンバレに元気を貰うかすみ草　寿之
海越えて臓器を貰う愛貰う　國治
故郷を捨ててしまった竹とんぼ　日の出
天高くもずに負けない妻の声　惠美子
青空も恋も切り裂くもずの声　理恵
こおろぎに秋をもらっている夕餉　保子
あなたには足の裏まで見せました　真理子

川柳ささやま（兵庫）　**北澤　稠民報**

慌てない苦手の階段手摺り杖　美緒子
糠床が物言うのです茄子の色　純子
後期でもチャレンジの旗降ろさない　哲男
だまされて幸せだった時もある　稠民
日溜りに羽毛のようなひとといる　真由
思い出はたのし美し秋夜長　多美子
まずは古稀元気で一年頑張ろう　開子
目が耳が足が時代に従いて来ぬ　可住
棚の上バランス悪いものばかり　かほる
大根蒔き体調少し晴れたから　幸子
坂道で栗が落ちてるころころと　ちかゑ
漬物に緑茶を添えたおもてなし　照代
目の毒と横目を使う厚化粧　勇

川柳塔鹿野みか月（鳥取）**福西　茶子報**

冷凍で干柿優雅デビューする　孔美子

がやがやと乱れる列の登下校　咲和
孫を守り痛い痒いを忘れさせ　㈹和子
四季が今乱れ乱れて過ぎて行く　すみれ
身の丈のラッキーでよし今日も無事　弘子
いい月だ影もぴったりついてくる　美ッ千
柿の種大志を抱いて地に埋まる　盛桜
妻というラッキーカード持っている　小鹿
ひとつだけぴったり合って暮してる　鈴
彼岸花野心にもえて咲き乱れ　八重
落下する柿にカラスもそっぽ向く　実満
ニッポンに暮すラッキー忘れまい　茶子
ラッキーな出合い芒の穂が招く　照彦
雨あがりラッキーだなと畑へ行く　かおる
激怒したマグマへ山が乱れとぶ　みさ子
年金に合わす食事で医者いらず　満
手のひらをぴったり合わせ感謝する　蟹郎
ぴったりと寄り添い生きるうちが花　恒
動悸打つ医者が呻った検診表　いさお

川柳茶ばしら（愛知）　**関本かつ子報**

急いでもゆっくりしてもカタツムリ　雅美
月の出を待てぬ団子の数が減り　まみ子
隅っこが一番似合うボクの席　遡行
会場が一体になる塔まつり　美千代
偏差値が邪魔をしている志望校　百合

御岳が見える所に住み悲し　かつ子

川柳塔さかい（大阪）　村上　玄也報

ありのままさらり言われてキズになる　素頓馬
都合上郵便物は亡夫の方　澄　空
アベノミクスさっぱり家に効き目ない　憲
収穫の都合も聞かず来る豪雨　和　幸
朝早く咲いた朝顔几帳面　わこう
アイデアは逆立ちしたらきっと出る　みつこ
都合上忘れたことにして収め　俶　子
ああご免催促されて気が付いた　光
野の花に習う事さえたんとある　ヨシ枝
マッサンの嫁日本丸ごと習います　八千代
あと先に酒と薬が効いてくる　誠　一
習っても忘れる歳が来てしまい　日の出
ゴールまでずっと生徒で行くつもり　ゆみ子
良い所へ来たとさっそく使われる　かりん
愛あれば淋しくないと綺麗事　唯　教
アルバムに歳月耐えた絆あり　雅　明
上司だけ都合よい日で宴きまる　永　久
べったりと座りよいしょと立ち上がる　和　夫
都合などお構いなしの休火山　憲　彦
都合など聞かず母ちゃんみな決める　さくら
人の都合でサイコロ型になる西瓜　敏　治
都合よくそば屋見つけた肚の虫　朋　月
べったりとされてうれしい鼻の下　清

花が咲く人の都合は聞かぬまま　篤　子
習いごと生活助ける羽目になり　舞　夢
百歳の艶見習うこと幾多　好
都合よく行きすぎるのも気味悪い　としお
人間の都合で四季のない野菜　ひろ子
濡れた諭吉ガラスに貼って剥がせない　愿
お誘いは相手次第で都合つけ　世紀子
明日また探してみよう今日はやめ　時　雄
奢りなら都合は何としても付け　玄　也
習うより慣れろに時間もう足りぬ　五　月
今さらと思うが孫に習ってる　月　子
お父さんみたいになると酒をやめ　天　笑

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

花火あげ今の幸せかみしめる　万津江
欲ここら満足の線引いてみる　純　宏
菩提寺も移し住みつく妻の郷　和　之
好かれたか私にトンボ従いて来る　陽　子
帰省する子へ山盛りのごはん入れ　葵
目標はとても元気なおばあちゃん　由　美
困ったなスランプなのに檄が飛ぶ　真　帆
眉引けば少しは若くなって見え　茂　子
積み重ねた時があるからビビらない　章　子
梅雨空に新旧の傷痛み増し　みどり
もて余すピアノ手放しベッド置く　水　樹
月も星も花火に席を譲ってる　美恵子

つながっている空つながらぬ平和　和　郎
力ずくとはつくづく芸のないことよ　真　由
話し下手聞き上手だとほめられる　亜　矢
節電の暗い階段踏みはずす　恵美代
後悔をしないよう今逢っておく　信　子
今日生きる朝の空気を窓に入れ　嘉　子
忠告を聞かず古傷開いてくる　三　郎
台風のニュースステレビが壊れそう　敦　子
お小言を最も鈍い耳で聞く　慶　一
他人様の痛みに鈍くなるなかれ　真　青
想像におまかせ齢は言いません　菜　美
お隣の犬に留守番たのみこむ　和　代
古くても憲法だけは変えさせぬ　一　眸
年齢が勝手に先へ飛んでゆく　遊　子
ため息の向こうに高い山がある　公　弘

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

行先は仏の世界南無阿弥陀　實
はぎすすきくずおみなえし部屋の数　高　明
さようなら私を鬼にさせる人　蜂　朗
サヨナラで優勝の酒は格別　松　風
五年間全く同じ置き薬　四　郎
腰まげた人見て感謝わが腰に　節　子

きゃらぼく川柳会（鳥取）政岡未延子報

青空の雲の流れが秋を呼ぶ　登美枝

曾孫らにあえて嬉しい恵比寿顔　敬子
とりあえず眠りたいから又明日　ゆめ子
草むらのこおろぎ鳴いて急に秋　あや子
大山のタイマツ行列はじめてだ　かね子
川柳吟腹の内外まるくなる　美佐子
転ぶなよ風邪引くなよと母に声　幹啓
薄れゆく愛を補う熱いお茶　未延子
神と傘屋の裏取り引きか雨止まず　寿々子
独り身は賞味期限に食べ切れぬ　初枝
八十路きて自炊の味がしみてくる　正二
十五夜にやっと薄が穂を出した　ゆき
人の道転んで気付く事もある　恵子
気にするな誰ももってる脛の傷　宏之
にんげんの人生観にある微笑　瑞枝
腹の虫治まりつかずもう一杯　ひろし
仕送りは昔子がしたものだった　公一
この夏の太陽意地を忘れたか　卓雄
退きどきを失い秋と向かい合う　千代
うっかりが日毎に増えて老いを知る　紀の治

倉吉川柳会（鳥取）　**竹信　照彦報**

柿色の不老長寿のおばあさん　石花菜
秋である一番柿にスズメバチ　次男
渋柿も合わせて食べる人の知恵　雄大
ヘルシーで旨いものをと腕に撚り　玲坊
ヘルシーと聞けば何でも買いまくる　鬼一
ヘルシーと言えばサプリがよく売れる　風露
飽食がヘルシー暮らし邪魔をする　智恵子
残高が減って日毎にヘルシーに　野蒜
昼弁当ヘルシー食の食べくらべ　美知江
拉致問題煎じきれないもどかしさ　由紀子
人の道煎じる程に釈迦説法　祐子
ストレスを煎じ詰めたら金欠か　重忠
親の爪垢煎じ飲む天下り　日出子
自然力煎じ詰めれば恐ろしい　けいこ
油断して煎じたようなおみそ汁　悠子
便利屋も老いの代わりはしてくれぬ　康子
太っても痩せても便利ゴムベルト　英子
便利さに慣れて動かぬ知恵袋　萩江
便利でもパソコン使えぬもどかしさ　酔芙蓉
歯が抜けた入れ歯でスルメ食べられる　紀美恵
便利さをコンビニで買う世の中に　瑞子
便利屋で嫁を使って逃げられる　照彦

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

原子炉の話になると煙り出す　紀久子
禁煙家夜の酒場で味おぼえ　佐一
煙に巻くことも上手になりバッジ　克子
残り火の詩は煙かまた華か　徑子
元彼のこと聞かれても煙に巻く　英子
世渡りに噂の煙立ち込める　准一
心の眼事実しっかり見極める　和香
帳尻を合わすと事実転げ出る　泰女
何もかも口にチャックをして事実　寿子
ヨガの波ひたひた脳に効いてくる　小雪
やるよりもヨガは見ている方がいい　大輪
ミッキーの何処かが違う遊園地　秀子
比べれば誰にでもある良いところ　よしこ
どこまでも私は私変わらない　ほのか
それぞれの個性私は怯まない　冨美子
比べれば子猫が虎になっていた　紀子

ローズ川柳会（兵庫）　**亀岡　哲子報**

虫の音に囲まれていた遠き日よ　いわゑ
公園を蚊に明け渡す大東京　てる
花野来て昔の風とすれ違う　年代
大空へ校歌を謳う秋の章　哲子
泣き虫はふっきったはずなんですが　義子

ほたる川柳同好会（大阪）**水野　黒兎報**

リニューアル記憶の中にある母校　純子
バケツ持ち立った廊下は寒かった　正子
廃校になって学校懐かしむ　黒兎
ラッキーセブン風船乱舞甲子園　柳童
大勢の見舞いの顔が宝物　美佐子
生まれたんだね可愛い服が風に舞う　正代
舞うように娘は恋を語りだす　順子
舞い落ちた蝉を小枝に掛けてやり　長一

好きな道てんてこ舞いも苦にならず　郁子　勝
華やかな話題振り撒き逝った人　桂子
端にいて輪の真ん中に行く勇気　久子
ハーイハイわたしにそこをいわせてよ　信男
博士でも判らぬ事がいっぱいだ　春代
はいスダチわっと広がる良い香り　美智代
はるかなる轍の後を行く日暮れ

長柳会（大阪）　坂上　淳司報

銭湯に生きていました浪花節　淳司
五右衛門風呂亡父の笑顔が浮いている　一文
風呂の湯を占めて与えて知る道理　辰男
贅沢になれた体に爆弾が　幸子
集合写真いつも遅れる二三人　正博
番台にイケメン座る風呂屋さん　たけし
風呂場から鼻歌聞え明日が来る　ひろこ
お互いを繕い合って金婚譜　和代（針）
不器用で縫う宿題は母がした　もこ
湯に漬かる我が身切なく老いて秋　正子（穂）
九条が光り過ぎても差し支え　弘光
病得て知る健康の有難さ　輝子
山頭火歩いて来そう露天風呂　芳野
夢を追うルーキーたちの涼しい目　久美子
縫い代がとれず暮らしがほころびる　克三
ネオンにはすっと引かれる病気持ち　隆彦
習慣病油断するなと万歩計　孝代
休みなく心臓弁は冥土まで　靖博
終い風呂母さん何時も有りがとう　マサ
風呂にまでスマホ持ち込む依存症　篤
傷心を縫って癒した手の温み　直樹

はびきの市民川柳会（大阪）永田　章司報

こめかみに電流走る日のニュース　みつこ
戦する神よ疲れていませんか　ダン吉
きりきりとリールが唸る竿頭　洋一
そよ風が吹いてこだわり捨てる気に　さくら
懸命に泣き満腹で熟睡す　獏杏
心が痺れる歌に出会えて幸せだ　雄太
ぐっと我慢きりきりと胃が痛む　シルク
きりきりと胃が痛み出す待ちぼうけ　フジ
芋ご飯三杯元気な胃が悲鳴　登志子
後五日いつのまにやら締切日　千鶴子
コーナーに喚声あがる運動会　美喜
もう少し生きて曾孫抱きたいな　敏
きりきり舞いしてます孫の子守り歌　ヨシ枝
ベテランも舌を巻くよなこの強さ　真一
面接にきりきり痛む胃のあたり　ちづる
一点差歯をきりきりと悔しがる　庸佑
一を聞き瞬時に十も解る人　美代子
古稀きてもしびれる人が二三人　かつ美
ベテランの腕冴え渡る筆の跡　久仁子
ご無沙汰の墓参を叱る千の風　いさお
トラブルをまるくおさめる年の功　章司

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

洋服にブラシをかけて靴を履く　幸
品性を磨くブラシが見当らぬ　弘充
一刷毛で青空に描く街の地図　草庵
電動のブラシで磨く総入れ歯　繭
朝一番ブラッシングで目がさめる　紗季
歯ブラシでよくみがいても歯周病　輝山
戦って来いブラシを掛けて送り出し　幸代
生きてますグリコのおまけ的未練　芳山
ストローの先に残っている未練　桂子
ひねられたままの雑巾未練げに　ゆき
歌麿の美人画はみな裾未練　哲子
ゆらゆらと未練が浮かぶコップ酒　ちえこ
返さねばならぬ命だ汚せない　淞丘
恩返しまだまだ続く急がねば　昌枝
大切な返事遅れてやってくる　美智子
木の箱にあふれる愛を入れ返す　柳歩
恩返すつもりで押した重い判　澄子
返答は五分咲き辺り萩の花　とも子
人間のエゴに返事をする地球　久絵
三つ目の返事でやっと腰上げる　たけし
刻去って返す言葉はありがとう　知恵子
べたべたとポマードつけて黒光り　禮子
べたべたと靴も酔うてる千鳥足　幸子

納豆とオクラと山芋健康志向　俊子
べたべたと湿度が攻める闇の中　雪代
草履べたべた昨日のわたし踏んでから　博子
思い出がべたべた貼ってあるタンス　青帆
孫台風去ってゆっくりする昼寝　千里
台風に睨みをきかす鬼瓦　左余
じゃじゃ馬のような私も台風も　寿代

岩美川柳会（鳥取）　石谷美恵子報

寛一お宮月がなければ絵にならぬ　蟹郎
地球見て月の兎も泣いている　圭一郎
このようになれと真ん丸お月さま　完司
一時間見つめられ月赤くなる　節子
野良仕事月は今夜も味方する　菖子
めぐみさんきっと見ているお月さま　天翔
妻の座にとぐろを巻いているのです　一瑶
神さまの死角で巻き添えにあった　一粋
病む妻よ銭のことなら案ずるな　重忠
出雲では居心地のいい五円玉　幸安
銭金じゃないと言いつつ金で折れ　たぬ
田んぼより銭金欲しい子は五人　敏子
親切を煎じてみれば銭の音　茶子
沈黙の中で激しく策を練る　清帆
人を呑み激しく山は煙吐く　弘子
お月さままた失言を悔いてます　美恵子

城北川柳会（大阪）　近藤正報

柔らかく芯のある人友に持つ　杁香
秋刀魚喰い夏ばて消して秋を待つ　縣筰
その先の修羅は語らぬ土瓶蒸し　柳弘
宇奈月へサンダーバードフルムーン　正
曖昧な態度で魂胆悟らせず　求芽
また会えるラッキーな日を信じてる　修
芯外し毒矢放っている情け　郁夫
満ち充ちて明日に輝くマタニティー　直樹
サービスをするねと酒が二本でる　一歩
魂胆で振り回されている拉致家族　公平
何かある掃除洗濯する夫　五月
歎異抄に学ぶ終章のかたち　いさお
泣ききって心機一転次の恋　和夫
魂胆を顔には出さぬ蟇　たもつ
都度つどに染まる私の処世術　美智子
柿すだれ風に染まって陽に染まる　志華子
手土産に何かこんたん有りそうで　あさ子
魂胆を恥じる善人との出会い　朝子
すっきりと晴れてテルテル得意顔　実
二人なら哀は半分喜は二倍　克己
すっきりと背筋伸ばせば佳い男　高志
歴史繙き源氏の君と添い寝する　武彦
芯までも齧りたくなる美味い梨　倫子
今のうち四季をしっかり賞でておく　ルイ子
腹割って話しすっきり真の友　賢子
出るものが出ればその日は快調だ　勝弘
子の魂胆だまされましょう知らぬふり　千恵子
染めむらを補い合って老夫婦　公子
神の名で血に染められて泣く地球　堅坊
魂胆があるなやたらと低姿勢　満作
芯探し透かして見てる万華鏡　麗
体操の金はバランス崩さない　義昭

川柳大阪　森松まつお報

秋さんま匂いはいいが煙たいよ　照月
なんでやねん折角来たのに延期とは　公平
お洗濯なんで貴女のパンツまで　信酔
なんで言う済んだ話に屁理屈を　かよこ
泡を吹くビッグマウスに釘を打つ　焦子
紅葉の神山ズドーンと暗転に　司
この先の修羅は通さぬ針の穴　柳弘
耳の穴楽しい話だけ拾う　万紗子
ジーパンの穴ほんとうは寒いのよ　まつお
消費税庶民の財布穴あける　紀雄
ことさらの強気の裏のあかんたれ　朝子
百歳はクリアするぞと医者梯子　(矢)五月
内弁慶家では強気うちの子は　美世子
泣かないで強気で生きて行く私　和
アスベスト強気の国が負けました　一歩
御嶽山いきなり噴火逃げ惑う　珠生

古希すぎて焦る事ない白寿まで　(奥)五　月
着替え中焦りまんがなどなたはん　美　濃

あかつき川柳会（大阪）　山本　昌代報

痩せるほどつらい思いをしたんだね　康　信
花園でドレミの歌を唄いたい　忠　昭
ひとり旅気の向くままに風の中　直　子
花は散った痩せてもすすき詩で生き　たかこ
ひとすじの煙が帰る秋の天　のぶ久
私の手をするりと抜けて逝った人　美智子
やりました青く輝くダイオード　生　枝
小太りのイエス十字が切れますか　とーな
美食家を縛る血糖尿酸値　和　雄
ノーベル賞ぐっと身近かにＬＥＤ　富貴子
イプセンが書けば白蓮物語　鈍　甲
送り火の煙へ遺児はいつまでも　穏　夫
リバウンドを何回したかおしえない　信　子
信号機ノーベル賞に花添える　紀　雄
九条のもと花園も咲き誇る　朝　子
花園で育ちサンマは焼けません　一　志
花園で迷子になーれ二人連れ　堅　坊
痩身の恩師に会った秋の宵　たもつ
校庭の花の手入れは無口な児　克　己
のびのびと泳ぎたかろう金魚鉢　美　花
その先の修羅は語らぬ金縛り　柳　弘
権力はすぐに異分子だとくくる　三　成
こころまで痩せましたマイナス指向　キ　キ
やせ細る地に豊穣の蕎麦の花　信　二
ご町内うなぎの煙うちですぞ　篤
成果主義ヒューマニズムが痩せてくる　敏　子
辻つまを無理に合わせて煙に巻く　大　輔
基地のあと世界の花で満たしたい　隆　昭
煙幕を張って悪事の頬っ被り　壽　峰
煙っぽい街よ夕陽が病んでいる　瑠美子
束縛を受けて盆栽曲げられる　秀　夫
秒針に束縛されて駅に着く　紀　乃
王様を除けばみんな痩せている　ダン吉
借地料基地からもらう痩せた豚　楽　生
信仰の山に無慈悲の灰が降る　いさお

サークル檸檬（大阪）　松尾美智代報

一触即発逝くまでそっとしておこう　房　子
運命に逆らったのか流れ星　いわゑ
頑固にも運命論は否定する　哲　夫
人類の運命握る核ボタン　たもつ
金平糖やがては丸くなる運命　昌　紀
何事もない一日の幸思う　久仁雄
一呼吸おけば大した事じゃない　光　久
人生の最後を舞っている紅葉　美智代
中の吉ぐらいが丁度よいのだが　扶美代
てにをはの一字運命狂わせる　希久子
答えまだ出ぬままに又陽がのぼる　智恵子
立ち位置は心得てます風のまま　義　子
方法はいろいろあるが自分流　みつ子
運命の女神が妬くとおそろしい　楓　楽

六甲川柳会（兵庫）　市坪　武臣報

泣き虫になった老母の髪撫でる　敏　夫
ふる里の駅で自分を取り戻す　武　彦
山の駅列車待つのは蝉しぐれ　道　子
恋してたゼロ番線があった頃　和　宏
里の駅母の振る手が遠くなる　美恵子
駅を降り暖簾くぐればボクの駅　茂
セピア色改札抜ける赤トンボ　博　史
地図からは見えぬ景色を巡る旅　浩　司
旅立ちの涙は駅に捨ててきた　宏　造
仕事の虫だった昔を懐かしむ　武　臣
麺にはね薬味利かせと通の亡父　弘
励む子にあついうどんと秋夜長　文　香
地図開き写真見てると旅が呼ぶ　勤
半分こ大きい方に愛がある　利　子
古稀なれど出合い恥ずかし気の弱さ　洋　一
嬉しさを十指に込めて手を合わす　照　子
秋のバラ恋の衣をぬぎすてて　夏　子
世界地図壁一面で夢めぐる　邦　子
カーナビは無いが隣りに妻がいる　康　子
待ってますくわしい地図の転居便　(大)和　子
愚を守り蜩生きた淡淡と　盛　夫
布団に地図画いた息子も二児の父　忠　貞

地図にないけれど記憶にある母校　和郎
バージンロード歩む娘の始発駅　千賀子
子の地図に母の矢印多すぎる　能子
運鈍根しっかり掴む明日の地図　無限

翠洋会（大阪）　佐々木満作報

センセイという役者揃いの永田町　恭昌
最後まで役者演じてデスマスク　げんえい
花道で大見得をきる馬の足　昭
母とした約束だから破れない　みつ子
次会う日それが生きがい恋最中　すみ子
約束をいっぱい残し逝かはった　浩二
果たせない約束ばかり蘭香る　千歩
ものさしで測れぬ人間の値打ち　満作
女というものさし捨ててから気楽　希久子
一本の物差しで人裁くまい　楓楽
損得で物差し変える小市民　桃花
ものさしをはみ出し冷えた風にあう　弘子
人がみな同じものさし平和な日　公平
それぞれにものさし反目しあうこともなし　理恵
萩すすき挿して佛間が秋になる　志華子
針千本呑む気でしょうか再稼働　眞澄
うれしい日一合だけで物足りぬ　捷也
私生活舞台と違う顔を持ち　舞夢
義理あって印鑑を手にまだ迷う　照子
讃えたいＬＥＤの立役者　和夫
白鷺城テレビだけでもすばらしい　知之
三井寺の鐘絵はがきに鳴りやまず　正雄
拉致家族返せコールも届かない　善之
台風に日本列島休みなし　蕉子
ノーベル賞未来を託すマララさん　紀子
どの花も散る宿命を持って咲く　富子
未来へとつなぐ命のたくましさ　日の出

豊中もくせい川柳会（大阪）藤井　則彦報

入口で躊躇している福の神　英旺
歩があれば詰むのを逃がし悔しがる　庸佑
貧乏を笑い上戸が慰める　肇
母子手帳母の国へのパスポート　幹治
日本海さびしい歌が多すぎる　とーな
入選が句作り仲間殖やしおり　武彦
新米を入れて張りきる炊飯器　美佐子
平凡な度胸静かに燃えている　雀舎
大阪でジャイアンツファン名のれない　美津子
理由など斟酌しない成果主義　健二
心だけが入る私の熨斗袋　(永)玲子
赤門も通るだけならフリーパス　歌留多
燃え盛る紅葉のさっと散る度胸　堅坊
珈琲が入りましたと助け船　千鶴子
買い言葉そんな度胸もないくせに　耕治
貧しくても温かかった茶の間の灯　美智代
行く末を推理しながら仰ぐ空　則彦
泣き声ではっと沸き出るくそ度胸　宏子
金はないけれど貧しいこともない　見清
無人駅下りた理由はきかないで　紀華
度胸では負けぬ鴉と彼岸花　求芽
バイブルが貧しいこころ和らげる　(岩)玲子
ポケットの辞表が悩む子の寝顔　茂
人生の岐路にたずねる道祖神　巴子
公僕の道理外れた世の乱れ　満作
貧乏なんてこわくなかった若かった　葉子
絵手紙は渋くおさめる秋の色　久子
カマキリの度胸わたしに刃向う気　靖鬼
マッチ売りの少女いのちの灯をともす　きらり
あるがまま踏み越えて来たわが山河　ヨシエ

京都塔の会　桝本　宏子報

良い仲間支えあっての優勝旗　忠子
古都京都多くの国の視線受け　輝美
外国へ来たかと思う金閣寺　満子
水着仲間街で会ってもわからない　益子
相づちでバランス保つ聞上手　文代
朝ドラは砕け心のビタミンＣ　悦子
持ち味を生かす京都の薄い味　保子
別れますかもうバランスが取れません　昭
悔いのない余生に心砕く日々　則彦
人生のバランス中庸の道を行く　泰夫
街並みがシックになった京の街　弘之

フィールズ賞も京大がとりました　啓子
砕いても角の取れないまま後期　葉子
京都から発信いくさのない世界　求芽
嫁姑息子を軸にやじろべえ　福子
物価高へバランス取れよ年金も　堅坊
大事です心も食事もバランスが　弥生
八〇歳のバランス杖がいりますの　篤子
亡き父母よ姉妹仲ようやってます　朝子
仲人の口に乗せられこの苦労　五月
子燕を真ん中にして北へ発つ　美津子
一歩外これみよがしのペアルック　ふりこ
砕いては造り直していく歴史　欣之
遺跡から砕けた土器が語り出す　庸佑
家計簿のバランス母の手内職　宏子
世界からウィラヴキョウトと慕われる　英旺
仲直り笑顔も一つもって行く　万紗子
わだかまり溶けてまあるい席につく　義昭

川柳藤井寺（大阪）　鴨谷瑠美子報

会議室部長が見てた大欠伸　まつお
あの時の昼寝を悔やんでるうさぎ　いさお
うぬぼれた油断へ敵が手を上げる　悦子
油断してベルトの穴が深呼吸　キーキー
だまされてやっと分った人のよさ　一文
うちの人女を作る勇気ない　光男
鯖を読む度に白髪が増えてくる　龍一
鯖さばく少し寡黙になっている　瑠美子
自己紹介歳を聞かれて鯖を読む　紀雄
遠き日の絆の味やさばを煮る　トヨ子
鯖よんで知らぬ顔して悪い人　庸佑
鯖すしはちょっとすっぱい恋の味　一歩
すぐに買うまだ鯖の目が生きている　フジ子
故郷の高知の鯖は日本一　雄太
オモロナイ男と鯖は酢でしめる　扶美代
数独の数字が踊る夢の中　喜代子
ギブアップしてなるものか数独に　シルク
数独に拉致されまして抜け出せず　勝弘
大阪発数独とけぬまま名古屋　みつこ
数独に弱くてすぐに眠くなる　美代子

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

にんげんに戻るひとりの旅枕　朝子
種蒔けば小鳥ちょこちょこ種ほじくる　茜
タイガース9年ぶりに男あげ　美江
芸なしで私三食いただける　かすみ
辛苦舐め酸いも甘いも知る枕　高鷲
胎動の度に感喜の母性愛　壽峰
吠え立ててないと忘れてしまわれる　修
安全と信じ切ってる壺の蛸　洋
七十を越しても葦は折れやすい　弘一
砂枕海と空とが溶けて青　郁夫
枕木の一つ一つが守る旅　賢子
原爆の時効認めぬ被爆国　祥昭
秋風が通って花が咲り出す　麗
初めての恋に時効はありえない　尚世
そんな事もう時効です妻も居る　弘風
ニンジンをちらちらさせてさあ仕事　秀雄
よく動く口だ食べたり喋ったり　さち子
教師また父兄に頭下げてケリ　博泉
戸籍簿に時効に出来ぬ罪ひとつ　仁
安眠の枕は廃炉しかないよ　惟圭
ハロウィンの前奏曲が長すぎる　恵子

事務所便り

十月四日の川柳塔まつりには多数のご参加を頂き誠に有り難うございました。当日の記念品小島蘭幸句集「再会Ⅱ」を一冊千円で頒布いたします。ご希望の方は事務所までTEL・FAX（06・6779・3490）へお申込み下さい。

合同句集発刊のためお休みをした「第三回春の川柳塔まつり誌上大会」を再開致します。応募締切りは二十七年二月二十日です。会員以外の方も多数ご参加下さい。

最近また、**応募用紙に氏名の記入漏れが目立ちます。用紙一枚ごとに必ずフルネームの記入をお願い致します。**

（山岡富美子）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 わかやま 吟社	14日(土) 14時10分締切 兼　題=後悔・リセット・とぼける 課題吟=道	和歌山ビッグ愛　〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼　題　〒640-8482 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
南大阪 川柳会	15日(月) 13時開場 助ける・階段・軽い・雑詠	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
豊中 もくせい 川柳会	15日(月) 13時40分締切 支度・誉める・だから・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急曽根駅・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2－8－4　江見見清
川柳 さんだ	16日(火) 13時30分締切 味方・プレゼント・握る てきぱき・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5－2－4　堀　正和
岸和田 川柳会	20日(土) 14時締切 昭和・焦る・ひらひら・ドラマ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19 中岡香代
和歌山 三幸 川柳会	20日(土) 12時30分開場 カレンダー・忘れる・悟る	和歌山商工会議所　4階　第2会議室 和歌山市役所西隣 〒640-8570 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
川柳塔 みちのく	20日(土) 17時締切 命・おろおろ・浮く	弘前市桶屋町4－7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-8275 弘前市城西1－3－10　稲見則彦
川柳 ねやがわ	21日(月) 13時締切 深夜・蹴る・傷	寝屋川市立総合センター　4階 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9 高田博泉 内　川柳ねやがわ
川柳 藤井寺	21日(月) 14時締切 計画・気品・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0037 藤井寺市津堂1－1－19　太田扶美代
川柳 ふうもん 吟社	21日(日) 13時30分開場 **没句川柳供養大会** サラメシ・二番手・温度差・真っ平 DNA・腑抜け・往生・敗者復活銀	日本海新聞ビル　5F　大ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
京都 塔の会	22日(月) 14時締切 ボリュウム・字・集める	京都ハートピア　地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328－202　都倉求芽
はびきの 市民 川柳会	28日(日) 14時締切 味・遅れる・ちょぼちょぼ 静か	陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏
川柳塔 すみよし	12月は休会	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2－4－9 古今堂蕉子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

12月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	4日(木) 14時締切 来る・徳・事情	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901　安土理恵
城北 川柳会	6日(土) 14時締切 矛盾・詰める・やんわり・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
富柳会	6日(土) 14時締切 演技・抽斗・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4－1－10 川柳とんだばやし富柳会　池　森子
倉吉 川柳会	6日(土) 14時締切 ハイハイ・どっしり・終える	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟社	6日(土) 13時45分締切 笛・鍵・薬・よろよろ	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366　錦織禮子
西宮北口 川柳会	8日(月) 14時締切 足袋・呟く・ジグザグ 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プレラにしのみや」 〒662-0084 西宮市樋之池町10－18－104 福島弘子
川柳 あまがさき	9日(火) 14時締切 燥ぐ・デパート・そっくり 自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5－20－14 加川靖鬼
ほたる 川柳 同好会	9日(火) 13時30分締切 雰囲気・祈る・すらすら	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
あかつき 川柳会	12日(金) 14時締切 争い・猫・人間・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル 2階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側) 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
川柳塔 さかい	12日(金) 13時開場 ゴール・耕す・折り句＝もせす	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31　村上玄也
川柳大阪	13日(土) 14時締切 ちぐはぐ・幅・反省	地下鉄・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 打吹	13日(土) 14時締切 国・叫ぶ・果て	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民 川柳会	14日(日) 14時締切 後悔・命・結ぶ・雑詠	八尾市渋川町　安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之

柳界展望

★第66回西日川柳大会は10月12日、岡山県久米南町文化センターで開催。同人成績は次の通り。

新家　完司

全日本川柳協会理事長賞

小島　蘭幸

岡山県川柳協会会長賞

天位　栃尾　奏子

僕はもう君のフラフープの中だ

新家　完司

柚子を添えるとイケメンになるサンマ

★第65回西宮市民文化祭川柳大会は10月12日、西宮市民会館で開催。出席者100名。同人秀句。

白川　淑子

現し世に生きる突然ベルが鳴る

上垣キヨミ

ロボットのように働く母でした

★第29回国民文化祭川柳大会は10月19日、秋田県大潟村で開催。同人成績。

国民文化祭実行委員会会長賞

三島　淞丘

農民の手から零れてゆくお米

★第64回岸和田市民川柳大会は10月19日、岸和田市民福祉総合センターにて開催。参加者102名。同人の天位次の通り。

山本希久子

てにをはの迷いを抜けて輝く詩

★第3回さんだ川柳大会は10月21日、三田ゴルフクラブで開催。出席者78名。参加者94名。同人の成績は次の通り。

大会賞

黒田　能子

食欲の秋に素直になるわたし

金川　宣子

曲がっても味は保証の地場野菜

★第35回鳥取県川柳作家協会賞

大賞　上田　宣子

骨を鳴らして一本の冬木立

準賞

中原みさ子

恋しくて形見のシャツに身をつつむ

★第38回鳥取県川柳大会は10月26日、米子コンベンションセンターで開催。同人の成績次の通り。

鳥取県知事賞

上田　宣子

居酒屋を出ると知らない街だった

鳥取県議会議長賞

新家　完司

おもしろい仲間この世はおもちゃ箱

新日本海新聞社賞

両川　無限

旅半ばテンカウントを遠く聞く

★第38回寝屋川市民川柳大会は11月3日、寝屋川市立産業会館で開催。参加者74名。本社同人の天位次の通り。

冨山ルイ子

これ以上の楽園はない同居中

木本　朱夏

怠け癖ついてひらひらしろい指

★静岡たかね誌500号記念誌上大会には、750名の応募者があり本社同人成績次の通り。

グランプリ　菊地　政勝

幸せもうなぎもうまく掴めない

準優勝　木本　朱夏

脱皮して少年鮎の香を放つ

選者特選賞

牧野　芳光

生き様を語る鱗を剥ぐように

▽**ご芳志御礼**△

○奥田みつ子さん（相談役・西宮市）より、創刊90周年お祝として金一封を拝受。

▽**出版**△

◇永田俊子『俳句・短歌・川柳集―野菊』四六判302頁、私家版

▼**訃報**▲

■神夏磯典子さん（参与・大阪市）は10月28日、逝去。享年八三。10月30日の告別式には西出楓楽、相談役、前たもつ相談役他、柳友が多数参列。

▽**お詫びして訂正**△

▼11月号＝P1下段22行目、山内静内先生→静水。P85下段21行目、第二次対戦→大戦。P97下段2行目、ムーの群れ→ヌー。P142段目22行目、121頁→125頁。

▽**新誌友紹介**△

鈴木　独子　長岡京市　紹介者　桝本　宏子

小畑　宣之（のぶゆき）　山田　葉子（ようこ）　尾道市　紹介者　小島　蘭幸

森本　峰子　三田市　紹介者　萩市　紹介者　豊中市　紹介者　山形県　高槻市　沖縄市　三次市　紹介者　小島　蘭幸

岡部佳代子　北野　哲男

上出　修　柿花　和夫

鈴木　良次

松岡　重子（しげこ）

森山　文切（ふみきり）

伊藤　寿子

常任理事会＝11月7日㈮①大阪川柳大会関連②川柳塔まつり反省③第21回川柳塔まつり④春の川柳塔まつり誌上大会⑤定例確認事項⑥各部報告

次回＝12月5日㈮AM10時～

第5回 高田寄生木賞

選　者　樋口由紀子（兵庫県）
木本　朱夏（和歌山県）
渡辺　隆夫（神奈川県）
梅崎　流青（福岡県）
野沢　省悟（青森県）

作　品　2句　2014年に作句されたもの「B5判用紙使用」（既発表・未発表問いません。時事・雑詠・題詠印象吟・サラ川等、また他の賞を受賞作品でも可）

※投句されました作品は氏名入りで、全句発表誌に掲載します

会　費　1000円（発表誌込み）
現金または郵便振替「川柳触光舎」
02240-8-82005

締　切　**2015年1月31日**

投句先　〒038-0004 青森市富田2丁目7-43
野沢 方　川柳触光舎

大　賞　1名　川上三太郎直筆色紙（額入り）

特選賞（各選者特選）　**秀句賞**（各選者秀句）

発　表「触光」42号（2015年6月号）

第115回 中部地区誌上川柳大会

宿題と選者（各題2句・読み込み可）

「園」　長島敏子選
　　小金沢綏子選

「砕く」　矢沢和女選
　　齊藤由紀子選

「いつか」　山倉洋子選
　　池　森子選

「伝言」　平田朝子選
　　加藤田鶴子選

参加料　1000円（定額小為替など・切手不可・発表誌呈）

賞　最優秀句賞　合点30位まで呈賞

締　切　**平成27年1月31日必着（厳守）**

発　表「月間中日川柳」（平成27年4月号）

投句用紙　所定の用紙（コピー可）

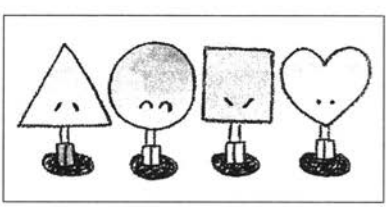
投句先　〒457-0038 名古屋市南区桜本町137
荒川八洲雄　電話052-811-2347

主　催　中日川柳会

印象吟

インスピレーション・ナビ

大西泰世選



イメージイラスト

柳箋に2句

締切　**12月15日必着**
2月号　発表

第3回 広島県川柳協会誌上大会

課題と選者（各題2句・3名共選）

「新しい」　中村雀鳴
　　岩本笑子　共選
　　前川千津子

「自由吟」　増田マスエ
　　小林てるじ　共選
　　森中恵美子

投句要領　規定の用紙（コピー可）または B5用紙に2題4句を連記のこと

投句料　1000円（定額小為替）
作品発表誌呈

締　切　**平成27年2月末日（当日消印有効）**

投句先及び連絡先
〒739-0612　大竹市油見2丁目2-29
弘兼　秀子　宛
TEL/FAX　0827-52-7611

主　催　広島県川柳協会

第29回 国民文化祭・あきた2014（10月19日）

本年度国民文化祭は秋田県「ホテルサンルーラル大潟」で開催された。
事前投句、高校生・一般の部は1,990名、小・中学生の部は9,858名、当日参加は432名。
大会各賞は下記のとおり。（太字は同人）

◎高校生・一般の部

文部科学大臣賞

セシウムの消える日を待つ滑り台　秋田県　斉藤　豊康

国民文化祭実行委員会会長賞

農民の手から零れてゆくお米　島根県　三島　淞丘

秋田県知事賞

道化師が笑うああ痛いのだろう　静岡県　水品　団石

第29回国民文化祭秋田県実行委員会会長賞

花筏まだプライドを持っている　長崎県　平井　翔子

第29回国民文化祭大潟村実行委員会会長賞

母さんが居るから減らす酒の量　愛知県　冨田　末男

大潟村教育委員会教育長賞

にんげんが渇いて乱れだすマナー　大阪府　荻野　浩子

一般社団法人 全日本川柳協会理事長賞

答には遠いが伸びて来た花芽　秋田県　大石　一粋

秋田県川柳懇話会長賞

心だけ持って来た嫁それでいい　神奈川県　西村美保子

◎小・中学生の部

文部科学大臣賞

新緑になって大きく見える山　小6　浅野　知里

国民文化祭実行委員会会長賞

こめパワーきょうもげんきにがっこうだ　小1　増山　小春

秋田県知事賞

渡り鳥私も強く生きたいよ　中3　梶原　楓

第29回国民文化祭秋田県実行委員会会長賞

先頭は風が痛そう渡り鳥　中3　横澤　日菜

大潟村長賞

太陽のにおいがしてねおいしいね　小5　岡本梨世蘭

第29回国民文化祭大潟村実行委員会会長賞

夏の空咲かせてみせろ大花火　中3　小林　叶夢

大潟村教育委員会教育長賞

ケガしても必死に飛ぶよ渡り鳥　中2　有田　憲一

一般社団法人 全日本川柳協会理事長賞

教室の窓に有明海がある　中3　平川　大晴

秋田県川柳懇話会長賞

仲直り母と一緒ににぎり飯　中1　吉田　愛佳

二次選者　大野　風柳・小島　蘭幸・雫石　隆子・平田　朝子・平山　繁夫

全日本川柳誌上大会のご案内
（平成柳多留第18集）

課題と共選者（各題2句・連記）

「ルーツ」　廣島　英子・大楠　紀子　共選
「ゆったり」　花道　歌子・川端　一歩　共選
「招　く」　大野風太郎・淡路　漠眠　共選
「種（字結び可）」　館岡　稲風・上甲　満男　共選
「栄　える」　辻　晩穂・平山　繁夫　共選

第二次選者　岡崎　守　河内　天笑　佐藤　岳俊
渡辺　梢　田中　新一

参加費　2000円（投句料・『平成柳多留』第18集代金含む）

締　切　**平成27年1月31日（土）当日消印有効**

参加方法　参加用紙に記入し、参加費2000円（振替または小為替）と共に左記へご送付ください

〒530－0041
大阪市北区天神橋2丁目北1－11－905
一般社団法人　全日本川柳協会
電　話　06－6352－2210
FAX　06－6352－2433
振替口座　00970－9－35755

第28回 NHK学園全国川柳大会

指定の用紙（コピー可）または大きさなど同形式でご投句ください。
ひとり何組でも、どなたでも応募できます。

事前投句　（雑詠2句または雑詠2句＋各題2句）
課　題　「雑　詠」　原　光生・竹田　光柳（共選）
「進　む」　木本　朱夏
課　題　「雛」　森中惠美子
投句締切　**12月22日（月）消印有効**
投句料　①雑詠2句の場合　1200円
②雑詠2句と課題「進む」「雛」各2句、計6句の場合、2400円
※課題のみの投句はできません
※当日投句のみの参加は当日1200円を頂きます
送金方法　郵便小為替（定額小為替、普通為替を郵便局で購入）
現金書留のいずれかをご利用ください（切手不可）
用紙請求先・投句先
〒186－8001　東京都国立市富士見台2－36－2
NHK学園　全国川柳大会事務局
TEL　042－572－3151㈹
日　時　**平成27年3月7日（土）**　13時～16時
締　切　12時50分　**会　場**　くにたち市民芸術ホール
当日投句選者　「ポイント」　渡辺　梢
「給　料」　島田　駱舟
賞・発表　各題ごとに特選・秀作・佳作
大会大賞・文部科学大臣賞の候補になります
作品集は大会1カ月後に投句者全員に郵送

編集後記

★十二月某日ブランコ揺りいたり　薫風

★早々に残念なお知らせです。ご愛読頂いた小栗清吾先生の「江戸を楽しむ」は、今号で終わりました。先生は「柳多留全釈」という壮大な企画に取り組まれます。ますますのご活躍をお祈りします。

★『『再会Ⅱ』を読む」の筆者・弘津秋の子さんは時実新子の「川柳大学」出身。現在川柳「宙」在籍。句集というものは「読み手に記憶してもらえる一句があればいい。作者渾身の一句を見つける努力がいる」の一節に目を開かれた。『再会Ⅱ』頒価は送料共一〇〇〇円。希望者は事務所までご一報を。売上げのすべては川柳塔に寄贈されます。

★関東の島田駱舟さんが代表を務める「印象吟句会」がおもしろい。会報誌「銀河」No.172号を覗いてみる。8月例会出席者43名。投句者68名。課題には絵あり、女優の言葉あり、音楽あり、席題のシナモンに至っては芳しい匂いが誌面から漂ってきそう。何でも川柳にしてやろうという遊び心が楽しい。

★印象吟ばやりだ。長野県の丸山健三さんの「川柳の仲間・旬」が新年号から、「印象吟イマージュ」を始める。さて我らの印象吟「インスピレーション・ナビ」2月号発表の締切は12月15日必着。投句をお忘れなく。

★卒寿を迎えた上方落語の人間国宝・桂米朝さんのロボットが作成されたという。テレビで観たところ米朝さんにそっくり。人生相談に答えてくれるとか。人生相談といえば、ホームレスの自立を応援する雑誌ビッグイシューの「ホームレス人生相談」がおもしろい。

★読者の悩みにホームレスの方が答える。どうおもしろいかって？　ビッグイシューは一冊三五〇円、うち一八〇円は販売者の収入になる。興味のある方は手に取って頂きたい。

（朱夏）

○編集長に『緑地帯拾遺』というエッセイ（昭和五十四年度発行）をお借りした。著者は、菅井康郎氏。映画「忠臣蔵」ものがたりの項があり、そこから面白そうなものを拾ってみた。

○昭和九年、日活作品で、大河内伝次郎が内蔵助、片岡千恵蔵が内匠頭を演じ、義士の引き揚げシーンに、シューベルトの「未完成交響曲」を流し、話題になった。

○昭和十二年、大都映画で、内蔵助を、阿部九州男が演じている。興味が湧いたのは阿部九州男と言えば、東映時代劇の悪役のイメージが強いのだが・・・

○昭和二十七年、東映で千恵蔵は浅野内匠頭と、大石内蔵助という両極端の二役を演じている。昭和になってから、この二役は演じられていない。

○オールド映画ファンの立場から、頭の中が風化しないうちに、昔の映画の思い出を書き残しておきたかったとの著者の弁に共鳴を受けた。

（まつお）

ひとこと

川柳での兄弟子たち

川柳の世界に案内して頂いたのは米子・きゃらぼくの成田雨奇さん。もともと短歌の先生で、詩人であり俳人でもある。　初めて参加した松江市の大会。「どうせ入選は無理だから」と居眠りをしていたら入選、隣に座っていた雨奇氏に揺り起こされ「自分の名前を大きな声で！」、二、三度それが続き、言葉にはしないが「新米のくせに自分より入選が多いのはけしからん！」そんな気配であった。

もう一人、姓は同じだが妻ではない後藤美恵子さん。この人にもなんとか追いつきたいが、いいところまで追い込んだかなと思うと、またリードされると言った案配。米子近辺の後藤さんを集めての会を思いつき、私をフォローしてもらっている間柄。　他に馬田みどりさん、白根ふみさん、大先達の八木千代先生、林瑞枝先生、わが師政岡未延子先生、会長の竹村紀の治先輩、他たくさんの仲間と一緒に川柳を苦しみながら、楽しんでいます。

（後藤　宏之）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（2月号）

地名　　市都道府県

姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「平　凡」（12月15日締切）

2月号発表

古久保和子 選 ――共選―― 牧野　芳光 選

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

B　A

地名

市都
県府道
姓
雅号

切らないで下さい

B　A

地名

市都
県府道
姓
雅号

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

2月号発表（12月15日締切）

川柳塔（8句）小島蘭幸選
水煙抄（8句）西出楓楽選
愛染帖（3句）新家完司選
檸檬抄「平　凡」（2句）牧野芳光選
インスピレーション・ナビ（2句）大西泰世選
「布　」久保田千代選
一路集（3句）「納　豆」加島由一選
「ちょっと」大川桃花選
初歩教室「豆　」（3句）山口光久担当

3月号
檸檬抄「羽ばたく」
一路集「気　迫」「手探り」「トンネル」
初歩教室「占　う」

本社12月句会

とき　12月5日㈮　13時開場・13時40分締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし「本社句会にみるユーモア川柳」鈴木いさお氏
席題「　　」佐々木満作選
兼題「　器　」加川靖鬼選
「勝　つ」原田すみ子選
「エコー」長井善純選
「気　配」河内天笑選
「のんき」小島蘭幸選
（各題2句以内）
会費　1000円　**投句料**　500円（切手可）

本社1月句会
7日（水）午後1時から
兼題「　祝　」「恋しい」「クリーム」「仰　ぐ」「ピカピカ」

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第32年度　夜市川柳募集

第7回「打　つ」　川上大輪選
ハガキに3句　**12月20日**締切
投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**川柳塔さかい**

定価　八百円（送料86円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一四年（平成二十六年）十二月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十六年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇五一号　川柳塔　十二月号　定価　八百円（送料　八十六円）

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの
一句を募集します。

・兼題　「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸　選
・応募要領　郵便ハガキに2句、郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記してください。入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。
・発表　本紙4月号にて発表いたします。
・締切り　2015年1月31日（当日消印有効）
・投句先　〒543-0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201号室　川柳塔社　ゴマ川柳係　宛

オニザキの
つきごま
手作りの味わいに
こだわり続けて
五十七年

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東3丁目7番8号　〒584-0023
TEL 0721-25-7210　FAX 0721-25-9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号　〒103-0021
（日本橋川村ビル4F）
TEL 03-5255-5158　FAX 03-5255-5159
http://www.koki-envelope.com

雑誌 05703－12